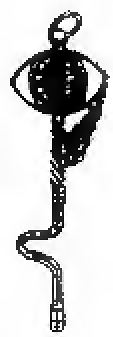
エニックス文庫

ドラゴンクエスト
精霊ルビス伝説 下

魔の山オーブ



久美沙織

ENIX

ドラゴンクエスト

精霊ルビス伝説 下

魔の山オーブ

イラスト／いのまたむつみ

目次

第五章 魔の山

1

ぶん、と唸るような音が次々に耳許を掠めた。地中に隠れたダトニオイデスが容赦なく投げつけてくる岩弾の嵐を、クリプトカリオンは仁王立ちになり腕組みをしたまま、ひょいひょいと頭を逸らし、ぎりぎりの刹那にやり過ごした。そのにやにや笑いは少しも揺るがぬ。が、五芒星の徽なす片眼の赤い入れ墨は、奮ぶる血を示すかのように鮮やかに燃え立っている。

「ちゃちな技を繰りだしおって」

歪めた唇から、クリプトカリオンの嗤い声が響いた。

「ぬし、俺をなめているのか?」

ダトニオイデスの応えは、彼方より回転しながら一直線に降ってくる岩盤群であった。サ

ッと宙に躍り上がり身軽にとんぼを切って位置を変えるクリプトカリオンを、盤はどこまでも追いかけた。空を切り裂き、樹木を薙ぎ払い、すとすとと地面に突き刺さっては、凄まじい爆烈音を上げて四散する。

「バカめ！　それしきの手は喰わぬと言っておろうが」

　盤が全滅するのを見て笑いながら小高い丘にひらりと降り立ったクリプトカリオンは、だが次の瞬間、うっ、と凍りついた。その両足を土中より掴み、たちまち伝い上がって、脛に腿にぎりぎりと固く巻きつけてくるものがある。数多の棘を持った太い触手だ。棘はクリプトカリオンの四肢に喰いこむと、とたんに鳥の嘴のように中心からがばりと開いて肉を割り裂き、ガツガツと喰いついた。稲妻の主の衣服のあちらこちらに、たちまちもとの布地の色より濃い色合いのねっとりとした染みが浮き上がり、広がってゆく。

「なんだこの化け物は」

「ああ、すまん」

　土煙をあげながら、ダトニオイデスが対する丘の頂に現れた。こなたは厚手の黒革を繋いだ鎧ひとつの逞しい裸体で、その肌は油を塗ったようにつやつやと輝いている。

「ハシウドンカとかいうのだ。草と獣、どちらともいえぬ生まれ損ないでな、地中深く潜み、その根のようなもので通りすがりの間抜けを捕らえては餌とする。我が領国には滅多にかかるものはないからな。たまの馳走だ、骨という骨を砕き生き血を吸い尽くすまでけして解放

せぬ気だろう」

「そうか。ぬしはずいぶん剣呑なものを珍重・丹精しておるのだな。かくも姑息な罠のかけかた、さすが、主人の気性に似合うておるわ」

　クリプトカリオンは長身を一瞬柔らかくすくめるようにすると、気合いをこめて筋肉に力をこめ、全身から雷撃を発した。

「ぎゃあっ！」

　不気味な生き物は、寸断され焼けただれてぶすぶすと嫌な煙を発し、僅かに生き残ったものもびくびくと痙攣しながら大慌てで土中に逃げ戻った。クリプトカリオンが声をあげて笑うと熱風たちまち渦をなし、あたりに散ったダニトオイデスの手のものたちや岩石や草木が、みなすっぽり抜けながら飛んでいく。がんと根を踏ん張ったものたちも、ぼん、と破裂音をたてて、爆発するように炎上しはじめた。

「おお、失敬。あまりにこそばゆかったもので、つい」

　クリプトカリオンはその腕に纏いついた消し炭をフッ、と吹き飛ばした。

「なにやら、ぬしの大事な庭を焦がしてしまうたようだ。すまぬな」

「なんの。勝負に遠慮は無用」

　片脇で爆発した巨木から吹きつける熱い風に、ダトニオイデスの黒い巻毛がざわざわとそよぎ、その腕を覆った剛毛も一瞬のうちに消え去った。が、ダトニオイデスは大岩のように

平然とその場を動かない。

「暖かくなってきたな。この真冬にありがたいことだ」

「炎は偉大だ。欠くことはできぬ」

言い終わらぬうちに、クリプトカリオンの全身から赤い光が放たれ、みるみるうちにふくれ上がる。彼は、気合い一閃、両の掌を相手に向けて突きだし、収束する稲妻の束を放った。しかしダトニオイデスも負けてはいない。即座に土砂を湧き上がらせて盾となし、うまうまとこれを吸収する。

「ふふん。大地もまた偉大だぞ。おまえとて土の恵みを知らぬわけではなかろうに。お、しかし、これはいいな。肩凝りが解れる。もそっと右。もっと下にしてくれんか。あ、そこそこ、そのへん」

「長どのはなにかと気苦労が多いと見えるな。ひと思いに楽にしてやっても良いぞ」

「いやいや、これでなかなか他人任せにはできぬものよ」

心地良さそうに瞳を細め、ダトニオイデスはいやいや、と頭を振った。

「なあ、ほんとうに長ってもんは大変だぞ、クリプトカリオン。なにしろ、やくたいもない言いがかりに押しかけて、ちゃちな花火を散らしてただを捏ねる奴が、いつ現れるやもわからない」

「さぞかし日ごろの行いが悪かったのだろう」

クリプトカノオンの駆け行く先の斜面が、流砂となってずぶずぶ崩れる。硫黄臭い毒の気が地中深くよりごぼごぼと立ち上ってくる。稲妻の主は跳躍して宙より熱波を発し、その瘴気をたちまち薙ぎ払い、蒸発させる。

「長の家に婿養子になるなんて、おまえさんもつくづく阿呆だな。身のほど知らずは疲れるぞ」

「ぬかせ」

次々に炸裂する火炎弾は拳で突き消してしまうのだが、ダトニオイデスの革衣は休む間もなく火の粉を浴びて、じゅうじゅうと焦げ臭くなっている。それでも、彼は気に病む様子もない。

「だってそうだろう。傍系分家の次男坊なら、気楽な暮らしもできたものを。ばかでも腰抜けでも傍迷惑にはならないし、耄碌爺さんになるまでしぶとく長生きできたかもしれないぞ。なのに、一生、あのお転婆ルビスの機嫌取りをしなきゃならなくなるとは不幸なことよ。いやはやほんとにご苦労さん」

「ぬけぬけと白を切りやがる」

「白を切る？」

「おうさ」

クリプトカリオンの全身が熱をもってぼうっと光りはじめ、その顔を離れて宙に浮き上が

った五芒の徽がどくりどくりと脈打つように輝きを増した。
「この期に及んで、知らぬ存ぜぬはもはや無用だダトニオイデス！」
「……出たな、長虫」
みるみるうちに真紅の大蛇の変化を現し、鎌首を擡げて炎の舌をちらちらと覗かせる稲妻の巨の分身に、ダトニオイデスは片側の頬に、あどけないほどの笑窪をくっきりと刻んだ。が、その手は、腰に佩いた大地の剣の柄に、今、初めてかかっている。
「噂には聞いていたが稲妻の。ひどく不細工な姿におなりで」
「おきやがれ。その傲慢もこれまでだ」
大蛇のからだの周囲には噎せかえるほどの蒸気が立ち上っている。あたりはむっと熱くなった。ダトニオイデスはいつの間にか汗をかいた掌を、無意識のうちに浅黒いその裸の腿に擦って拭った。
「勝負だ、ダトニオイデス」
「望むところ！」
「おうっ!!」
五芒の徽が星型の稲妻となって迫り来るに、ダトニオイデスは素早く闇のごとく黒い大地の剣を抜き放ち両手に構えて、しかとこれを受けた……！
「だ……大地の力よぉっ！」


MUTSUMI

星稲妻の持つ光と熱の精力が漆黒であるはずの彼の剣を見つめることもできぬほどの鮮やかな紅蓮に燃え上がらせる。剣全体がばちばちと放電し、大気に甘いような苦いような匂いを撒き散らす。ダトニオイデスの巻毛は生き物のように立ち上がった、が、その両足は大地を踏みしめて微動だにせぬ。地と我と剣とが一体となり、あたかも彼は土より生え出でしもの、岩がひとの形をなして立ったるもののように見えた。

　彼は奥歯を喰い縛り、渾身の力をこめた。やがて、剣は、じりじりと稲妻を押し返しはじめたのだ……！

「なんだなんだ、クリプト！」

　ダトニオイデスは大声で笑った。

「見かけ倒しもいいところ。おまえの力はそんなものか！」

「ふん、強がるなダトニオイデス。そらそら、腕が震えておろう。熱かろうが。その手が燻りはじめたではないか！」

「こんな火傷、ものの数ではないわ。見よ。そなたの五芒には既に切れ目が生じておる！」

　そう、大地の剣の突き刺さっている部分から、稲妻の星型が歪みだしているのだ！

「ぬ」

「わはははは、そうれ、それぃ！　見ろ。切れる、切れる、切れるぞ！」

　ダトニオイデスはギリギリと剣を押しつけた。

「血の恵みとは酷なるものよの。高き尊き血の直系と、哀れにも傍らなるものとのこのあからさまな力の差よ。貴様は俺の敵ではない。はははは、それそれ、今こそ思い知るがよい！」
「ううぬ、糞ぉ……炎よ、熱よ、稲妻よぉっ！」
クリプトカリオンは忿怒と苦痛にのたうちながら灼熱した。彼の分身である大蛇の星稲妻に押し当てられ、くさびのようにこれに喰いこんだ黒き剣は、彼自身の瞳を囲む同じ形の徴の同じ場所にも、全く同じだけの力となって感じられるのである。
「こ、こんな石剣ごとき、なんの笑止。えい、燃えろ、焦がせ、砕いてしまえぇっ!!」
「邪悪なり、蟒蛇。見よ聖気は我にあらんんんっ！」
「いやぉっ!!」
「だあっ!!」
双方の発した気合いが交わった。火と土と、地上を支える五つの聖なる力のうちのふたつが、ここに真っ向から衝突した！
地は裂け、大気は燃え、凄まじい光が爆発するように広がった……！
この戦いからほど遠からぬ場に不運にも居合わせてしまったコリドラス家のまたカリクテイス家ゆかりのものたちは、みな五行の聖気の激しい擾濫に、内臓を捕まれ振り回されるような苦痛と悪心を覚え、目に見えぬ風に薙ぎ倒されるようにばたばたと打ち伏した。血反吐を播き散らすもの、髪がみな抜け落ちるもの、痙攣して暴れ回るもの、あらぬ方角に関節の

折れ曲がったもの……酸鼻極まる光景が見渡す限り続いた。誰もが、混沌たる意識の片隅で、何か重大な途方もないことが起こったのを知覚した。

火か土か？　勝ったのはいったいクリプトカリオンなのかダトニオイデスなのか？　あるいは、両者共に倒れたのではないか……？

期待と不安と焦燥が累々と横たわる精霊等のうちを疫病のごとくに駆け抜けたが、素早く起き上がって、ことの真相を見定めることのできるほどの体力・精神力を持ったるものは、ここには生憎ひとりとてなかったのであった……。

「……うう……うう、糞」

なかで早急に我にかえったは、やはり、ダトニオイデスである。彼は顔をあげようとして虚しく土埃を掴み、手の中に魔剣のないことに気づいてぎくりと背を凍らせた。

「ど、どこに⁉」

焦り探すも焦点は合わぬ。眩暈のために、遠く近く、滲んで世界が定まらぬ。己が掌を折れよとばかり握りしめ、痛みによってようやくカッと開けた眼の血色に染まった視界の中に、彼は不意に信じられないものを捕らえた。五芒の徴ある側の瞳を押さえどくどくと血の涙を垂れ流しながら足掻きうめいている稲妻の主クリプトカリオンの、その指の隙間からにょきりと高く生え立ったは、かの漆黒の剣ではないか……！

「おお……おお……お……おのれ、大地の……お」

クリプトカリオンは怒号した。が、既に大蛇の幻を現出する力を失っている。唯ひとつ残ったほうの瞳を激怒と狂熱にギラギラと輝かせてダトニオイデスを睨みつけながら、彼はふらふらと片膝立ちになった。
「こ……殺してやる……殺してやる……！」
が、その歩みは二歩と続かぬ。
「あううっ！」
貫かれた瞳の痛みに耐えかねて、稲妻の主はばちばちと周囲に火花を散らしながらまたもがくりと膝を突く。そこへ。
「クリプトカリオーン!!」
火喰い鳥の艀が急降下してきた。巧みに操作しているのは、真っ赤な髪、真っ赤な衣裳の華奢な姿。……顔までは見定められないが、明らかに女。
(……ルビスか……？)
ダトニオイデスは心底ぞっとした。今、炎の種族の次なる当主の苛烈なる攻撃を受けたならば、いかな頑健を誇る彼といえども持ち堪えようがない。
(卑怯なり、カリクティスめ!!)
が、女にはそのような意図はなかったらしい。
「しっかりして。……ほら、乗ってったら！」

一見乱暴に、しかしあくまで細心に、稲妻の主の腕を引く。クリプトカリオンは首を捩って女を見上げ、驚愕した。
「アリナじゃねぇか」
「そうだよ。嬉しいかい」
「バカ言え！　……こんなとこまで来やがって……しょうがねぇ奴だな」
クリプトカリオンの頬に凄まじいまでの笑みが浮かんだが、すぐに消えた。
「放せ。いいから俺に構うな。男の戦いに口を出すんじゃあねぇ」
「バカはどっちだよ。早く手当てしなくっちゃ死んじまうじゃないか。あんた、復讐はどうしたんだよ、倒す相手が違うんだろう？」
「うう」
「そらそら。おとなしく、乗った乗った」
「ま、待てぇっ！」
ダトニオイデスは叫んだ。
「……おのれ、やるものか！」
「うるさいねぇ」
アリナは、まだ抗うクリプトカリオンを叱りつけつつ重そうに引きずり、やっとのことで艀に乗せると、震える腕をいっぱいに伸ばして苦悶するダトニオイデスを冷たく見下ろし、

ふん、と鼻先で嘲笑った。
「威張るんじゃないよ。まったくいいざまだよ、色男。今のあんたは赤子も同然。とどめを刺してやってもいいが、あたいなんかがいいところ盗んじまったら、このひとにあとからドヤされるからねぇ。ま、あえて、女のお情けをかけてあげようじゃないさ。一生恩に着ておくれよぉ」
「こ……このあばずれめが！……」
「はん、突っ張る突っ張る。しょうのないガキだねぇ。……おっと、この剣はなんだい？」
「ぬ、そ、それは……！」
「へぇ。たいしたお宝らしいね。貰ってゆこう」
艀に昇り、鳥たちを方向転換させながら、アリナはもう一度肩越しにダトニオイデスを見て妖しい瞳を瞬かせた。
「もしもこいつを返して欲しくば、ディアルトとかいう罰当たりを連れて、頭を下げに来るんだね。じゃあ、あばよっ！」
「ま、待てっ!!　逃すか……あ……うっ」
ダトニオイデスは走りだそうとしたが、立ち上がることも叶わなかった。全身の皮膚が稲妻のために焼けただれ、肉が、骨が、じくじくと赤いものをしたたらせ燻っている。革衣などとうにない、あまりの高熱に出合ったために、その瞬間に燃えるというよりも一気に蒸発

してしまったのだった。
「く、糞ぉ……もう少しだったのにっ!!」
飛び立つ艀が、霞む視界をみるみる遠ざかってゆく。ダトニオイデスはぎりぎりと歯を合わせた。含んでしまっていた砂利が砕けてばりばりと鳴った。
(しかし……しかし、どうも妙だ。復讐だの罰当たりだのと……連中はディアルトを敵のように言う。ラーミアを手に入れるために折衝を持ちたかったのではないのか? 炎一族とあやつの間に、いったい、何があったのだ……?)

2

「何用だ、こわっぱども」
黒竜の声は、谷を震わせ木霊した。巨大な吐息が白く濁り、霧となって山肌をどこまでも漂った。その声の振動のためにか、どこか遠くで雪崩が起こったらしい。低い、肚をざわざわと蠢かせるような不穏な響きが伝わってきた。
が、その音と体内の感触が、生まれて初めて眼にした途方もない怪物の姿にすっかり凍りついていたディアルトとヤベ・ヤベを、我にかえらせたのである。ふたりは顔を見合わせ、どちらからともなくため息をついた。

「竜だ」
ディアルトがつぶやいた。
「この眼で見ることができるとは思ってなかったぜ」
ヤベ・ヤベが髭をもぐもぐさせながら囁き返した。
「息子にいい土産話になる」
「無事に戻れればね」
「よせやい。それでなくても小便ちびりそうなんだ」
「怖いのか」
「怖くないのか」
「怖いに決まってるじゃないか……！」
「何をごちゃごちゃ言っておる」
竜が吠え、嗤うような顔をした。その巨大な顎にずらりと並んだ鋭い牙に、空中のふたりは揃って武者震いをした。
「余を訪ねて来たならば、もそっと近くに寄れ！」
「あっ！」
竜がその金色の瞳をきらりと光らせ、鉤爪のある前足を差し招くようにかすかに動かすと、ふたりの乗ったラーミアはぴくりと全身を緊張させて、ぎくしゃくと羽ばたき、進みはじめ

た。

「うわぁっ!!」

「こ、こら、どうしたんだ?」

どんなに強く手綱を引き腿を引きしめ踏ん張っても、巨鳥は止まらなかった。乗り手はおろか、鳥自身の意志にも反して、彼等は竜の誘うままに吸い寄せられてしまったのである。

地面に降り立つと、一羽のラーミアはそのまま力尽きたように翼を畳み、眼を閉じて動かなくなってしまった。

「こっちに来い」

逆らう術はなかった。ディアルトとヤベ・ヤベは恐々鳥の背を降り、巨大な竜の前足のそばまで歩いて行った。

「名は—」

と、竜は問うた。

「俺は、三の谷のヤベ・ヤベ」

「ディアルト・ケントロピーゲだ」

「ほ。ケントロピーゲとな?」

熱い竜の鼻息が吹きつけて、ふたりの髪や衣服を千切り飛ばしそうなほどに靡かせた。

「ではおまえは、大地を治める家系のはみだしものの息子に違いない」



「知っているのか」
驚いて、ディアルトは尋ねた。
「知っているとも」
ギラギラと瞳を輝かせながら、竜は嗤った。
「余は千里眼だし、ずいぶん長生きをしている。ミトラ神降臨したまいしいにしえの昔から今日この瞬間に至るまで、イデーンに起こったあらゆることは、みなこの頭に、耳に入ってくるものさ。古来竜は知恵者、孤高の賢者よ」
「では……俺たちが何の為に来たのかもわかっているだろう」
危険の予感に、ディアルトはヤベ・ヤベと己を繋いでいた赤い帯を解き、友の手に押しつけて、彼をその場に留めた。それから竜に向き直り、思い切って、ずいと前に出る。
「魔峰オーブは噴煙を上げている。イデーンの危機が迫っている。我々には、思い切った手段が必要なのだ。ブラック・オーブを、持ってゆきたい」
「ふんふん」
竜は巨大な尾を打ち振った。
「どうせそんなことだろうと思った」
「あんたが真実、昔語りに聞く竜らしい竜であるならば、知恵や噂もせっせと蓄えようが、世界の宝にも眼があるまい。金銀財宝を寝床にするは、名高い竜の習性だ。俺の探し物も、

今その腹の下に抱きしめ隠していると見たが、違うか？」

「おい。そんなに強く出てだいじょうぶか？」

ヤベ・ヤベが耳許に寄り心配そうに囁いたが、ディアルトは心配するなと指先を振っただけで、はったとばかりに竜を睨みつけた瞳をいっかな逸らそうとはしなかった。

「ふふふふ。だったら、どうする？」

骨張った竜の前足がもぞもぞと動き、ばきりばきりと大木の折れるような音がした。

「渡してくれ」

ディアルトは両手を握りしめた。

「頼む」

「ふん。気安くいいやがる」

そっぽを向いた竜だったが、やがてずるそうな横目をディアルトに戻した。

「……おまえのその背に丸めてあるのはなんだ？」

「え？」

「バカ、ホリゾンタリスだよ！」

ヤベ・ヤベはパッと飛びつくと、ディアルトの背からホリゾンタリスを降ろし、留め紐を切ってばさりと広げ、蒼白な顔のまま、竜に向けた。

「ほお。見事なものだな。その絵はなんだか余に似ているなぁ」

「そら」

ヤベ・ヤベは困惑するディアルトの足を踏んづけて囁いた。

「欲しがってるぞ、わかるな！」

「ああ……」

ディアルトはせつなくなったが、言った。

「これは父母の形見だ。この世にふたつとはないものなんだ」

「そのくらい見ればわかる」

「……あんたにやる」

苦しい胸を堪えて、ディアルトは言った。

「だから、ブラック・オーブを譲ってくれ。頼む」

「ふ……ふははは。なんとなんと！　わっはははは!!」

竜は大口を開けて笑いだした。

「ばかめ。愚かものめ。天の宝玉と貴様らのちゃちな手なぐさみ、秤にかけられるとでも思っているのか！　これは傑作。わは、わは、わは。ものの価を知らぬにもほどがあるわ。山育ちはこれだから困る。よくも、まあ、恥ずかしげもなく。ああ、片腹痛い」

「お、おのれ……失敬な！」

「ほ？　小僧、怒ったのか？」

竜は愉快そうに瞳を輝かせると、尾の先を細かく振り回してがらがらと鳴らし、ふしゅふしゅと熱い鼻息を洩らした。
「では、これではどうだ!!」
「ああっ！」
ごう、と熱気が吹きつけた。竜が炎を吐いたのだ！　貴重なホリゾンタリスは一瞬のうちに燃え上がって焦げ臭いぼろとなり、捧げ持っていたヤベ・ヤベの袖口にまで火が燃え広がった。
「わあっ、あち、あちあち！」
ヤベ・ヤベはあわてて燃えかすを放りだし、火を叩いた。
「ヤベ・ヤベっ！　だいじょうぶか」
「す、すまん、ディアルト。俺がさっさと避ければ」
「何を言う。おまえ火傷したんじゃないのか、見せろ」
「ほっほっほ」
竜はその尾でがんがんと山を叩いて喜んだ。
「庇い合う庇い合う。いやいや、いつ見ても良いものだなあ、美しいなあ、若者たちの友情は」
「お……おのれぇ……」

ディアルトは腰に吊った短剣に手をかけた。

「ふざけるのもいい加減にしろ。なにも燃やすことはないじゃないか。なぜわざわざそんな嫌がらせを」

「ふん」

ずしり！　と打ちつけた尾に、雪塗れの崖がまるまるひとつあっけなくも崩れ落ち、山が揺れた。ディアルトもヤベ・ヤベも立っていられなくなって、凍れる地面に両手をついた。思わず抜けてしまった短剣がすっぽ抜けて転がっていくのに、ディアルトは慌てて飛びついた。

「なべてこの世に形あるものは、いずれは腐り果て滅びるもの。天の宝玉はそうではない。その違いをはっきりと見せてやったまで。……おやおや。なんだ、その剣は？　またずいぶんと情けないものを持ちだそうとしているなあ。よせよせ。大地の剣でもあるというのならともかく、そんなもんじゃあ俺の鱗一枚だって剥がせんぞ」

「だ……大地の剣だって？」

ディアルトはカッと眼を開いた。

「あの魔剣を知っているのか!?」

「だから、俺はなんでも知っていると言ったじゃないか。……お、待て待て」

竜は不意に長い首を擡げ、眼を細めて、何かを探るようにした。

「ほほ、噂をすれば影とやら。大地の剣、今、動いたぞ」
「な、なにっ？」
「そら、見るがいい」
竜が口を窄めるようにしてふうと息を吐くと、吐息の霧がたちまちぐるぐると渦巻きながら寄り集まって水晶のように透明な球になり、ふわふわ宙に漂いながら何かの像を映しはじめた。
像は忙しく動き、跳ね、歪む。初めディアルトには何がどうなっているのかよくわからなかった。が、瞳を凝らして見つめているうちに、不意にぎらりと光ったものに眼が止まった。漆黒の長剣である。まごうかたなき大地の剣である。恋人と山越えの逃亡をする際に彼の父が持ちだしたコリドラス家の至宝、幼いディアルトが血の証として持ちかえった後、アカントホプス・バコバの策略によって再び奪い返されてしまったもの。
見れば、水晶に映しだされているのは、赤いものと黒いものの死闘の模様ではないか。
「ダトニオイデス！」
「そう、貴様の従兄どのだ」
ため息まじりに、竜が言った。
「あの剣、良いのう。欲しい。おまえ、あれを持って来てくれれば良かったに」
「な……なにをしているのだ？　なぜ？　ダトニオイデスは、誰と闘っているのだ？」

「わからんのか」
うんざりと竜は横目を使った。
「あの朽縄を見たことがないか。あれは稲妻の主、クリプトカリオン・レグナスよ。理由は単純、そなたがあの入れ墨男の花嫁をさらったからだ」
「……！……」
ディアルトが心臓を摑まれたようにどきりとするのを見ると、竜は、ほほお、と眼を大きくし、悪そうににやにや笑いだした。
「意外であったか？　ま、あの従兄に借りを作ったんじゃあ、寝覚めも悪かろう。クリプトカリオンも直情径行だからなあ、坊主憎けりゃなんとやら、要するにこれは一種のやつあたりよ。恋は思案の外とは言いながら、貴様もよりによって厄介な情人を持ってしまったものだわ。……おやおや、こいつはいかん。見ろ。どっちもすっかり本気のようだ。今に気が動くぞ」
竜がそう言ったとたん、像が白熱しふくれ上がって、水晶球ごと破裂した……！
「うわあっ！」
「あ……!!」
ディアルトもヤベ・ヤベもたちまちあおりを喰って吹き飛ばされ、ごろごろと転がった。
「というわけだ」

竜はもちろん微動だにしなかった。
「ど、どうなったのだ？」
雪を蹴立てて立ち上がり、騒ぐ胸を押さえながら、ディアルトは尋ねた。
「生憎とどっちも死んではおらん。が、重傷だな」
「……ああ……」
「そうだ。貴様のせいだぞ」
嬉しそうに竜は言った。
「ダトニオイデスはカリクティスの城にも刺客を放った。今グァモン・セミアクィルスが、必死で防戦しているところだが……おお、やるなプレコトムス。きゃつの脚を叩っ切ったぞ！　貴様の情人がこれを聞いたら、どう思うかなぁ」
「……な、なんてことだ……！」
ディアルトは歯嚙みし、両手で頭を抱えこんだ。
「なぜ、なぜ、彼等が戦わなくてはならないんだ……!?」
「定めだよ」
そっけなく、竜は言った。
「貴様は禍つ主、闇の英雄よ。よっぽど悪い星のもとに生まれたのだな。このイデーンの秩序を崩壊させ、五大家の長き平和を壊滅させるために誕生して来よったのだわ！　ま、考え

ようによっては、なんとも光栄な身分じゃあないかね。世界がまるごとひとつ、その肩にかかっている気分はどうだえ、ディアルト・ケントロピーゲ……おっとっと、なんだ?」

ひゅん、ひゅん、ひゅん！

ヤベ・ヤベの放った矢がばらばらと竜の巨大な顔に降りかかり、さしもの竜も困惑したように身を避けた。矢はみな、堅い鱗に阻まれてカンカンと跳ね返されてしまうのだが、ヤベ・ヤベの狙いはすこぶる正確にその鼻面を追いかける。

「ディアルト！　今だ！」

ヤベ・ヤベは怒鳴った。

「眉間だ。鳥兎を狙うんだ！」

「……あ……」

ディアルトは苦しげに顔をあげた。竜は前足を掲げ、降りしきる矢を払いながら、慌てふためいているように見えた。今この時を逃してはならないことはわかっていた。手は、今も、川辺の民の日用にする両刃の短剣をしっかりと握りしめていた。が、彼には、抜くことができなかった。

（俺は……俺はみんなを苦しめる。禍つ主だ。厄病神だ。……そんなつもりはないのに……やることなすこと裏目に出るんだ。

俺なんか……俺なんか……はじめから生まれてこないほうが良かったんだ……！）



「ディアルト？　ディアルト、どうした？」
（みんな戦う。みんな死んでしまう。こんなところで苦労をして何になる？　どうせ、どうせ、この世はもうじきおしまいだ。みんな死んでしまうだけじゃないか）
「何をしている。矢が尽きる前に、早く！」
ヤベ・ヤベは悲痛な声で叫んだが、打ちのめされ、自責の念にかられたディアルトの耳には届かなかった。
（魔峰オーブは噴火する。イデーンは滅びる。どうせ、もう、だめだ。だめなんだ……！
ブラック・オーブがなんだ。ラーミアがなんだ。鳥を連れていったところで、誰が俺を信用するだろう。汚れた生まれの、厄介者の話を誰が聞く。こんなこと無駄だ。無意味だ。
ダトニオイデスは傷ついた。何の罪もないのに、俺の身内だったせいで！　クリプトカリオンは怒り狂った。神託を犯して、俺がやつの花嫁を盗ったからだ。ルビスを拐ってしまったからだ。ああ！　みんな、みんな、俺が悪いのだ）
（……だが……）
愛しい娘の無邪気な笑顔が眼に浮かぶ。
　愛してる。わたしは、あなたを、愛してる。
―心に見上げてくるその瞳。あかあかと燃え上がる直なまなざし。
―連れて行って。いっしょに逃げて。あなたの、お父さんとお母さんのように。お願い。

（愛？）
（愛だって？）
（……それがなんだ！）
ディアルトは喉を摑んだ。胸をかき毟った。
（そんなことを理由に、掟を犯したのが俺たちの罪だ。
ああ、ルビス。きみはバカだ。俺はバカだ。
こんな俺を愛してはいけなかった。愛に惑ってはならなかった。どんなにこころが求めても、感情が騒いても、掟がそれを禁じていた。俺たちは理をないがしろにした。
天は、俺たちを、けして許しはしない……！）

「ディアルトおっ!!」
ヤベ・ヤベの手が、残り少なくなった矢を必死に探る。
「おいっ。早く、早く、やるんだ!!」
「……ええい、煩わしい！　いい加減にしろ」
飛び交う矢の雨を薙ぎ払った炎が、ごう、と長く伸びた。
「うっ！」
ヤベ・ヤベは素早く飛び退いて岩陰に隠れ、なおも竜の眉間を狙って矢を放つ。

「ディアルト、どうしたんだ、しっかりしてくれよ！」
「ちょこざいな。こんなに丁寧に相手をしてやったというに、まだわからぬか」
黄金の瞳を爛々と輝かせて、竜は首を擡げた。
「俺はこの世のものではないのだぞ。我が名は運命、天より下りし神。竜なるはこの一時のかりそめの姿、貴様等のちゃちな刃に傷つけられるものか。思いあがりもそれまでだ！」
竜はずしりと山を揺らして立ち上がり、前足の爪の先で宙に神秘の印を切りながら怒気のような呪を発した……！
「羅麗鳳!!」
「……あ……くっ、どうしたことだ」
ヤベ・ヤベの手から力が抜け、弓が、番えた矢が、ぽとぽとと零れ落ちる。眼の前いっぱいに細かい塵のようなものが散ったかと思うと、まぶたは抗いようもない力で閉じかかる。
「ふふふ、眠れ眠れ」
竜はにたにたと顎を垂らし、二股に分かれた長い舌をちろちろとのた打たせながら、嗤った。
「秘術羅麗鳳の呪文を浴びせられて、谷に追われた精霊風情が、覚醒を保っておられるものか。さあて糞生意気なやつめ、どう料理してくれよう？」
鋭い爪が不本意にもぐったりと眠りこんでしまったヤベ・ヤベのからだに伸びた。髭だら

けの、頑丈な、山の男の中でも珍しく立派な体格のヤベ・ヤベさえ、その鱗持つ指の前にはあまりにも小さく、儚かった。巨大な頭が舌舐りしながら、降りてきた、その時である。
「……いやぁあああっ!!」
「ぎゃあうっ!!」
疾風のごとくその鼻面に駆け上がったディアルトが、手にした短剣で竜の眉間を突き刺したのだ!!
鎧のごとき硬い鱗に包まれたからだのうちで、ただ一箇所、そこだけが僅かな隙を持っていたのだった。暴れ回る竜の尾が、岩を削り、雪を吹き上げた。が、それも、見る間に弱り、鈍ってくる。ついに、竜は、どうと音をたてて突っ伏した。
「な……なぜ……だぁっ……っ?」
苦しい息遣いの中、竜はうめいた。その牙には沸き立つ巨大な血泡が生して、ぶつぶつと沸騰するような音を立てた。
「おまえがなんとかの呪文とやらをかけた時、俺はちょうど、両耳を塞いでいたんだ」
まだ朦朧としているヤベ・ヤベを助け起こしながら、ディアルトは淡々と告げた。
「内なる責め声に耐え切れなくてな。が、今はもうふっ切れたよ。運命がなんであれ、生まれがどうあれ、俺は俺の正しいと思うことをするだけだ。それしかないんだ」
「……ははは。言う、言う……ふふん……頼もしいことだの……」

濁った瞳を瞬いて、竜は弱々しく笑った。
「……持って行くが良い……七つのオーブは、そこにある」
「七つの？」
「そうともよ……俺は完全が好きだ……痛つつ……一番欲しかったのは確かに黒だがな、ブラック・オーブひとつでは話にならぬではないか。ゆえに、谷の源流を探り、掘り返して……ラムプロローグスの宝石すべてをちゃんと揃えておいたのさ。ありがたいと思え！……くくく……っ」
「ほんとうだ、ディアルト！」
竜の腹のあったあたりに潜りこんでいたヤベ・ヤベが、興奮した顔で駆け寄って来た。
「このきれいな球がそうだろう。赤、青、緑、黄色、紫に銀そして黒！　七つ全部、ここにあるぞ！」
「……赤・青・緑……黒……七つ……確かに七色……」
受け取って数えながらなにげなくつぶやいてみたディアルトの顔色が、ハッと変わった。
「この七色は、五大家と二つの神官に相当している」
「え、なんだって？」
ヤベ・ヤベが口を挟もうとしたが、ディアルトは遮って考えこんだ。
（偶然にしてはあまりに不思議だ。あるいは……あるいは、みながその象徴とされている色

の宝玉を手にして環を成せば……何か特別のことが起こるのではないか!?」
「りゅ……竜よ!!」
ディアルトは今はもはや瞑目せる巨大な生き物の頭に駆け寄り、揺すぶった。
「死ぬな。教えてくれ！　なぜ七つなんだ、これはどういう意味なんだ！　待て、まだ死ぬな、竜よ！」
「……うう、止し……て……くれ」
竜はうめき、片方の瞳だけを薄く開いた。
「死ぬ……もんか……俺は、眠るだけ……だ。いつ……の日かまた、蘇るためにな……」
「答えてくれ。あんたたってイデーンがぶっ壊れちまったら困るだろう？　なぜ七つなんだ。これで何かできないのか？　たとえば、この宝石と『力の環』によって……五大家と神官たちとがみなで力を合わせれば、あるいは……」
「……おまえも甘いな……」
竜はかすかに爪を上げた。爪は、震えながら、空中に何か小さな印を刻み、その顎に必死の耳を近づけたディアルトにのみ聞こえ得る程度の声に囁いた。
「だが……その甘さが……ちか……ら……」
「なんだって？」
「……ふふん。我が末裔よ……おまえも……まだまだ死なな……」

問いかけたまま、竜は硬そうなまぶたを、恐ろしい顎を、力尽きたようにはたりと閉じた。
その巨大な鼻腔から、一条の黒い煙が弱々しく吹き上がった。
そして。そのまぶたも、顎も、二度と開こうとしなかった。
「末……裔……？」
ディアルトはつぶやき、自らのそのかすかな声に弾かれたようにびくりと震えた。
（それは何のことだ？）
（では……では、俺は竜の子だというのか？　大地の一族が、みなこいつの……？）
（ああ、だから……だから、こいつが、俺の内なる竜にそっくりだったのか？？？）
「ディアルト。おいっ。ディアルトったら、ぼっとするな！　ほら、聞こえないか」
ヤベ・ヤベがディアルトの脇を肘で小突いた。
「えっ？」
かすかなかすかな響きだった。だが、山に生まれた男たちの耳は、どこか遠く、遥か高いところで、いましも滑りだそうとする巨大な雪の轟きを確かに捕らえた。
「な、雪崩が来る!?」
「そうだ。急ごう」
「でも、どこに？　どこに逃げれば!?」
ふたりが蒼白な顔を見合わせた、その時。ばさばさと力強い羽ばたきが聞こえた。竜の術

にかかっていたラーミアが、その休眠によって目覚め、動きだしたのだ。

「よし、乗れ！」

「おお！」

「あ。待て」

振り返るディアルトの鼻先に、真っ赤なものが飛んで来た。慌てて受け取る。ルビスの帯の片端だ。

「いっしょに、行こう」

もう一方の端を繋いだ片手をあげて髭面をにやりとさせるヤベ・ヤベに、ディアルトは大きくひとつうなずいた。

一羽の鳥は素早く舞い上がり、遠ざかった。

じっと動かない竜の背に、舞い飛ぶ雪のひとひら、またひとひらが、そっと降っては溶けた。遠く、雪崩のはじめの一撃が聞こえだす……。

3

「……なぜだ」

血飛沫に染まった腿を庇いながら、グアモン・セミアクィルスは静かに問うた。

「我等が戦ってなんになるのだ」
「五芒星の主が、わが館に火をかけました」
じりじりと構えを変化させながら、プレコトムスが応えた。広刃のその切っ先の一点だけは、グアモンの心臓を狙ったまま動かない。
「ノーザンバラムンディさまの御胎には、次の長なる御子がおられます。大事な時に、非道なる戦をしかけたは、そちらです」
「跡継ぎか」
薄く笑うと痛みが走った。グアモンは顔をしかめた。
「そうよな。これから生まれてくることもある。我等は、もう退くべきなのかもしれぬ」
煉瓦城は既に半ば傾ぎ、崩れかけている。
地中から突然襲ってきた大地の一族の前に、ルビスを失ってよりなす術もなく意気消沈し動揺と困惑の広がっていたカリクティス家のものたちは、満足に抵抗する術も持たなかった。
不発に終わった婚礼騒ぎの後始末のために、この城に残っていたのはほとんど信義に篤い中高齢の女たちばかりである。奇襲をかけたコリドラス家の男たちもまた、戸惑いを覚えずにいられなかった。炎を吐いて手強く歯向かうものたちを、追い詰め捕らえて締め殺しなぶりものにするこころづもりは充分できていたが、見るからに危険のない、戦うことなど何も知らぬげな女たち、ひと塊になって蒼白になって震える婦人たちをその刃にかけるは、いか

にも後味が悪そうだった。義憤にかられてきたはずが、我が身がまるで暴漢のごとく盗人のごとく思い做されて、大地のものたちは気概を失した。しかたなく、また行き場のないやりきれなさをぶつけるために、彼等は、その名も高い煉瓦城に、あたり構わず斧を鉈を牙を振るったのだった。

敵とするに相応しい相手を見いだすことができた己が身の幸運を、あるいは不運を、プレコトムスは知らなかった。ただ、その託された使命を果たさんと欲しただけだった。が、その実直な瞳には深い憂いがあった。プレコトムスは、グアモン・セミアクイルスを好いていた。尊敬していた。いいや、一種の共感を持って眺めていた。

華麗なる炎一族の頭目となったは、グアモンの場合むしろ時の悪戯、偶然である。もともと高き血の真の直系に生まれたものではない、どんなにあがき努力をしても永遠に二番手にしか成り得ぬその運命の中で、篤実に謙虚に淡々と任務をこなしてゆくその生き方をこそ、プレコトムスは買ったのである。己が理想と、規範にせんものと、受けとめたのであった。年齢はプレコトムスのほうがやや上である。ゆえに、そのまなざしの中には、能力は充分にありながら不遇に生まれてしまった弟を見る兄のような、息子を見つめる親のような、密かな誇りと隔靴掻痒たるせつない苦しみも、また、あったのである。

「ごいっしょに、おいでいただきとうございます」

と、彼は言った。

「我が主人ダトニオイデスが、お話したいと申されました」
「話ならいいが」
左右まばらに細めた瞳を、グアモンは柔らかく笑わせた。
「あれも短気な男だからな。クリプトカリオンとは、いい勝負だろうよ」
「おいでいただきます！」
気合いをこめて言いながら、プレコトムスは唇を嚙んだ。
（このかたに刃を向けることになろうとは）
喉を圧し、皺深いまぶたの奥深くに今にも滲みだしそうな熱い涙を、やっとの思いで耐えていたのである。あまり声をあげると、だらしなくも嗚咽になってしまいそうであった。
（ああ。定めというものは、ほんとうに、なんとやりきれぬものなのだ……！）
あふれる想いにプレコトムスがかすかに力を抜き吐息をついたその隙を、グアモンは逃さなかった。骨まで断たれた大腿からとくどくと止めどもなく流れだす己が血を擦ったばかりの掌をがばと開き、気合い一閃、その血を火炎の球となして、プレコトムス目がけて投げつけた……！
「……ああっ！……」
プレコトムスは一瞬のうちに火だるまになった。しかし、彼はそれでも、一歩また一歩と、こちらに向かって踏みだして来た。

グァモンは荒い息をつき、待ち構えた。この脚では、素早くは動けない。激痛のために、また今の反撃で気力を使い果たしたために、今の彼には、ただ腿を押さえながら、緊張して、相手の出方を窺っていることしかできなかった。

プレコトムスは歩みを止めなかった。若き大地の長の忠実なる補佐役の、肉の溶け落ち半分骨となりかけた凄まじい顔が間近に迫った。グァモンの瞳が拡大した。

そこまでだった。床に崩れ落ちる寸前、プレコトムスの黒焦げの無惨な顔が、何故か、やけにやさしく温かく、微笑むかのようにぽっかりと口許を開くのを、グァモンは見た……。

「……油断されたな、ご老体」

ぶすぶすと煙をあげる刺客の死骸に、グァモン・セミアクィルスは感情のない声で低くつぶやくと、それを無雑作に踏み砕きながら歩きだした。後ろに、赤黒い血溜まりを引きずりながら……。

4

夜が更けた。夜は暗かった。

粉雪舞う天空をラーミア任せに、一路故郷の谷を目指して飛びながら、ディアルトは今宵はひょっとすると新月だったのではないかと思いだしていた。

（……あの時……俺がルビスに逢いにゆかなければ。人妻となる前のあいつをせめて今いちど、ひと目見ようと、幼馴染みの別れことばをかけに行こうとなど、甘ったるい考えを起こさなければ）

竜には、既に思い切ったと宣言したが、ぼんやりと考えを巡らせるうちに、彼のこころはなお狂おしく乱れかかるのだった。

（ずいぶんいろいろなことが変わっていたはずだ）

豪華な婚礼衣裳を纏い、イデーンじゅうから集まったひとびとの神聖で温かい祝福の中、グァモン・セミアクィルスにその手を預けてしずしずとミトラの祭壇に向かって進んでゆくルビスの姿が、ありありと眼に浮かんだ。祭壇の傍らで、彼女を待っているのは……。

（……嫌だ。だめだ！　やれん!!）

ディアルトはぶるぶると頭を振って、クリプトカリオン・レグナスの赤い幻を追い払った。

その男も、ルビスの叔父も、そしてディアルト自身の最も近い身内であるはずの大地の長も、無事ではないものと思われた。イデーンじゅうで最も偉大な男たちが、自分とルビスの浅はかな行動の為に、戦い、傷つき、力萎えて倒れることになったのだ。

（構わない）

ディアルトは奥歯を噛んで、行く手の仄白い闇を睨んだ。

（だからといって、やめられはしなかった。

構わない。それがみんな俺のせいでも、この肩にかかるとしても。そのために呪われ、誰に恨まれようとも。構わない。引き受けてやる……！）

出がけに見たルビスの寝顔を、ディアルトは、思いだした。炎一族の当主たるべき少女は、疲労の極にあったのだろう、昏々と眠りこんで目覚めなかった。何か悪い夢にでもうなされているのか、時折苦しげに眉を寄せ、赤い唇を半ば開いて、小さく声をあげた。汗ばんだ額に髪がはりつき、上気した頬は薔薇色であった。強気で我が儘で贅沢なはずの娘が、いやに弱々しくあどけなくまたそれゆえにひときわ悩ましく、彼の胸に迫った。すべての装いを剝がした無意識の無防備な姿に、ディアルトはふたりが初めて出逢ったころのルビスを、何不自由ない幸福な幼女だった彼女の、遠いおもかげを、確かに見た。

巨大な煉瓦城ではなくみすぼらしい谷の小屋にいるルビス、絢爛たる婚礼衣裳ではなく不粋な防寒着を纏うルビス、定められた稲妻の主ではなくこの自分の血塗られた手を選んだ、愚かなルビス。その幸福を願うならば、あるいは、自分はあくまで冷たくふるまいつづけ、彼女のこころを避けつづけていたほうが良かったのではないかという気もした。

（……でも放せない。俺はおまえを、誰にもやれない）

迷いこんだ小動物に慕われつきまとわれるように、はじめは彼女の情熱に引きずられて面食らいながらしょうかたなく動いたつもりの彼であった。が、今、ディアルトは悟った。ふたりはけして引き離されたままにはすまなかったであろうことを。たとえその間に何があろ

うとも、誰が邪魔立てしようとも、どれほどの血が流されることになろうとも、あくまでお互いを求めてやまなかっただろうことを、魂の声で、こころの奥深くで、ふたりはいつも遠くその名を呼び合っていたのだ。時至れば必ずや道は交わり、ひとつに繋がって共に飛ぶ、それが彼等ふたりの真の運命であったことを……。

「見ろ、ディアルト！」

不意に、ヤベ・ヤベの声がして、ディアルトは我にかえった。友の指さす方角遥かに、真冬の夜明けの燭光に寒々と照らされてあるは、朧に見慣れた山脈である。

「あれは手形岩だ、もうすぐ三の谷だぞ！」

「おおっ!!」

ディアルトは思わず声をあげた。赤い帯に繋がった男も、髭だらけの顔をくしゃくしゃにして、嬉しそうに片手を上げた。

（ああ、良かった。俺たちは、ちゃんと帰って来たんだ！
帰るぞ。ルビス、俺は、おまえの許に今帰るぞ！）

思わず破顔したそのとたんに、ざわりといやな胸騒ぎがしたのだ。雪崩の恐怖に、慌てて飛びだして来たが、大切な七つのオーブをどこにしまっておいただろうか？　咄嗟にどこぞにしまったとは思う。無意識のうちに、しっかりと守っていたはずだと思う。が、ひとたび兆した不安に、こころは落ち着かなかった。気がかりなまま飛ぶよりはと、彼はその手を服

の隠しに彷徨わせた。
「……確か、確かここに……」
「こら！　よそ見をするな！」
「えっ？　うわっ！」
慌てて顔をあげた拍子にからだが弾み、七つのオーブがこぼれ落ちそうになった。追いかけて、ディアルトは、思わずバランスを崩した。引かれて、ヤベ・ヤベのラーミアが斜めになった。そこに、雪の舞い飛ぶ白い暗がりに隠されて見えなかった岩の突端が不意に間近に迫ったのだ。
「おっと！」
ヤベ・ヤベはラーミアを立て直そうと、咄嗟に果敢な急旋回をしかけた。普段ならばなんということのない操作だった。だが、今、彼は、自分と友とが、なお赤い帯で繋がっていることをすっかり失念していたのだった！
「あぁっ!!」
がつり。鈍い音がした。ヤベ・ヤベのラーミアが岩に激突したのだ。突如帯がぴんと張ったかと思うと、ディアルトは凄まじい勢いで右手を引かれて、あっけなく宙に飛びだした。オーブを確認ししまった隠しに釦をかけるのに夢中だったため、咄嗟に正しい反応をしそこなってしまったのだ。髭の男の大きなからだもまた、失速し墜落するラーミアから離れて両手

を広げながら宙を落下していく。その姿が、ディアルトの瞳に、奇妙にゆっくりと映った。
(ああ……落ちる……落ちる……!!)
呼び戻したかったが、彼のラーミアは落ち行く仲間を追いかけて闇の中に消えてしまう。
ディアルトは手を伸ばした。傍らを無情に過ぎてゆく岩棚に、せいいっぱいに伸ばした。不意に、その手ががりがりと氷を掻いた。次の瞬間、彼は、廂状に突きだした岩に激突した。
「あうっ!!」
彼は岩棚にあばらを打ちつけた。赤い帯に繋がった手首ががくりとひかれ、その勢いの凄まじさに肩が抜けたかと思われた。意識を失いかけたが、うまい具合に岩の突起にからだが塡まって止まった。さもなければ、ふたりともそのまま落ちて、既にどことも知れぬ谷底に激突していたことだろう。
ぎぃっ。ぎっ。
帯が、岩に擦れる音が、不気味に響いた。
ディアルトの胸は割れんばかりに痛んだ。からだじゅうの骨にひびが入ったのではないかとさえ思われた。ヤベ・ヤベの重みに遠慮会釈なく引かれて、手首は今にも千切れんばかりだ。喰いこむ帯に、革手袋がきな臭い匂いを発している。血流の止まった右手はふくれ上がって手袋を圧迫し、じんじんと痺れはじめている。
まず息を整えようとするが、空気はひどく冷たい。肺が焼けるほど冷たくて、たっぷりと

吸いこむことができない。岩もまた、剝きだしの頰を今にも凍りつかせてしまいそうだ。
（動かなければ、凍えてしまう。寒さのあまり眠りこんでしまったら、それっきりだ）
（ああ、だが、動けない！）
（左手さえ届けば、帯を手繰れる。両手両足を充分に使えれば、きっとヤベ・ヤベを引き上げてやれるのに……！）
無闇に動くのは生命取りとなる。姿勢を変えなければ左手は届かない。だが、彼の姿勢はあまりにも不安定だった。不用意にこの窪みから外れれば、後は凍てついた滑りやすい岩盤。それでなくとも、どんどん帯に引かれている。谷底までまっしぐらだ。
そのうちには飛んでいったラーミアたちが戻って来てくれるかもしれない。だが、いつまでも待ってはいられなかった。
「や……ヤベ・ヤベぇっ！」
返事はない。ぎぃぎぃと、帯の鳴る音ばかりが木霊する。
（どうしたんだ、ヤベ・ヤベ？　意識を失してしまっているのか？）
どこかに足がかりでも見つけて登って来てくれれば助かるが、その気配はない。ヤベ・ヤベもまた、その手首ひとつで宙吊りになっているのだ。この急拵えの生命綱ひとつに、その生命の重みを預けて……！
冷たい恐怖と重圧に、ディアルトは吐き気を催した。頸のあたりで不穏な動悸がずくんず

くんと打つ。堪えようとしても、何度も何度も震えが走る。そのたびに、衝撃を受けたからだがズキズキする。意識が遠ざかりはじめている。まぶたが重い。しっかりと開けていられない。瞬きの間隔がどんどん短くなっている。意識して開こうとしていなければ、眼を瞑ったとたんに眠りの中に引きずりこまれてしまいそうだ。

世界が沈黙のうちに待っているのを、彼は感じた。ふたつの骸をその懐に抱きとめようと欲しているのを、焦りもせずいらだちもせず、ただ時が満ちるのを待っていることを。そして時は彼の全身からその温もりを、その勇気を、その生命すらをも、刻々と奪っていこうとしている……。

ずずっ！　また帯が引かれ、からだが前に出た。今はもう彼の顔も岩棚の外にあった。眼下に切り立つ氷の壁を、その高さを、ディアルトは、見たというよりも感じた。恐ろしさは鈍くなった感情の背後に隠れてしまう。もう、何もかもがどうでもいいような気分になりはじめる。

おりしもまた激しく舞い飛びはじめた雪が、彼の頭に、からだに、視界いっぱいに、静かに降り積もっては、覆ってゆく。息の詰まりそうなほど世界じゅうを埋め尽くした雪。彼を窒息させる白の牢獄。雪は音をたてない。この寒々しい情景の中でたったひとつ彼の耳に囁きかけるもの、それは手首から延びた細い契であった。ぎしりぎしりと頼りなくも不吉な音をたてて鳴りながら、振り子のように揺れる赤い帯。先のほうまでなど、とても見えはしな

い。白に飲みこまれ、白に滲み、白の中に消えてゆく幻のような赤……。

「う……く……くそ」

　ディアルトは思い切ってそろそろと左足を移動させた。もっとしっかりとした支えになるような突起を探って、凍えた足が雪棚の上をじりじりと這った。

(ない。ない。何もないのか？)

　ディアルトの心臓はどきどきと激しく打った。

(だめだ。こんなんじゃだめだ)

　痛みと消耗のためにディアルトは気力を使い果たしてしまっている。大地の長の尊い血の力も、今は頼みにならなかった。意識は混濁し、とりとめもなく彷徨う。

(こんなばかな！)

(こんなところで)

(俺は……俺はブラック・オーブを手に入れたというのに……！)

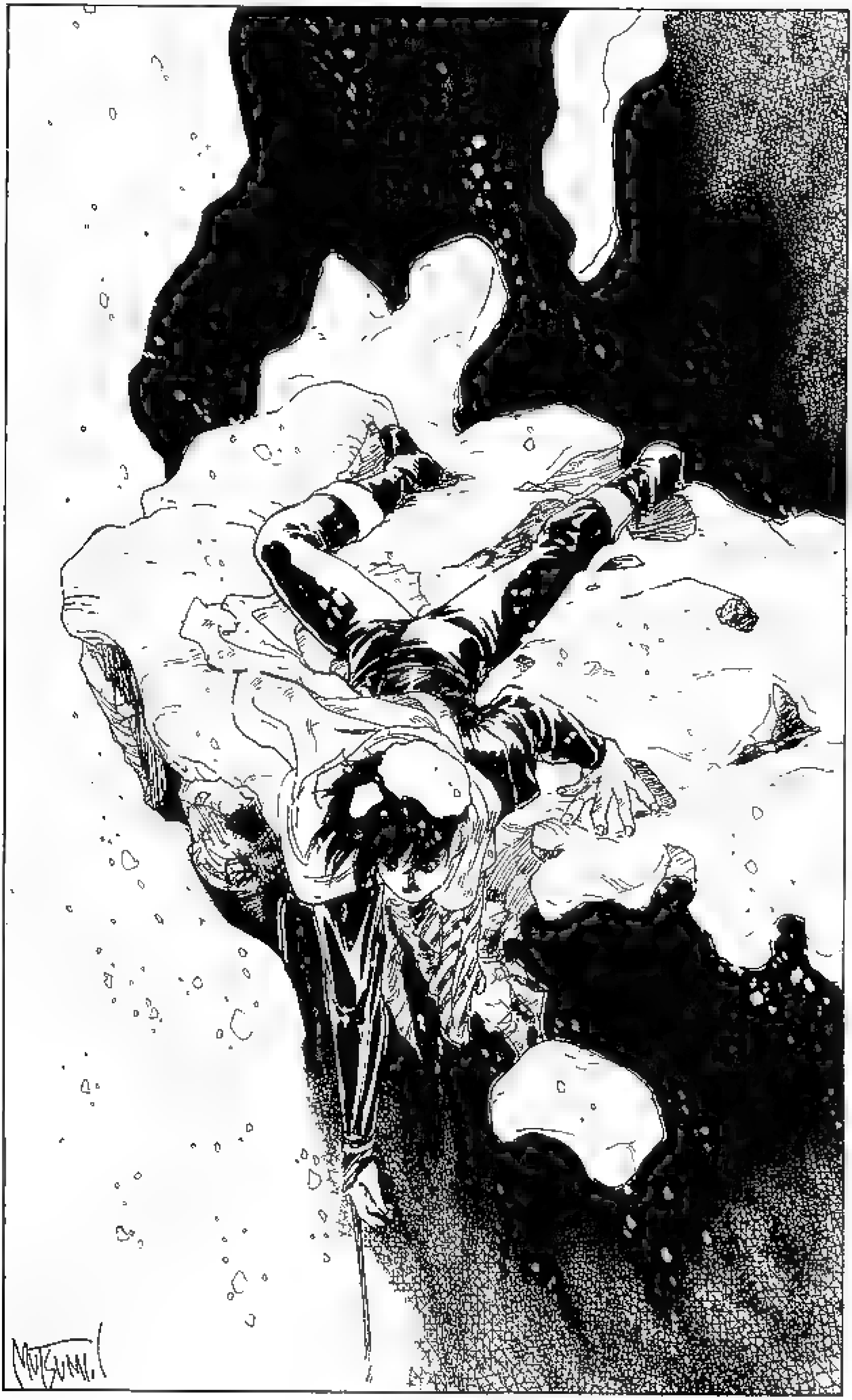
　雪の花びらは今は妖しく美しく、ゆっくりと誘うように舞った。彼の顔に、頭に、肩に、雪はその氷の口づけを次々に浴びせかけ、甘い諦めに彼を誘う。今、瞳を閉じれば、眠りこんでしまえば、そのままこの苦しい時が完全に終わりになる。この冷たい抱擁の中で永遠に夢を見ていることができる……。

　夢。点滅するように遠く近くぼやける雪が、渦をなして飛ぶ雪が、凝って女の顔になる。

夢のように美しい、愛しい女の姿になる……。
（……ルビス……）
不意に何かが頬に当たった。崖の上のほうで吹き寄せられた雪の塊が、ぴしゃり、と叱りつけるように彼の頬を打って、もっと下まで落ちていったのだ。
ハッとする彼に幻の女は言う、厳しい怒りの表情に眉を顰めて、囁く。
――……どうしたっていうの。しっかりしなさい。もう負けなの？
それは母だ。とうの昔に死んでしまった母の顔だ。
さあ立ちなさい。あなたはまだ眠れない。わたしたちのところに来ることを許されてはいない。さあ……生きなさい。立ちなさい……ロト……!!
「……おかあさん……!?」
ディアルトはカッと眼を開けた。白い白い雪にその輪郭を柔らかに溶かしながら浮かんだありし日の母が、そしてその母の肩をしっかりと抱き寄せた父が、力強くうなずきながら消えてゆくのを、彼は見た。彼にはまだ許されていない国に帰って行ってしまうのを感じた。
（……そうだ。……俺は死なない。まだ死ねない。こんなところでへたばっちゃいられないんだ……!!）
と、その時。無意識のうちにせつなくもがき動いていた彼の左のつま先が、ようやく頑丈そうな足場を探り当てたのだ！

「……う……うおおっ!!」
ディアルトは思い切って窪みから上体を飛びださせると、左手を伸ばして、帯を摑んだ。
彼は、死力を振り絞って両手を引こうとした。
「……ディアルトよ」
そこに、遥か下の方角から、低い声が聞こえた。
「聞こえるか」
「おお！　気がついたか。いる！　いるぞ、ヤベ・ヤベ！」
ディアルトは声を張り上げた。
「待っていろ、今助けてやるからな！」
「おまえ、短剣を持っていたな?」
ヤベ・ヤベは言った。変に静かな声だった。
「俺は肩を脱臼したらしいのだ。どうしてもこの帯まで刀が届かん。だから、おまえが、切ってくれ」
「……なに?」
ディアルトは瞳を大きくして、眼下のただ一面の白い空を覗きこんだ。ぎしぎしと揺れる赤い帯の先は、乱舞する雪に隠されて、やはり見えない。
「……お……おまえ、何をしてたんだっ!?」

「山の、掟さ」
ディアルトの眼の前で、赤い帯がゆっくりと揺れた。恐怖にかられて、ディアルトは夢中でそれを引いた。必死で引いた。だが帯はいっかな動かない。力尽きてほんの少し息をつくと、たちまちかえってずりずりと引かれてしまう。
「止せ。おまえまで落ちる」
ヤベ・ヤベは言った。
「そんなことをしてくれなくっていい。おまえには大事な仕事があるんだろう。いいから、さっさと切りな」
強烈な既視感が、ディアルトを襲った。今のこれは幼かった彼が、いつも見ていた悪夢に酷似していたのだ。
「い……嫌だっ!!」
ディアルトは叫んだ。上擦ったその声はあたかも少年の昔に帰ってしまったかのようだ。
「そんなことはできないよ！」
「……ふん。おまえは、まったくほんとうに嫌な奴だな」
ぎいっ。ぎいっ。嘲笑うように、赤い帯が鳴った。ディアルトは歯を喰い縛り、頭を振って、必死に意識をはっきりさせた。
「待て、ヤベ・ヤベ、待て。落ち着いて見回してみるんだ。どこかに、足はかからないの



か？　登ってくる道はないのか？」
「だめだ。見た」
静かな声が答えた。
「俺がそんな見落としをすると思うか？」
「ああ……糞っ！　なんとか、なんとかならないのか……？」
「なあ、兄弟」
冷たい氷にがつりと額が当たるを構わず、ディアルトは突っ伏した。その耳に、ヤベ・ヤベの、やさしく諭すようなあやすような声がそっと届いた。
「おまえはだめな奴だ。嫌な奴だ。俺がどんなに懇切丁寧に教えてやったって、けしてその通りにやできやしないんだからな。だから、つい、ほっとけなくってよ。こんなとこまで、ついて来ちまったりするんだよな」
「ヤベ・ヤベ……」
「なあ、ディアルト。おまえのような腑抜けにゃあ、生きてる俺は切り捨てられんかもしれない。だが、死体なら落とせるよな」
「し……死体だって……？」
「うん。やってくれるな。俺の刀はこの派手な紐にはまるで届かんが、幸い自分の喉にならら届きそうなんだ。心臓にもな。……なあ？　おまえはどっちが、楽だと思う？」

「おい……おい、待て、ヤベ・ヤベっ!!」
ディアルトは、どさりとして、自分の手首の赤い帯を見つめた。
「止せ!」
「ちぇっ。……じゃあいい。自分で決める。ほんとに頼りにならねえ奴だな」
「ヤベ・ヤベっ、おいっ、待ってくれっ……!!」
「あばよ」
別れのことばが、ディアルトの耳の中にいつまでも木霊した。現実感のない時のどこかで、赤い帯ごしにひきつるような鈍い衝撃が伝わってくるのを、彼は感じた。
「……ヤベ・ヤベ……」
やがて、ディアルトの左手は、そろそろと腰に伸びた。右側に吊った短剣を苦労して摑みだすと、左手はそれ自体意志を持った生き物のように素早く動いて、切った。白の中の、ただひとつの赤を。
瞬時に軽くなってしまった右手を、ディアルトは、他人のものであるかのように見た。
両手を揃えて雪につくと、膝立ちの姿勢でしっかりと短剣をしまう。滑らないように気をつけながら、ゆっくりと立ち上がる。ごく短くなった赤い帯が、右の手首で、吹雪に揺れた。
渦巻く雪の彼方に夜明けの空があった。遠く薔薇色に、ちょうどルビスの髪のような色に燃えだしたその空をじっと見上げる彼の瞳は透明だった。そこは乾き、涙はなかった。

5

風が強かった。

風は嫌なことも嬉しいこともみなどこかに運び去ってしまおうとでもするかのように激しく吹きつけ、イデーンじゅうの大木の枝を揺らし、家々の屋根を飛ばし、固く凍結した雪の巨大な塊をドサリと落とした。

煉瓦城は、この風にもっとも蹂躙されたもののひとつであった。壁や床は蹴散らされ、窓枠や柱の飾りは力ずくにさらわれてどこぞに消えた。時折の突風に、何かが剥がれたか落ちたか、ズシリと足許を揺るがすほどの音も聞こえる。崩れかけた回り廊下は隙間から吹きこむ疾風に、ひゅるひゅると物悲しい歌を歌った。

そんな廊下に、女たちが二人、争いながら現れた。

「お待ち。戻っておいでったら」

「嫌だよ、マル叔母ちゃん。もう御免だ。……離して」

ルビスの元乳母にしてこの城の日用を手伝う者たちを束ねる役目を持つ灯芯草の精マルランドと、その姪の姉妹である。良く似た丸い体形の女二人は、潜めた声を時折うっかり甲高くしてしまいながら、掴み合いもがき争った。

「離してったら」

肩に負うた荷物の紐を、逞しい叔母に巧みに捕らえられてしまったニアサエは、激しく腕を振ってなんとかそれを取り戻そうとした。が、マルランドの必死の怪力にはまるで敵わない。とうとう諦めて放りだすと、ニアサエは蒼白な顔をせいいっぱい恐ろしげに歪めて、啖呵を切った。

「ふん。そんなもん、もういらないよ。あたしは行くからね！」

「ああ、そうかい」

マルランドはぷっくりと頰の出た童顔を怒りのあまり真っ赤にして、姪の荷物を無雑作に投げ捨てた。

「じゃあ行くがいいよ。この業突張りっ！」

「お、お姉ちゃあんっ!!」

マルランドの捨て台詞と、叔母に腰帯を絡め取られたままの情けない恰好をしたツクナレの悲鳴とが重なって、長い廊下に響き渡った。

「あたしも行く、あたしも行くよぉ」

すたすたと歩み去りかけていたニアサエは気遣わしそうに眉間を寄せながらこちらを振り向いた。が、マルランドの固く窄めた唇を見ると、再びツンと頭を聳やかし、思い切ったように勢いよく歩きだした。ツクナレは耳障りな金切り声をいっそう張り上げたが、マルラン

ドはその手をいっかな離さなかった。彼女は罰当たりなことばをなにごとか低く唸りながらくるりと後ろ向きになり、抵抗するツクナレを引きずりながら、逃げたニアサエとは反対の方角にずしずしと進む。

「嫌だ。お願い。許して」

ツクナレはあえいだ。バタバタと栄養良く脂肪の乗った短い四肢を振り回した。

「帰りたい、あたしも、お家に帰りたいのよぉっ！」

「なんて聞き分けの悪い娘だね！」

悔し涙をぐいと袖口で拭いながら、マルランドは吐き捨てるように言った。

「お館は今大変なんだ、いくらでも手が必要なんだよ。どうしてそれがわからないんだ」

「だってだって。もう、おしまいだって。この世の終わりがくるって」

ツクナレも負けじと激しく泣きじゃくった。

「あたし……あたし、死ぬ前に、もう一度母さんの顔が見たいんだよぉ……！」

マルランドは不意にそのからだの割に小さすぎる足を止めた。変に静かなまなざしで、太い腕にがっちりと抱えこんだ娃の短く埋まったような首のあたりを見下ろす。ツクナレは真っ赤に濡れた顔を恐怖と反抗に醜くこわばらせ、小さな瞳を可能な限り、大きく飛びだすほどまでに見開いている。ツクナレの歪んだ唇はわなわなと戦き、そばかすだらけのその低い鼻は、いやに可愛らしく弱々しく、涙を啜りあげて鳴るのであった。

マルランドの腕からがくりと力が抜けた。たちまちツクナレは物のように床に放りだされ、鈍い音をたてて頭をぶつけた。が、彼女はめそめそ文句を言ったりはしなかった。そのままごろごろ床を転がって叔母の手の届かないところまで逃げ、その体格からは信じられぬほど身軽な動きで飛び起きる。

「……ありがと……叔母ちゃん、ありがと！」

ツクナレは姉の置きざりにした荷物をふん捕まえ、瓦礫を蹴って走りだした。廊下の角まで来ると、彼女は足を緩めた。放心したような叔母のじっと動かない背が見えた。ツクナレは苦しそうに息を吸いこみ、奇妙に明るい声で言った。

「……さよなら！」

そして、折れ曲がった石柱の陰に駆けこんで、消えた。

「うう……う」

マルランドは振り返りはしなかった。小山のような肩が細かく震えた。不意に、崩れるように砂まじりの床に膝をつくと、彼女はそのぽちゃぽちゃとした両手で顔を覆って、泣いた。かつては赤子のように柔らかくふわふわとしていたその手も、今はガサガサに荒れ、ひびわれている。巻きつけたぼろには、古い血の染みがこびりついている。

「みんな……みんな行ってしまう。わたしはいったい、どうすりゃいいんだ……」

荒野に風が鳴った。

ヴェリダヌスを経て遠く魔峰オーブから吹き降ろす冷たく乾いた砂埃が、招かれもしないのに、煉瓦の抜け落ちた壁の隙間からこの廊下に迷いこんで来て、マルランドの周囲で小さな竜巻をなし、瓦礫や埃を舞い上げて踊った。その渦の中に、どこから紛れこんだか小さな紫色の蝶が一頭あって、まるで彼女を気づかうようにちらほらと飛び回っているのだった。が、その美しく儚いものの慰めも、うなだれたきりのマルランドの瞳には全く入ることはなかったのであった。

と。肩に、柔らかな重みがかかった。

自分で自分に目隠しをしたままの姿勢で、マルランドはひくりと動いた。後ろに誰か立っている。彼女の肩に手をかけて、立っている……。

「も、戻って来てくれたんだね！」

満面に笑みを湛えながらがばりと振り向いた彼女は、驚愕のあまり凍りついた。

「……ルビスさま！」

「ええ。戻って来たわ、マルランド」

男のような見慣れぬ黒い衣裳の肩に、鮮やかな薔薇色の巻毛を炎の滝のごとく皮打たせながら、ルビスは、はにかんで笑った。

「ああ」

マルランドはうめいた。

にっと唇の両側を引っこませるルビスの微笑は、彼女がさんざん手を焼かされた強情な小娘のころと少しも変わっていなかった。が、目つきがまるで違っていた。天の赤玉の深みをもって静かに輝くその瞳は、今はもう、うるさいマルランドを、なんとかして出し抜いてやろうとずる賢く企んではいなかった。無邪気ぶって油断させ、うまく騙し言いくるめてやろうとはしていなかった。それは、あたかも嵐の中でもけして消えることのない篝火のように快活に陽気に明々と燃えて、マルランドを力づけ勇気づけた。彼女の疲れたこころを慰撫し安心させてくれる、不思議な温かみを持っているのだった。

「ここは散々だったみたいね。ごめんなさい」

低く落ち着いたルビスの口調もまた明らかにおとなびて、心地好く耳に響きながら、そのうちに既に誰をも従えるに足る圧倒的な威厳をはっきりと秘めている。

（……奥さまだ。ルビスさまは、いつの間にか、エスメセスさまそっくりになったのだ）

マルランドの小さな両眼から、さきほどの苦いものとは性質の違う熱い涙があふれ落ちた。そんなマルランドを見ると、ルビスは無言で肩を抱き、ぎゅっと力をこめてくれた。そうして、遠慮がちにその耳許で囁いた。

「叔父さまはどこ。案内して」

「はい！」

スカートで急ぎ眼頭を拭うと、マルランドはしゃんと頭を上げた。

「こちらにございます」

案内された先は一族のものがみな集うても用の足りるように設えられた簡易食堂で、長細い矩形の食卓が整然と並べられたいつもの光景をルビスは無意識のうちに予想した。が、そこは今がらんと殺風景に片づけられ、無骨な石の床が剝きだしになっている。ルビスは思わず物問いたげなまなざしをマルランドに向けたが、マルランドは黙って彼女をそっと内側に押した。

ふたりが扉を閉じて部屋の中央まで進んでゆくと、隅のほうにいた暗い顔つきの婦人たちが驚いたように立ち上がった。その女たちの中心に座して血の気のない頰をうつむかせていた当主の妻アミアカルバは、ぼんやりと曇った瞳をこちらに向けると、たちまち歓声をあげて駆け寄って来た。

「お姉さま！」

アミアカルバは叫んだ。

「……ああ、お待ちしていました、お待ちしていました。やっとお帰りになってくださいましたのね！」

抱きつかれ、頰ずりをされ、跪かれ手に接吻を浴びせられて、茫然としたルビスの耳に、マルランドが素早く囁いた。

「エスメセスさまと間違えていらっしゃるのです」
「でも」
「奥さまは……」
　マルランドは辛そうに眉を寄せた。
「気がふれておしまいになったのです。お城が大地のものたちに蹂躙され、旦那さまが大怪我をなさった、その時に」
　ルビスは胸をつかれ、救いを求めるようにマルランドを見た。が、マルランドはきゅっと唇を結んでそっと首を振るばかりであった。
「わたくし、夢を見ました。怖い夢でした」
　床にしなだれてルビスの膝を抱きながら、アミアカルバは少女のような声で言う。
「みんな、みんな、わたくしがいけなかったのですわ、お姉さま。わたくしが、ルビスさまを密かに恨み、こころの内にいつもないがしろにして顧みることがなかったから。主人グアモンについても不満ばかり持って、自分のことや娘のことばかり考えてくれぬと責めたから……悪い悪いわたくしに、ミトラ神が夢で罰をお与えになったのですわ。……ああ、ほんとうに恐ろしいことでした……夢で良かった！」
「叔母さま」
　アミアの涙にしとどに濡れる掌を、ルビスは肯んずることができなかった。振り払いたい

気持ちを必死に堪えて、彼女は視線を彷徨わせた。正気を失った当主の妻の相手をこれまで辛抱強くつとめてくれていた品位ある一族の女たちは、そんなルビスと眼が合うと、みな一様にまつげを伏せ、慇懃にそっと会釈をして、部屋を出て行ってしまうのだった。

「そうだわ。ねえ、お姉さまはご存じかしら？」

アミアカルバのことさらにはしゃぎ華やいだ声が、食堂の高い天井に反響して耳障りに響いた。

「ルビスさまは、今度お嫁にいらっしゃいますのよ。素晴らしいお祝いの宴の支度も、すっかりできておりますの。ああ、お姉さまがお戻りになるのが間に合って、ほんとうに良うございました」

「婿どのは連れてきたか？」

ルビスは振り向いた。

枯れ枝を杖になして、グァモン・セミアクィルスが沈鬱な顔つきで近づいて来る。その右足は、膝の上から無惨に変形し、今は少しも曲がらなくなっている。ひと足ごとにグァモンはひどい苦痛を感じているらしかった。夫の姿を見ると、アミアカルバは急に正気にかえったかのように、恭しく会釈をして退いた。それは貞淑にして慎ましい妻のあり様、彼女の理性をも越えて既に完全に身についてしまった動作なのだ。

ことばを失って唇を震わせているルビスのすぐ正面まで来ると、グァモンは重苦しい足取

りを止めて立ち尽くし、つま先から頭までゆっくりと不実な姪を睨めつけた。そして、出し抜けに、やさしい叔父の顔になり、ニッと朗らかに笑ったのである。

「よう帰って来た」

「お、叔父さま……！」

抱きつくルビスの背を、グアモンはゆっくりと一度叩いた。

「あまり立っておれぬのだ。座らせてくれ」

「はい」

マルランドが小さな椅子を持って来た。椅子は、長である男が座るには全く似つかわしくない、普段使いの手軽な石細工である。こんなものしか、破壊を免れることはできなかったのだ。妻と彼女に両側から支えられるようにして、グアモンはその座り心地の悪いものに、ぎこちなく腰を下ろした。

ルビスは拳を握りしめながら、立ったまま、待った。何を言われるとしても、まずは黙って聞くつもりであった。その上で、五大家全体の協力を要請しようと思う、とここに来る直前、彼女はディアルトと打ち合わせていたのだった。

「俺たちがいっしょに行かないほうがいいって言うんだね？」

ディアルトは静かに聞いた。

「そう思うわ」
扇型の隊陣を組んでゆっくりと羽ばたくラーミアの背には、一羽にひとりずつ、彼等について来ることを選んだ三の谷の男たち女たちが跨っている。みな、生まれてはじめてヴェリダヌスを越えたものたちだ。緊張した顔つきは無理もなかった。が、中には、ようやく許された冒険にきらきらと瞳を輝かせているピパ・ピパの姿もあった。ピパ・ピパの首には、父の勇敢な行為の徴である七つのオーブを革紐で繋いだものが預けられている。
「叔父さまがわたしをどう思ってるかわからない。いきなり、こんな大勢で行って、三の谷の代表として話をするのはまずいと思うわ」
「わかった」
ディアルトはうなずいた。
「じゃあ、俺たちはこのへんの岩山に隠れて、煉瓦城を見張ることにする。話し合いがうまくいったならば、合図をしてくれ。もし……もし、うまくいかなかったら」
「……刻過ぎても連絡がなかったら、すぐラルバタスに行って」
ディアルトのことばを遮って、ルビスは言った。
「だいじょうぶ。そんな顔をしないで。叔父さまはわたしにひどいことはしないわ。湖の巫女のところに行って、あなたの計画を話して頂戴」
「最初からラルバタスではだめなのか？」

眉根を寄せるディアルトに、ルビスは首を振った。
「行かせて。……お願い」
（ごめんなさい。でも、わたし、どうしても、うちがどうなっているのかを、見たかったのよ。
ああ、でも、まさかこんなにひどいことになっているとは……！）
苦しい胸を少しでも楽にしようとルビスが静かに息を吸いこんだ時、叔父がその薄い唇をそっと開いた。
「……騒乱があった。会議も荒れた。イデーンの秩序は変わってしまった。……が、ひとのこころの内にある理の力までが潰え去ったわけではないぞ、ルビス」
「……はい？　……」
「五大家並立による統率は既に瓦解を見た。次に来るものが他家との融和で、なんの不思議があろう。そなたが大地の種族の男を選ばなくてはならなかった理由を、わたしは理解しているつもりだ。……そう心配せずともよい。後ろめたく思うことはない。どこへなりと行って、好きなように生きなさい。今さら、止めだてはせぬ。そしておまえは、この災厄を越えて、必ず生き残ってみせなさい。それだけがわたしの望みだ」
「で……では……？」

ルビスは叔父の前に片膝をつき、その沈着で冷静な表情を信じがたいものを見るようにギラギラと見上げた。
「叔父上も、既に異変の予兆をご存じなのですね?」
「みな知っておるよ」
　椅子の背に凭れて、グアモンは笑った。
「どこやらから噂が漏れたらしくてな。わが家等はこの始末だによって、もうじき世界が滅ぶ、みんな死ぬと言われても、誰も驚かん。森や海のほうではまだそれほどせっぱつまった感触を持っておる精霊等は少ないようだが……長たちはみな見たのだよ、『力の環』によって、あの大惨事をな―」
「川辺のものたちを避難させてください!」
　いきなり本題を、ルビスは突きつけた。
「ラーミアを連れてきます。こちらのひとびとも、彼の不死鳥を使って飛べるようにお教えしますから。だから、みなを受け入れて欲しいのです。受け入れていただけなければ、川辺のものたちは全滅してしまいます。荒れ野でも、海岸沿いの風強地帯でも、どんな僻地だってかまいません。ヴェリダヌスのこちら側に、オーブ噴火に巻きこまれぬ場所に、彼等の……いえ、我等の村を、建設させて欲しいのです。いえ、いえ、全員揃って住むことが叶わぬならば、ばらばらでもかまいません。ランデール市内等には、何かひと手の足りない仕事

願を、お執り成しくださいませ……！」

グァモンは瞳を細め口を半ば開けて、真剣な顔つきのルビスをじろじろと見つめた。

（哀れな）

と、彼は思った。

（……そのような用件で参ったのであったか！

魔峰が噴火すれば、なるほど川辺なるものたちの住まう谷は、最も甚大な被害を受けるだろう。が、それだけではすまないのだ。イデーン全土が、崩壊の危機にある。だのに今さら、ヴェリダヌスを越えて来る許可を、我等が会議に求めるとは！　勝手に逃げて来たとても、どうせ助からぬ。今、それを咎めだてするだけの権限と力とゆとりを持ったるものが、このイデーンのどこにあろう？）

「掟に背を向けしもの、なお掟に縛らるる……な」

と、彼は言った。

「ルビスよ。長の座を捨てしおまえであるに、なおその性は長そのものに他ならぬのう」

「答えは？」

「むう」

グァモンは瞳を逸らした。

口先ばかり了承するはいとも容易い。真実を伝えれば、その了承に意味のないことも明らかとなる。が、真実はあまりにも苦かった。

(言えぬ……わたしには言えぬ。後々この不誠実が裁かれようとも、やはり言いとうない。そなたのその無邪気。純情。その意味もない熱意を、なぜ我が足で踏み消せよう？　真実の氷の刃を受けたならその瞳の煌めきもあえなく潰えてしまうやもしれぬ。夢見ておれば良い、ルビス。世々のさだめは我等の力の外にある。何も知らぬまま、こころゆくまで、自分のつとめを果たすがよい。アミアなど、あれあのように既にこの辛い現を離れておる。最後の夢に、邁進しつづけたまま、果てるがよい……。

幸福なルビス。たとえ、そなたのこころが、そなたを育みしこの家のものたちのものらを顧みず、ついさきごろまで逢ったこともない川辺のものたちにかけられているとしてもな。それがそなたの選択ならば、誰に止めだてできようか。

ああ、そなたにその機会と幸福を与えてくれたかの悪名高いみなしごに、わたしは感謝すら、したいくらいだよ……！)

「……ディアルトを」

と、グアモンは言った。

「連れて来なさい。逢いたい」

「何故？」

「そうさな」
グァモンは肩をすくめ、そのとたんにうまいことを思いついてニヤリとした。
「わが妻の為に、とでも言っておこうか。……アミアはそなたの婚礼を見たがっている。自分の邪悪が天に届き、偉大なる神託を歪め、すべての災悪の原因となったと思いこんでおるのだ。そなたの美しい花嫁姿を眼にしたならば、アミアの狂ったこころも慰められ、あるいは正気にかえるかもしれん……まぁ正気になどならぬほうが幸せやもしれぬがの」
「でも」
ルビスはどぎまぎしてあたりを見たが、話題にされている当のアミアカルバは夫のことばを理解できないのか、首を傾げて笑っているばかり。
「そんな……今は、それどころでは」
「まぁ、宜しいじゃありませんか」
ずっと黙っていたマルランドが、我慢しきれなくなったかのように乗り出して口を挟んだ。
「どちらさまとであろうとも、かりそめにもご結婚なさるのならば、やはりちゃんとミトラ神の前で宣誓をなさらなくてはなりませんわ。それもなさらぬなど、育ちの悪い娘みたいですもの。ね、時間など、そうかかりはしませんことよ。そして……ああ、ちょっとお待ちくださいませ！」
ちょこまかと走りゆくと、マルランドは部屋の隅の葛から何やら厳重に包まれた物を持っ

て戻って来た。広げられた包みの中身を見て、思わずルビスは息をのんだ。
あでやかな真紅が眼を射る。もう一度と袖を通すことはないと思われたカリクティス家伝統の刺繍、最もカリクティスらしい色と細工の豪華絢爛たる花嫁衣裳が、捧げ持たれているのだった。マルランドはせいいっぱいに腕を伸ばしてそれを高々と掲げたのだが、その長い裳裾は、冷たい床に届いて、あたかも炎が踊るごとくに流れ落ちている。
「なんとか残せたのです、これだけは――」
マルランドは言った。
「奥さまが、あの困難の中、我が身を盾に守り通されたのですよ」
「ああ……素敵ねえ――」
そのアミアカルバは、うっとりと衣裳に指を触れながら、ルビスを見つめて愛くるしい声でつぶやいた。
「ねぇお姉さま、これを着たルビスは、さぞや美しいでしょうね。楽しみですことねぇ」
「ああ……」
ルビスはうめいた。その肩に、当主である叔父の手がそっとかかった。
「……のう？」
叔父は言った。
「せぬか、婚礼の式典を。そなたと、そなたの真の花婿の神聖なる契りを。永遠の誠意と忠

実をミトラ神の前に誓わんか。……介添えをさせてくれぬか。それが、わたしの最期の務めとなるやもしれぬよって……せめて目出度い思いをしたいではないか」

「……叔父さま……」

「あるいは」

食堂の窓から、遠くコウデマ山の方角を仰ぎ見ながら、グァモンは小さくつぶやいた。

「そなたは、我等が一族の、そしてイデーン最後の花嫁となるのかもしれないしのう」

6

「ああ……ああ、もう！　どうしよう……どうしたらいいのかしら」

パンガシアノドン・ギガスに面した黄金色の城塞の最上階で、金の精霊等の当主ペルラ・ナナ・アヌビアスは、床一面に広げられた財宝を前に途方に暮れていた。重要なものとそうでないものを区分し、最も価値ある少数の、持って歩ける程度のものだけを選びだそうとしているのだが、決まりがつかない。どれひとつ取ってもあだやおろそかに捨てられるようなものはないのである。会議から戻ってよりかれこれ一日、彼女はこれにかかりきりになっている。何度かこれで良いと思われるところまで整理がついたこともあるのだが、小一時間とせぬうちに失っても構わないほうに入れた何くれにどうにも耐えがたい未練が生じて、また

しても初めからやり直してしまうことになるのであった。おまけに今日は風が強く、ちょっと油断をするとあれこれが飛んだり転がったりして、すぐごちゃ混ぜになってしまうのだ。
　高々と結い上げた髪を掻き乱して、ペルラはべそをかいた。
「ほんとにもう、冗談じゃないわっ。どうしてうちはこんな嫌らしいところに建ててあったんだろう。もっと内陸の、もっと地盤の固いところにあれば……ああ、丈夫な蔵のひとつふたつくらい、とっくの昔に建てておけば……」
「奥よ？　……おお、そこにおったのか？」
　几帳の陰から頭を覗かせた彼女の夫トリファスキアータは、どんよりと濁った瞳をにたにたと笑わせてこちらに来た。
「まあだそんなことをしておるのか？　おやおや。ほおほお。これは見事な剣じゃな」
「触らないで」
「おお、持ち重りがするのう……どれ、振り心地は」
「止めてったら!!」
「うう！　脅かすなよ。わかった、わかったよ」
　黄金の剣を振り上げて得意そうに見栄を切ったトリファスキアータだったが、凄まじい剣幕で詰め寄られたので、赤ら顔をしかめ、未練たらしく剣を納めた。
「いやいや。うちにはこんなに財産があったのか。知らなかった」

「ああた。ちょっと！　また召し上がったのね！」
酒臭い息を嗅いだペルラは金切り声をあげて、夫を押しやり、床いっぱいの宝石・金細工・飾り鎧や錦の衣裳などをそそくさと取りまとめた。
「こんな時だっていうのに……まったく、なんてひとなんでしょう。酔っぱらってひとの邪魔をすること以外に、なにかおできになることはないのですか。おわかりでしょう、今に、オーブが、魔峰オーブが爆発するんですよ！　イデーンじゅうが大混乱となるが眼に見えているのですよっ！」
「うっ」
トリファスキアータは気弱く床にへたりこみながら、妻のひと言ひと言につぶてを投げられたように顔をしかめていたが、最後のほうを聞くとみるみる青ざめ、海に面した窓に駆け寄り、げぇげぇとひどい音をたてた。ペルラは大急ぎで背を向け、両手で耳を塞いだ。その口許はへの字に曲がり、瞳には絶望と苦難の涙がじわじわと滲んだ。
（こんなひとを当てにしちゃだめだわ。なんとか、カボンバとふたり、うまく生き残らなくては）
黄金の毛皮持つ彼女のひとり息子は、もちろんこのような事態だからといっても、なんら普段と変わりはない。ひとり勝手に、いつも通りの気ままで単調な遊びに興じている。災厄も崩壊も理解せぬゆえに何の恐怖も抱くことのないらしいそのこころを、母の歪んだ愛情は、

この上なく頼もしいものに思い做した。

（そうよ。このような尋常でない時こそ、カボンバの真価を発揮する時なのかもしれない。五大家会議が機能しなくなった今、我が息子こそ、イデーン全土に君臨するただひとりの王となるのかもしれない……！）

泣き濡れた顔のまま、ペルラは唇を狂ったような笑いの形に開いた。

（ああ、だからこうしてはいられない。急がなくっちゃならないわ。カボンバがイデーン王に即位する時、誰にも恥ずかしくないくらいの立派な支度を、宝物を、なんとか無事な場所に移しておかなくっちゃ！）

またしてもせっせと床の物を選り分けだした彼女の膝に、いつの間にか小さな猫のようなものがまとわりついている。

「しっ！　こら、しっ！」

うるさがって払い退けているうちに、ペルラはふと、その猫の美しい毛並みに気づいて手を止めた。

「おやおや。いい色の毛皮だねぇ……まるで白金のようじゃないか。なんだい？　おまえ、どこから来たんだい？　もう少し大きくなってくれないと、手袋の縁飾りにもならないけどねぇ」

うっとり撫でようとすると、猫は背筋の毛を逆立てて尾をふくらませてフゥッと牙を剝いた。

「ひっ」
小さな猫に凄まれて後退りする妻の背を、トリファスキアータはどんより曇った暗い瞳で眺めやった。酒精の悪戯はようやく治まりかけていたが、この期に及んで我が財産を検分などしている女の意地汚さは、弱りきった彼の胃の腑に、別の種類の吐き気をもたらした。
が、そうもいってはおられぬ。彼は思いだした。わざわざここまで昇って来たのは、用事があったからなのだ。
だるそうな身のこなしで窓を離れると、トリファスキアータは再び妻に近寄り、胡散くさげな瞳で睨めつけられて唇をとがらせた。
「邪魔をしに来たのではない。そなたに客だ」
「え。誰よ？　こんな時に」
「森の長だ」
どうだ、と言わんばかりに、トリファスキアータは低く宣言した。
「長老ミラルダ・シクラソマ・オトシンクルスどのが、そなたに直々に何やら大事な相談があるそうだ。すぐ行って、お相手をしなさい」
ペルラは凄まじい目つきで夫を睨むと、すっくと立ち上がった。
「参ります。……ああた、ちょっと。ここを見張っていて。ただし、絶対に、何も弄らないで頂戴よっ！」

（雨には、魔峰の噴火を止めだてするほどの力はない）

パンカックスの滝もまたこの風にその逞しい姿をかすかに歪めていた。瀑布の清冽なる水の壁に入りこんで、その娘とも見紛うばかりの華奢なからだを打たせながら、シフィルはひとり考えこんでいた。

（が、豪雨は、それだけでいと高き山々をも一気に突き崩す力を持っているはずだ。たとえばこの滝と同じ程にまで集中した雨を降らせるならば）

シフィルのまつげが震え、青い瞳がそっと開かれた。

飛び散る飛沫のために周囲は白く靄っている。ごうごうと滝の唸る音に耳が塞がれ、体温は可能な限り低く落ちている。彼と巷は、今は遠く隔てられていた。たとえ世界がどうなろうと、ここにいる限りはなにごとも起こらぬに等しいかのように感じられてならなかった。

彼のからだとこころには、この聖なる水に秘められた途方もない力がとめどもなく流れこんでいる。シフィルは、豊かな流れの中のただ一滴の水のように、世界を構成する数多の生命のほんの微細なひとかけらでしかない自分を知り、同時に、ただひと粒でありながら、他のすべてと手を繋ぎどこまでも汎がってゆくことのできる自分を知った。彼は自分を、かたちあってかたちなきオンディーヌ、ひとつにして数多であり数多であってひとつでしかないオンディーヌ、臆病なくせに悪戯好きなあの素朴な生命と、そう違いないものであると思う

　のだった。
　滝の周囲には、今もそのオンディーヌたちがいた。何知らぬげに集まっては離れ、水の壁を昇っては落ちまた昇っては落ち……飽きることなく、こどものように夢中で遊んでいる。笑いさざめくようなその気配にさし招かれたか、滝壺近くにまで迷いこんできた一頭の蝶が、うっかり羽根を濡らしてしまいそうになっては淡紫の鱗粉を散らしながら慌てて逃げてゆくのが見えた。
　シフィルは声をあげて笑った。
　冬空はすがすがしく澄み渡り、遠い山々までも遥かに見通せた。水際の風景は、美しく、平和だった。恐ろしい天変地異の予兆は、まだここには、その片鱗たりとも現れてはいないのだった。
　笑って笑って、それからシフィルはまた、凍りつくように黙りこんだ。
　水は確かに彼を鼓舞してくれる。勇気づけてくれる。だが、酷い現実から、辛い定めから、いつまでもその青い眼を背けておくことは、長である彼にはけして許されぬことであった。
　水は方円の器に従う。用いるものの器量によりてもまた、恐ろしい武器にも素晴らしい道具にもなりうるのだ。
（豪雨によって……）
　中断した考えに、彼は強いて自分を押し戻した。

（弱い地盤を土砂流となして流れ去らせることはできるはずなのだ）

（そう、水は大地をも動かす。炎を踏み消し、森を癒し、黄金をも飲みこんで覆い隠してしまうものだ。水は凍り、湧き、蒸散する。雲となりて空を駆け、大河となりて地を走り、地下に潜りても見えざる水脈となって全体に行き渡る。水は世界を繋いでいる。水の、その大いなる力を、うまく使うことさえできれば……！）

（水が主である流れであるならば、低きに向かいつつも、固い地盤は迂回して、曲がりくねった道筋を取るのが普通だ。

だが、もし、今、共に流下する土石の量が水の量に勝るような流れを作りだすことができたならば……そう、それは、地面を捏ねた粥のようなものだ。大量の水を含んだ泥流は、それ自体の重みのために滅多なことでは阻まれぬだろう。それは、うねりはしない。ただ直進する。丘を抉り、巨礫を運搬し、渓床を浸食しながらも、海に到るまで、どこまでも直に進みつづけるだろう）

（そのようにして、かの高山を削り、大いなる幅を持つ河を作りだしておけば、噴火の熱を吸収できないか？　溶岩流を制御することは？）

（……だが雪は？）

（魔峰周囲の氷はどうなる？）

（大地の種族が手伝ってくれなければ）

(ああ、だが、いったいどうやってその魔峰まで辿りつくのだ……？)
(我等にはヴェリダヌスを越えることすら叶わぬというに！)
我が身の無力さを思い知らされる感触に、シフィルが思わず悩ましいうめきを洩らしながら長いまつげを震わせた、その時である。
「若君！」
そら耳かと疑ってみれば、肩にかかる巻毛を煩わしそうに背に跳ね除けながら、従弟のアンジェリカスが血相を変えて駆けて来るではないか。
「どうした」
シフィルはするりと滝を抜けだし、水上に立った。
「何かあったのか」
「は、はい」
はぁはぁと荒く息をつくと、アンジェリカスは腰まで水につかりながらそのすらりとした腕を上げて、路、つのぶえ座の方角を差し示した。
「さきほど、あちらの空を、大群の鳥らしきものが……その巨大さからして、恐らくは、ラーミアかと……！」
「なに!?」
「進路からして、カリクティス家を目指したのではないかと推察されまする」

「炎の城をだと?」
「はい!」
(なぜ?)
カッと開いたシフィルの眼に混迷の蒼白き光が彷徨った。が、やがて、明るい場所に出た猫族のように、その瞳がすうっと集束する。
(……我等はラーミアを必要としている……!)
「大災の前には鳥たちはその住み家を離れるとか申しますが」
アンジェリカスは急きこんだ調子で続けている。
「……まさか、まさか、もうじきに、山が」
「参ろう。アンジェリカス」
静かに、シフィルは告げた。
「は?」
「そなた、不死鳥が見たくはないのか?」
腰までもある銀髪をばさりと靡かせて、滝の名残なる水飛沫を陽光に輝かせ星のように散らしながら、美貌の当主はあでやかに笑った。
「わたしは見たいな。これでもたいそう物見高い性分でな」

「動きだしたわね」
紫色の蝶が囁きながらひらひらひらと飛んだ。
「うん」
小さな翼豹が、瞳を細めた。
「間に合うといいね」
コウデマ山の頂上だった。蝶と翼豹は、ミトラ神の左右の拇指なる巫女と神官のそれぞれの分身であった。現し身を遠くふたつの神殿に残しながら、ふたりはこれまで、この姿を借りてイデーンじゅうを駆け巡ったのである。そこで起こっていることがらを知り、操作するために。
夢や無意識を利用して語りかけた相手は多くはなかった。直接頼みごとをしたのは、森の長ただひとりだった。
彼等は彼等に許される範囲に従って、ほとんどひとびとの眼に触れぬような道筋をつけたのである。
そのような尽力も、いまは最後の段階に近づいていた。
「じゃあ、行くわ」
「ぼくも、すぐに」
「もうわたしたち、逢えないかしら」

「しかたない」
翼豹は笑うような顔をした。
「太陽と月が共に天に昇っていられる時間は、多くはないのが定めだもの」
「……そうね」
翼豹のとがった耳の先端に接吻でもするかのようにほんの一瞬羽根を休めると、蝶は空気の中に溶けこんで、見えなくなった。そして次の瞬間、翼豹もまたフッと姿を消した……。

7

「……少しお痩せになりましたわね」
背中の釦を止めてやりながら、マルランドがつぶやいた。
「そうかしら」
ルビスは曖昧に答えた。
(何を召し上がってらしたやら)
マルランドは胸の痛みを覚えたが、せいいっぱいの笑顔を作って、言った。
「さあ、できました。こちらをお向きくださいませ」
ルビスは両手に裾を掲げ持ちながら、素直にからだを回した。

「ああ！」
マルランドは胸に手を当て、今にも泣きだしそうな顔でにっこりと笑った。
「なんてお美しい……なんてご立派なのでしょう！」
「そお？　変じゃない？」
そっけなく言いながらも、ルビスは頬をほんのりと上気させてそそくさと裾を直し、ことさら行儀よくその手を重ねて、微笑んでみせた。肩や腕が自然と殊勝らしく淑やかに流れ、表情は匂やかに愛らしく丸みを帯び、歓びと自負とが、その瞳を鮮やかに輝かせている。
瓦礫の床に敷いた古いリネンの上に恬然と立った彼女の姿は、まるで一幅の絵のごとくであった。ごわごわするパニエの上に何尋も波打った朱緞子の布地は、生まれたての火喰い鳥の羽根のように濡れ濡れと妖しく光り、熱心に梳き解したおかげで淡紅に染まった夜明けの雲のような彼女の髪を、この上もなく引き立てた。あばらから胴にかけてをぎゅっと窄ませ腰からまた華やかにふくらみ広がるシルエットはあまりにも古風だったが、彼女のこどもっぽく骨ばった手足や年齢の割にはあまり健やかに育ったとはいえない胸許を、可憐に清楚に、演出しているのであった。
山の端に昇りかけた太陽のような、闇夜を照らす焚き火のような、そして、荒野にひとつ昂然と頭を擡げて咲き誇る炎芍薬の花のような……麗しくも初々しい、正に炎の王女と呼ぶに相応しい、ルビスの風格であった。赤子のころから彼女を見つめ育ててきたマルランドに

とって、このようなルビスの姿は、まことに誇らしく、涙ぐまずにいられぬほどに喜ばしかった。マルランドは暫くの間、ぼうっと上気したような瞳でルビスを眺めた。カリクティス家の栄光の最後の証でもあるかのようなその華麗豪奢なありさまを、跡継ぎ娘の真実幸福な一瞬を、確かにまぶたに焼きつけ、留めておこうとでもするかのように。

が、やがて彼女は頭を振って現実に立ち戻った。

「さ、参りましょう。みなさまお待ちでございましょうから」

「ええ。でもちょっと残念だわ。マントがあればなぁ」

ルビスはつぶやいた。

「ああ、やっぱりあれを持ってきておくんだった。……あれはまだランデール別邸の花瓶の中にあるかしら……」

「なんですって？」

長いこと子守りであった女は、聞き捨てならぬことを聞きつけて思わず眉を聳やかした。

「それはまさか、あの『火炎孔雀の涙』を衿飾りにしたマントのことじゃあございませんでしょうね？　確かあれは、私の責任でどこかに紛失したのではないかと、あなたさま自身がふくれっ面になって厳しくご叱責なさったでは……」

マルランドは唐突に口をつぐんだ。ルビスがクスクス笑いながら、急に彼女の胴に抱きついたからである。

「ごめんなさい、ごめんなさい！　そうなの、あれはね、ほんとうはわたしが隠したの」
ルビスは舌を覗かせて甘え、機嫌を取ろうとする時いつもそうしていたようにうわ目使いになってマルランドの仏頂面を覗きこんだ。
「だって、ひどく汚してしまったんだもの。うんと叱られると思ったんだもの……！」
「……まぁ……呆れた。叱られるからって、ものを隠すなんて。なんて品のない。いったい誰がそんなことをお教えしましたか？　私はあなたさまに何とかほんものの淑女になっていただこうとそれはそれはいっしょうけんめいに……」
「ねぇ、マルランド」
堪えようもなく、ルビスは笑う。
「なんだかわたし、今やっと、家に帰ったような気持ちがしたわ。あなたにガミガミ言われて、まるで幸福なこどもだった昔に返ったような気がしちゃったわ」
「なんですか。それじゃあわたくしは、まるでいつもいつもあなたさまにガミガミ申していたようじゃありませんか！」
「……まるで、ね」
「嫌ですよ、おひとの悪い。おからかいになるもんじゃありません！」
「痛っ」
マルランドは丸い頬を真っ赤にして、ぺしりと鋭くルビスの尻を打ったのだ。

「さぁさぁ、急いでください！　ったく……ひと騒がせな、自分勝手な、ほんとにしょうのないお嬢さまですよぉ……」

　葦毛の妖馬に跨ってアンジェリカスとふたり煉瓦城に辿りついたシフィルは、舞い飛ぶ砂塵、瓦礫の山、そして流された血の染みなどの惨憺たる破壊の跡をその美しい碧眼に映してしまって、眉を曇らせた。

「いったい何があったのだ？」

「……わたくしは、裏を探ってまいります」

　アンジェリカスは早くも緊張のあまり顔色を真っ白くして、低く囁いた。

「もはや戦は済んでいるかに見えますが、若君、重々、油断はなさいませんよう」

「うん」

　言いながらも、姑息にふるまうはシフィルの流儀ではなかった。アンジェリカスが見えなくなると、彼は正々堂々と正門を目指し、入り口に立って大声に案内を乞うた。

が、何度声高に呼ばわっても迎えに出てくるものとてない。

「無理もないか。この様子では」

　痛ましそうに首を振ると、シフィルは崩れかけた城を見上げてみた。両手をだらりと垂らし、半眼になってあたりの気配を窺う。彼の長い銀髪はさらさらと涼やかな音をたてて広が

った。
「……ふむ……どこかには、いるな。この気配は……ルビス？」
「ご覧くださいませ！」
アンジェリカスが、素早く戻って来た。
「七色の尾羽根が。あちらには他にもまだたくさん、落ちておりました」
「やはりラーミアが来たのか……ラーミアと戦ったのかな？」
「踏みこみましょう！」
アンジェリカスは気を吐いた。
「炎一族はもともと山に近すぎます。きっと密かに何か、良からぬことを企んだのです。現場を押さえましょう！」
「ひとを疑うのは悪い癖だぞ」
シフィルは苦笑したが、先にたって門を潜った。
ふたりはやがて、回廊に彷徨いこみ、潰れかけの城の周囲を、ぐるぐるとあてもなく歩き回ることとなった。物音がするたびにアンジェリカスはサッと身構えたが、ひとに出会いはしなかった。強すぎる風に剥がされて飛ぶ何物かが、脅かすばかりであった。
「……誰もいないようですねぇ……引っ越しちまったのかな」
アンジェリカスは首をひねった。

「いや、長どのはおられるだろう。ご健在であればだが」
「長が無事なのに、この汚れかたですかぁ？　よっぽど疲労困憊しちまってるってことかなぁ……やれやれ。歩きにくいったらありゃしない」
アンジェリカスは焦れたように足許の石壁の破片を蹴った。と、その音に驚いたように動いたものがある。崩れ落ちた柱の陰に、誰かいる。
「誰だ!?」
たちまち若長を庇うようにアンジェリカスが飛びだした。青銅の長剣を抜き放ち、くせものの消えた柱の陰に向けて油断なく構えながら、再び叫ぶ。
「我等はいと清き水の一族、無益な争いをする気は毛頭ないが、出てこなければ敵とみなす。こちらから切りこむぞ！　よしか!?」
「ひゃあ、待ってください」
「お許しください！」
まろび出てきた者たちを見て、水の種族の従兄弟同士はあっけに取られた。ぷくぷくと太った頑是無い娘たちが、頭を瓦礫の床に擦りつけんばかりにして這いつくばったのである。
「き、き、切らないでくださいぃ」
シフィルはアンジェリカスの腕に手をかけ首を振って剣を引かせると、娘らのそばまで行ってしゃがみこみ、やさしく声をかけた。

「これ。懼れなくとも良い。そなたら、ここのものか？」
「はい、シフィルさま。お城の手伝いのものにございます」
「ニアサエとツクナレと申します」
口々に言って、娘たちはなお頭を低くしようとして、額をゴリゴリと床に擦りつけた。
「わたしを知っているのか」
シフィルは微笑んだ。
「いったいどうした？　何があったのだ。この惨状、説明してくれぬか」
「はい」
姉妹は顔を見合わせ、互いに譲りあうようにつつきあった。シフィルは辛抱強く待った。アンジェリカスも渋々警戒を緩めながら若長の隣に片膝をつき、待った。
やがて年長のニアサエが、つかえつかえ説明しだした。ルビスの失踪、クリプトカリオンの激怒、そしてダトニオイデス配下のものたちの奇襲のことを……。
「……もはやこちらに残っておりますものは多くはございません。首長さまは大怪我をなさいましたし、奥さまはお気がふれてしまわれました。正直に申しまして、私どもとても、もはや何もかもが耐えがたかったのです！　このような事態になりましたからには、もうこちらにいる意味もないことと思い、ランデールの母の許に帰らしていただこうと姉妹連れ立って城を出ました。けれども……」

喉がつかえたかのように、ニアサエは言い淀んだ。

「けれども。何やら巨けな鳥がたくさんこちらに舞いこむのが見えましたものですから！　やはり、やはり、私どもは……」

「戻って来たのか」

シフィルは眼を細め、どうだとばかりに、アンジエリカスを振り向いた。

「恐ろしかったろうに。なんと気丈な娘たちではないか」

「はあ」

「このようなものたちに慕われているグァモンどのが羨ましくなるのう」

「いえ、違います」

ツクナレがあっけらかんと声をあげた。姉が慌てて黙らせようとしたが、シフィルの穏やかな様子にすっかり安心してしまったツクナレは、ぺらぺら得意気に喋りだしたのである。

「グァモンさまのためなんかじゃありませんよ。あたしたち、ラーミアたちの背の上に、デイアルトとかいうひとを見たように思ったんです。黒い髪の、黒い服のひとでした。ルビスさまをさらったひとがそんなだったはずです。ですから、ひょっとすると、ルビスさまが帰って来てくださったのかもしれないって……」

「……ツクナレ！」

ニアサエが饒舌なる妹の口を押さえた時には、シフィルはもう納得したと言わんばかりに

うなずき、立ち上がっていた。
「真の長(おさ)たる血を持った憧(あこが)れのルビスさまがお出(で)ましになったならば、カリクティス家はこのような状態からでも、再び華麗(かれい)に立ち上がり復興(ふっこう)するかと思ったのだな？……行こう、アンジェリカス。我等はルビスを見つけださねばならぬ！」
「と言(い)いますと？」
足早に歩きだす若長の後を慌てて追いかけながら、アンジェリカスは問うた。
「決まっておるではないか。ルビスは今、ラーミアを手にしておるのだぞ!!」

大広間の入り口に、グアモンが待っていた。着のみ着のままの普段着(ふだんぎ)の上にどこやらから見つけだした炎十字の肩当てだけをつけ、炎の長は壁に寄りかかって、ようやくのことで立っていたのである。
マルランドは小さく会釈をして、ルビスの手をそっと彼の腕に委(ゆだ)ね、退(しりぞ)いた。
「……杖(つえ)は」
ルビスは小さく尋(たず)ねた。
「いらん。そなたに、支えてもらう」
グアモンはニヤリと笑った。
「参ろうか、花嫁(はなよめ)よ」

時折アンジェリカスに胡散臭そうに睨みつけられながらも思わずふらふらと水の長の後について来たニアサエ・ツクナレの姉妹は、脇部屋から大広間に踏みこんだとたん、硬直するように、見えない壁にでも打ち当たったかのように、唐突に立ち止まった長い銀髪に、不安な顔を見合わせた。たまらず、ダッと駆けこんだので、ふたりもまた、見ることができたのである。

瓦礫の床の真ん中に僅かばかり掃き清められた直線の道を、真紅の婚礼衣裳に身を包んだルビスが、今、叔父グアモンの肩を支えながら、しずしずと、ゆるゆると、ミトラ神の彫像を掲げた祭壇に向かって進んでいた……。

低く、高く、ひとり歌う声はアミアカルバ。当主の妻は、そのあどけない瞳を狂った情熱と感激に輝かせながら、だが、確かにこの場に相応しいなんとも美しい清らかな声で、炎一族の栄光を、ミトラの恩寵を、朗々と歌いあげていたのである。

神像の前には、黒い髪黒い革衣の青年が緊張した面持ちで立っていた。花嫁の道の片脇を埋めていたのは、姉妹が見たこともない様子の男女であった。そのために、姉妹には、この慶びの列は、カリクティス家の習俗を確かに継承しながらも、奇妙に異国風なものであるかのように見えてならなかった。

七色の珠を繋いだものを小さな首にかけていた他所者の少年は、ルビスの歩みがゆっくり

と自分の前までさしかかると、やんちゃに笑いながら前に出て、その首飾りを無言のまま花嫁に差しだした。ルビスは困惑したように動作を止めたが、叔父になにやら囁かれると、にっこりと笑って膝を折り、頭を垂れ、少年に向けた。少年は得意気にそれをかけてやろうとした。だが、首飾りは彼女のあまりにもたっぷりした薔薇色の髪のどこかにひっかかって止まってしまった。ルビスは痛そうに首をすくめながら、顔を上げた。と、それはちょうど高窓から差しこむ太陽の光をいっぱいに浴びる位置だったのである。

天の宝石、ラムプロローグスの首飾り、七つのオーブの冠は、はにかんだように微笑むルビスの紅蓮の雲のごとき巻毛の上で燦然と輝き渡った……！

おう、と広間じゅうが声をあげた。

「……丹、碧、鬱金、翠……」

水の若長は擦れ声で茫然とつぶやいた。

「銀鼠、菫、そして呂……ああ、あれは……あれは伝説の……！」

「ルビスさま、きれいね」

ニアサエは言った。

「お幸せそうだこと」

ツクナレも言った。

「もっともっと、大勢のひとが祝福してさしあげられたら良かったのに」

叔父に促されて、ルビスは歩みを続けた。道はやがて終点になり、その手がとうとう、グアモンから、黒衣の青年の手に渡された。が、若いふたりは足萎えの叔父をも離さなかった。叔父を真ん中にしてその背を両側からしっかりと支え、二人並んで、ミトラ神の影像をまっすぐに見上げたのである。

「全能なるミトラの前に立ちて」

グァモンの凛とした声が、広間の高い天井に木霊した。

「我、炎の当主グァモン・セミアクィルス・カリクティス、その委ねられた権限をもって宣する」

「……若君……」

アンジェリカスが消えいるほどの声で囁いた。

「……さ、聞こえませぬか？　なにやら、どこぞで」

「地鳴りだ」

シフィルは汗ばむ拳をきつく握りしめた。

「わが体内の水までが、盛んに揺らされるのを感じる。おお、……あれは、鳥の騒ぐ声ではないか？」

「これなる若者、大地の長の連なりであるディアルト・ケントロピーゲと、これなる娘、炎一族の次の当主たるルビス・アピスト・カリクティスは、互いに互いをその半身と認めた。今この時よりふたりは、天上天下未来永劫なにものにもけして隔てられぬ。夫婦となりて、ただひとつの生命として生まれ変わらんと欲し……」

ルビスは頬が熱くなるのを感じた。

（ああ。今こそ、今こそ、わたしは彼の妻になるんだわ……！）

が。

「……待ってください！」

なんと、ディアルトが、叔父を止めたのだ。

ルビスは蒼ざめて、彼を見つめた。みるみる潤むその瞳に、しかし、彼は、安心していいよというように、微笑みかけた。

「このような神聖なる誓いに際し、我が名を偽りおくは憚られます」

「偽りだと？」

ざわめき騒ぐひとびとを制して、グァモンが聞いた。

「いったいどういうことだ」

「はい。ディアルトとは通り名にすぎません。ぼくには、他に、真実の名があります」

「真実の名前？」
眉を曇らせるグアモンをまっすぐに見つめ返して、ディアルトはうなずいた。
「イデーンに住まうはみな精霊、互いにその名を知られることを恐れる習慣はありません。しかし地上のひとびとは、魔法の力を持たぬ故、それを知らず、ひどく恐れます。地上には、魔法を使うものに真実の名を知られるとひとはその傀儡とされてしまう、という言い伝えがあるらしいのです。イデーンのひとびとのさまざまな力を見て、母はぼくの本名を明かすことを厭いました。たとえ力強き精霊のみなさんに出会っても、けして呪いをかけられぬように、仮の名を通させたのです」
「あはは。そいつぁ迷信だぁ！」
ピパ・ピパは笑ったが、あたりのものにつつかれて慌てて黙った。
「……ぼく自身も」
と、ディアルトは続けた。
「ディアルトという名にすっかり馴染んでいます。普段はもうひとつの名前を思いだすこともありません。けれど、このような大切な誓いの時にこそ、母のくれた、わが秘密の名を、まだ誰も知らぬ真実の名を使いたいと思います」
「わかった。では改めてその真実の名とやらで誓いを立てるがよい」
グアモンは唇を歪めた。

「そうさな。思えばケントロピーゲというのも一種欺瞞だわい。ミトラ神より与えられた血筋を正しく言えばそなたはバコバ・コリドラスのはず。捨てさせられた家名など、もはやどうでも良いのやもしれぬが……ルビス？　そなたはどう思う」

「わたし？」

「プフェルスマの子、エスメセスの娘」

グァモンは言った。

「我が最愛の姪である、ルビス・アピスト・カリクティス……と、こう言ってやるべきところであるのだがの。……あるいは、そなたも、ただのルビスのほうが良いかな？」

叔父は、姪の肩にかかった腕に、ずしりと重く力をこめた。

（そう。確かに、わたしは、家を捨てた娘）

（次の長でもない、炎の一族の姫君でもない。ただの、ひとりの娘）

ルビスは頬を紅潮させて、答えた。

「はい。そのように言ってください」

「では。基へ……おっと、いかんいかん」

グァモンはかすかに肩をすくめた。

「して、花婿どの。そなたの名は？」

「我が名は」

ディアルトは、その声を誇らしげに響かせた。

「ロト……!!」

（……ロト……？）

ルビスはこころの中でつぶやいた。

（ロト……ロト……それがあなたのほんとうの名前？……）

彼が自分にさえもその名をずっと隠していたのだと思うと、悔しくなっても当然なはずだった。だが、ルビスの胸には、奇妙な温かさが甘い懐かしさが……不思議な幸福感が広がっていたのだ。

彼女は忘れていた。かつて、その名を呼んだことがあるのを。彼女はあまりにも幼すぎたので、今日その夫となる男の名をうまく発音することができなかった。何度も聞き直し、言い直しているうちに、その真実の名を偶然言い当ててしまったことがあったのだった。

（ロト。ロト。あなたはロト。

わたしは、わたしだけは、今この瞬間からそう呼ぶわ。あなたのことを、その真実の名で……！）

「ロトよ。汝はこれなる娘ルビスをその妻と認め、永遠の忠実と絶対の信頼をもち、世々の

憂い数多の困難に遭おうとも、その愛を貫くことを誓うか？」
「はい」
ロトであるディアルトは、今度はきっぱりと言った。
「誓います」
「……ねえ？　変だよ？」
ピパ・ピパが顔をあげた。
「ラーミアが、ラーミアたちが呼んでる！」
「これ」
川辺の男は、少年を叱った。
「今、大事なところなんだ。そう騒ぐんじゃない」
「ああ、でも、普通じゃないよ。あんなに切羽詰まった声で呼んでるじゃないか！」
ピパ・ピパは、高窓と、ミトラ神の前の花嫁花婿との間を、必死の眼つきで交互に見た。
「ああ、ディアルトに……じゃない、ロットとかいうんだっけ、に教えなきゃ……どうしよう……困った。ああ、さっさと終わってくれないかな」
「ルビスよ。汝はこれなる若者ロトをその唯一の夫と認め、永遠の忠実と絶対の信頼をもち、

世々の憂い数多の困難に遭おうとも、その愛を貫くことを誓うか？」

「はい……」

全身を貫くような歓喜に震えながら、ルビスはその紅蓮の唇を開き、まっすぐにミトラ神の顔を仰ぎ見て、きっぱりと、宣した。

「誓います……!!」

その刹那。

魔峰オーブは遂に爆発したのであった。



第六章　崩壊

1

オーブに発した爆風は、空の怒濤となってイデーン全土を掃灑した。この時山頂の火口より吹き上げられた岩礫は、赤子の頭以上の大きさを持つ物ばかりを数えても幾十万、小さな物は遥かメガロドラスにさえも達した。天をも燻そうとするかのごとくもくもくと立ち昇った黒灰煙は、掻き乱された上空の高速風に運ばれて広がり、あたかも水盤に一滴落とした墨のように空一面を覆って精霊等の頭上をおどろしい闇夜に変じた。

噴火の衝撃と激烈なる地震による被害もまた甚大であった。テネルス草原には何百本という深い亀裂が生じ、アガマ岬は中途からぽっきりと折れ、コウデマ山はぐずぐずと地滑りを起こして周辺の地形を大きく変えた。大地の底を駆け抜けた地熱の嵐は貴湖レピディオを巻きこみ、水蒸気爆発を起こした。聖なる水鏡を内側から砕き破って突出した巨大な水柱の中

から、家ほどもある岩塊が飛びだし、パンカックスの滝に落ちてその流れを封じた。このためにネリル大河は痩せ細って砂底を見せ、ランデール市街に網目状に伸びた運河はみるみる渇水し、彼の地の主要な交通である舟の運行を著しく阻害した。そしてまた、オーブ山麓を固く凍結させていた分厚い水盤には多大な歪みが生じ、凄まじい雪崩が次々に六つの谷を襲ったのである。

『追放されし者』たちとそうでないものたちを過去の長きに渡って隔ててきた天然の屏風であったヴェリダヌス山脈は、この時もまたイデーンを分断した。この第一の噴火の際に奪われた生命の大半は、彼の二の谷に住む川辺の民であったのだ……。

二の谷の村において、大地の微動にまず気づいたのは、勇気や行動力や冷静さを持った壮年の男女ではなく、最もこころ弱い頼りないものたちであった。それは真昼に近く、みなが食事休みの前のひと働きにそれぞれ精を出しているべき時に当たっていたのである。そんなおりに、忙しく立ち働いてはいないものたち、たとえば、のんびりと寝そべっていた怠け者、座りこんでいた草臥れ易いもの、そして、無心な赤子と幼児と、床から起き上がることもできぬ病人や老人たちが、最も敏感であった。彼等こそが初めに、大災害の兆候を、彼等の村に忍び寄る悪魔の鋭利な爪の先を感じ取ったのである。

「……おかちゃ……？」

台所の冷たい床にぺたりと小さな尻をつけて、ぼろ布の切れ端と割れた皿でおとなしくままごと遊びをしていた小さなチャカ・チャカは、異変の兆しに最初に捕らえられたひとりであった。

床が揺れている。震えている。錯覚かと思うが、振動は止まらない。

ひどく気味が悪かった。尻のあたりがこそばゆくなってたまらなかった。

しかし、チャカ・チャカの幼い頭には、それがなんなのか、何が起こりつつあるのか、計り知れるわけもなかった。幼女は母を見た。せっせと包丁を使い、ストーブにかけた煮物の具合を確かめ、家族の食卓をてきぱきと整えている働き者の母の見慣れた背中を、何か祈るような気持ちをこめて、一心に見上げたのであった。

「……おかちゃ……ねえ、へん」

「なんだい？　ちょっと待っておくれ」

ガーは言い、つま先立ちをして、高い棚にある器になにげなく手を伸ばした。そこで、彼女もまた動作を止めることになる。

器が鳴っている。狭い棚を有効に合理的に、いっぱいに重ねた陶器が、かちゃかちゃと、ごつごつと、ぶつかりあって鳴っているのだ。

振り向いた母の尋常ならざる瞳の光に、チャカ・チャカは何かを感じてひっと喉を鳴らし、いやいやをするように首を振った。地鳴りが始まった。地底の奥深くに住む怪物が咆哮する

ような世にも恐ろしい忌まわしい唸りは、生まれたとたんに押さえようもなく拡大し、たちまち耳を圧するほどにふくれ上がった。

石を切りだしていたものも、水を汲んでいたものも、凍てつく畑を整備していたものも、村人たちはみな、この時はじめて、それぞれのその場にすくみ、全身を緊張させた。動きを止めてみれば、地面はいまや無視できないほどに揺れはじめている。ぐらぐらと、ゆさゆさと、足許の硬いはずの岩盤が、まるで煮立てすぎたスープの表面のように泡立っている。

ガーはハッとストーブを見た。鍋は生命あるもののようにがたがたと飛び跳ね、いまにも転がり落ちそうだ。ガーの両手が、その剝きだしの素手が、咄嗟に鍋の耳を掴んだ。

じゅっ……。

「うぁあん!!」

「来るんじゃないっ!」

チヤカチヤカは母に触れたかった。しがみつきたかった。抱きしめて欲しかった。だが、彼女が両手を広げて走りだしたとたん、愛する母は鬼のような形相で叫び、拒んだのだ。チヤカ・チヤカは恐慌を来してますます泣き叫んだ。そこに第一の揺れがきた。鍋の中身を、今は天井を焦がさんばかりに燃え上がったストーブにぶちかましながら、激しく突き上げる床に足許を掬われて、ガーは転倒した。どうとばかりに降ってきた母のからだにいきなり押し潰されて、チヤカ・チヤカはがつりと後頭部を打付け、口の中を切って血を流した。チヤ

カ・チャカは失神しかかった。肩に顔に胸に熱湯をかぶったにもかかわらず、ガーは叫び声ひとつあげなかった。彼女は低く唸りながら、灼熱する鍋肌に焦げついてしまったその手を、ひと思いに引き剝がした。

「チャカ・チャカ！　しっかり！　だいじょうぶかい？」

がくがく揺すぶられ頰を叩かれて、薄目を開けたチャカ・チャカは、見た。狂ったような母の瞳を。衣服を染めた赤いものを。皮が捲れ肉の見えるぼろきれのような何かを……。それがあのやさしい母の手か……？　チャカチャカは肺いっぱいの空気を悲鳴にし、そのあまりに喉を嗄らして窒息しかけた。

「……ああ……だいじょうぶ。だいじょうぶだから、泣くんじゃない。泣かないで！」

ガーは娘を抱いた。びしょびしょに濡れたその胸に折れんばかりに抱きしめながら、母は、不意にハッと顔色を変え、床に突っ伏した。幼い娘を庇いこみ、背を丸め肘をついて可能な限り低く蹲った彼女の背後で、生木を裂くような、びしりと乾いた音がした。一瞬のうちにどうどうと崩れ落ちてくる石作りの小屋の、壁が、梁が、屋根が、母子のからだにとめどもなく降り注ぎ、押し倒し、埋めていく……。

村は、あたかも大波に揉まれた艀のようにめちゃくちゃに翻弄された。石切り場に面していた家々は滑り落ちてきた岩石に踏み潰されるようにして壊滅し、川筋に近かった家々は崩

壊した崖と共に谷底まで墜落した。屋根のあるところは却って危険だと慌てて表に飛びだしたひとびとは、ひび割れ崩れて瓦礫屑に変わり果てた石段や倒れてくる家屋等にその進路を阻まれ、右往左往しながら争って、彼等の所有する最も大きな空間、水汲み広場を目指した。やっと逃れきてほっと胸を撫で降ろしたものたちの上に、だが、今度は何千何万という熱い礫が雨のように降りかかってきた。

彼等の畏怖と素朴なる信仰の対象であった天下一の高峰は、今は残忍で横暴な恐ろしい魔物と化していた。両眼から火球を発し燃える岩を乱暴に投げつけるといわれる怪物テュフォンだ。その内腑より吐きだされた大量の岩塊は、赤熱し黒い煙の尾を引いて耳障りな音を立てながらあとからあとから絶え間無く飛来し、無防備なひとびとを打ち据え、その衣服や髪や手足を容赦なく焼いた。広場が阿鼻叫喚の焦熱地獄と化すに、そう時間はかからなかった。熾火のように高熱を秘めた岩弾のいくつかは、ひときわ堅牢に作られたはずの風車小屋の屋根をも打ち抜いて落ちた。蓄えてあった冬越えの作物は、暫くの間不気味に燻ったが、やがて堪え切れなくなったかのように、一気に炎上した。燃え盛る麦穂や藁は、躍りながら舞い上がり、吹き殴りはじめた強い風にあおられて競争するかのようにどこまでも飛び、たちまち村じゅうに火災を広げることになる。

腕を吊った不自由なからだであったために力仕事を免れ、親族のマタ・マタと共に協同作

業場の一階で帳面つけの手間仕事をしていたガーの夫パーチは、咄嗟に頑丈な机の下に潜りこんだおかげもあって、最初の強震を無事生き延びることができたひとりであった。が、表に出るのは容易なことではなかった。作業場の一階は崩壊した向かいの家屋に押されて半分がた潰れ、階段も既に中途から存在しなくなっていたからである。崩れかけの壁を伝ってどうにか脱出しようとしているうちに、壁が落ちてぽっかりと外の見えているところがあった。燃え上がる水汲み広場を、ふたりは見た。石畳のあちらこちらに倒れ、真っ黒い小さな塊となってぶすぶすと煙をあげているのは、さっきまで人間だった物体である。彼等の仲間だったひとびとであるはずだった。だが、とてものことに見分けなどつきはしない。

「ちくしょう！　なんてこった。……みんな、ディアルトといっしょに行っていれば……！」

「無理だった」

思わず歯嚙みするパーチに、マタ・マタは奇妙なほど冷静な口調でつぶやいた。

ディアルトの一行は先発隊のはずだった。山向こうの連中を説得し、歓待してくれることがわかるまで、ひとまず小さなこどものいる家のものたちなどは待機することになっていた。が、それは一種口実でもあったのだ。かの偉大なヤベ・ヤベを失ってひとり戻って来たディアルトのいかにも大胆な提案に、静かな村の暮らしに慣れたものたちの中には、あくまで抵抗を感じるものも少なくはなかった。ディアルトは魔峰であったことを何ひとつ語らなかった。まさかヤベ・ヤベともあろうものが無駄に生命を捨てたはずもないが、信頼するに足

る指導者を、長年彼等の頼みの綱であった男を、この大事な刹那に失った村人たちは、既に統制を失いかけていた。先に出かけて行くことを選んだものたちと、谷に残るを選んだものたちの間には、眼に見えぬしこりがあった。越せぬ壁があった。山を越えたいと思いながら残らざるを得なかったのは、ほんとうのところ、怪我人であるパーチひとりだったのかもしれない。

「だが、こんなに早く異変がくると知ってたら、みんなだって……うっ」

言いかけて、パーチは、遠征への不参加の口実のひとつとなったことがらを思いだした。ガーやこどもらは？　この混乱の中で、いったいどうしているのだろう？

「家が……！　ああ、くそ。見えん。どうなったろう。俺は行く。家を見に行く！」

「止せ」

マタ・マタはパーチの肩を摑んだ。

「見ろ、四の谷側に火の手があがっている。今行くのは、危ない。無事ならば、のちに必ずどこかで」

「うるせえ！」

パーチはマタ・マタの手を振り払った。

「女房こどもを置いて、逃げられるか！　……おまえとは違う……!!」

思わず零れてしまった親戚の非難に、マタ・マタの無骨な顔がかすかに歪んだ。

彼は独り身だった。若いころに結婚したが、妻であったすみれのような娘は、無理な早産が祟って死んだのだ。子もまた長らえなかった。そして半年、一年。いくら再婚を奨められても、彼は首を縦に振らなかった。高望みをするものではないと諭されれば、いや、誰であれ断る、俺などに嫁いだのでは娘さんが不幸になるから、と嘯いた。それは奇異なあるいは身勝手な言い分に見えた。三の谷の人口は少ない。まともな男ならばきちんと妻を持ってこどもをたくさん産み増やすべきだと、老人などは露骨に憤慨し、説教を繰り返した。が、マタ・マタは頑として拒んだ。無口な性分も災いして、彼を嫌い、変人と呼び、ひそかに仲間外れ扱いにするものも多くなった。

が、マタ・マタは、女やこどもたちからは、静かに慕われ、敬意と遠慮がちな愛情をこめて遇されたのだった。彼は働きもので辛抱強く、偉ぶることがなかった。弱いものをそっと庇い、どこのこどもたちをも分け隔てなく可愛がってくれた。そして何をするにも、いつも目立たず、その大きな逞しいからだを恥ずかしそうにすくめているのだった。年をとった女たちは、彼の不自由さや倹しい暮らしぶりを案じては、母のようになにくれと面倒を見たがったし、若い娘たちは後添いにして欲しいものだと心を砕き、丁重に不器用に遠ざけられれば遠ざけられたで、今度は兄思いの妹のような気持ちになり、死んでもなお想われつづける女の幸福に尽きぬ憧憬を抱いた。

これは男たちには面白くなかった。全く気にいらなかった。谷の男等はといえば、普通は

自分の家のことでせいいっぱいだ。親切な心持ちがあったとしても、他人にまでいい恰好をしてみせる余裕はない。マタ・マタの人気は、彼等を傷つけた。振り返れば自分には、すっかりお内儀さん然としてしまった古女房と、煩く付きまとうこどもらしかいない。他家の奥さんやどこぞの若い娘に特別なふるまいなどしようものなら、どんな恐ろしい事態になるか。生活のすべてを抜け目のない妻にとことん牛耳られてしまっている彼等は、己が身を情けなく思わずにいられぬその焦りをそのまま敷衍して、マタ・マタに軽い妬みを覚えずにはおけなかった。その実情は気の毒という他はないのだと頭ではわかっていても、他人の境遇は好ましく見えるもの、羨ましくも憎らしく思われるものである。『いいなあ、あいつは気楽で』『俺んとこなんか、もう八人目だぜ、まったくしんどい。代わってもらいてぇくらいだよ』……同年代の男たちは、優越感なのか劣等感なのかわからぬような愚痴を蔭でこぼさずにいられなかったのであった。

親族であるパーチもまた、例外ではなかったのだ。本人に嫌味を言うのははじめてとしても、内心はやはりずっと、何か悔しいような損をしているような気持ちを持っていたのである。それが、この時、ぽろりとあふれてしまったのであった。

「……いや……だから……その」

(チエッ、悪かったよ。そんな難しい顔しなくたっていいじゃねえか)

黙りこくるマタ・マタに口の中で舌打ちをした時、パーチは思いついた。

「なぁマタ・マタ、わかってくれ、俺が言いたかったのはな、こういうことだ。俺は、ついこの間死にかけたろ。石切り場で、あんな事故にあって。ディアルトが助けてくれなければ、あのまんま死ぬとこだった。そんな時の気持ちは、おまえにはわからんだろうと思うのだ。誰かが来てくれないか……神さまが助けてくれないか。そんなふうに祈らずにいられない気持ち、俺はいやっつーほど味わった。そんな時、助けに来てくれた奴があったんだぜ。その嬉しさ！　俺はたいしたことはできないかもしれねぇ。でも、自分の家族を、自分が助けてやりたいって思うのは、当たり前だろ」

マタ・マタは何も言わなかった。風化した岩のような顔をむっつりと横に向けて、村の被害の具合を冷静に確かめているように見えた。いやただ、知らん顔をしていただけなのかもしれない。

パーチは嘔きを覚えたが、ここでこの男の相手をしていても何もならない。

「……だから……行くからな。……おまえも、無事でな……!!」

答えぬ親戚を後にして、パーチは一心に我が家を目指した。

途中で、崩れた壁の下敷きになってうめいているコチュイを見つけた。先を焦る気持ちを抱きながらも、彼はコチュイを放ってはおけなかった。不自由な片手でやっと壁材をかき分けていると、コチュイが意識を取り戻した。彼は、ひどく落ち着いた声で言った。

「……パーチ……ありがとう」

「ああ。がんばれ、もうじきだ。あと少しで、この梁が退く」
「いいから、行け。行ってくれ」
「……なに？」
「いいんだ」
コチュイは引き攣るように笑った。
「俺には、もう足がない。内臓も潰れてる……出してもらっても……」
言われてはじめて、パーチは友のあまりにも白すぎる顔に気づいた。血の気のない顔で、コチュイは笑った。
パーチは唇をわななかせると、急いで駆けだした。
「ちくしょう、ちくしょうっ……!!」
彼は無意識のうちに、ぶつぶつと口走った。
（ああ、ちくしょう。なんてこった。俺はなんて弱虫なんだ……逃げだしたりせずに、ちゃんとコチュイを楽にしてやれば良かったのに……！）
滂沱の涙に霞む眼を拭いながら、走るパーチは、不意に我が家のすぐそばに出た。彼は、崩壊した小屋の廃材ががたがたと揺れているのを見て心臓が止まりそうになった。と、中から、ひょいと小さな頭が見えた。きょろきょろあたりを見回し、なんとかなりそうだと見ると、伸びをする雪猫のような姿勢になって、狭い隙間を潜り抜けた。

「チャカ・チャカぁっ……！」
彼は信じられない思いで、娘の名を呼んだ。
（生きてる！　ああ……生きてる……！）
「おとちゃまぁ！」
元気よく手を振りながら駆けて来るチャカ・チャカに、パーチは吊るした腕をも大きく開いて、受け止めてやろうとした。チャカ・チャカは夢中のあまりに転んでしまい、パーチが悲鳴をあげた、その時。
倒れたままの幼い我が娘を、まるで正確に狙うかのような軌道を描いて、赤黒い悪魔がひゅるひゅると唸りながら飛んで来るのを、父は見た。
父は、疾走した。
父は、間に合った。
「……チャカ・チャカ……いい子だ」
抱きしめてくれるかと思ったのについ眼の前でぱったりと足を止めてしまった父に、チャカ・チャカは顔をあげた。父の頭のてっぺんに突然生じた煙をあげる長い角に、彼女は、手品でも見たようにぽかんと口を開け、眼を丸くした。
「……おと……ち……？」
父は、笑っていた。

父は、この上もなくやさしい笑顔を作って、そして、その顔を地面に打付けながら倒れ、そのまま動かなくなった。

「……おと……とうちゃたらぁっ……!!」

チャカ・チャカは怒って、パーチの肩を揺すぶった。地面に当たってよく見えないその顔を覗きこみ、父の手を取って引いた。それでも父は動かなかった。

何筋もの涙の跡を残し黒く汚れたチャカ・チャカの顔に、ゆっくりと理解の色が浮かび、広がった。チャカ・チャカは唐突に、まるで穢いものでも投げ捨てるかのように、父の手を放りだした。

彼女は落ち着いた様子で立ち上がった。空を見上げた。空はひどく暗かった。まるで、急に夜になってしまったかのように暗かった。

彼女は丹念にあたりを見回して見た。ひとの気配がなかった。頼りになりそうなおとなは、どこにも見えなかった。村は変だった。恐ろしく変だった。彼女はそっと歩きだし、たちまちたまらなくなって駆け足になった。その足は、一番よく知っている道を無意識のうちに選んでいた。意地悪で乱暴だが、困った時にはいつでもちゃんと助けてくれる、従兄ピパ・ピパの住む大きな家を、まっすぐに目指して……。

彼女は忘れていた。そこにもうヤベ・ヤベはおらず、ピパ・ピパはディアルトと共にヴェリダヌスを越えてしまっていたのだということを。危うく無益な苦労をするところを、賢者

と呼ばれる老人とばったり出くわしたのが、幼女の最終的な幸運であった。

「チャカ・チャカではないか、どこへ行く！」

「にいちゃんち」

「バカな！」

「行くのぉっ！」

両手を振り回して抵抗し、あくまで駆け降りて行こうとする幼女の手を掴んで止めた老人は、腰を痛めてうめき声をあげた。

チャカ・チャカは振り返った。

老人の後ろ、二つの家が互いに寄りかかるように崩れた下の暗がりには、第一次の揺れと礫弾雨を幸運にも持ち堪えたひとびとが、幽鬼のような顔で集まっていた。その一団の中に、親戚のマタ・マタの顔を見つけたので、チャカ・チャカは暴れるのを止めた。やっと安心できると思ったので、弾むような足取りでひとびとの間に駆けこんだ。

だが、マタ・マタは、いつものように彼女を高く抱き上げてはくれなかった。よしよしとごつい手で頭を撫でてはくれなかった。それどころか、チャカ・チャカの姿を見たとたん、彼は、まるで彼女が何か忌まわしい物でもあるかのように眉を曇らせ唇を嚙んで、素早く顔を背けたのだ。唖然とするチャカ・チャカの手を、誰かが横から、そっと温めるように握りしめた。見ると、ガーの友達であるゴビーが彼女の眼の高さまでしゃがみこみ、煙突掃除



でもしていたかのような真っ黒な顔を、弱々しく微笑ませている。
「おかあさんは？」
ゴビーは静かな声で尋ねた。
チャカ・チャカは、ゴビーの瞳をしっかりと見つめ、唇を結んだまま、首を横に振った。
「……そう」
ゴビーは潤んだ瞳を瞬かせ、チャカ・チャカの頭を撫でた。
「じゃあ、小母さんといっしょにいきましょうね」
おとなたちは口をきかなかった。村は燃えていた。
チャカ・チャカはうつむいて、うわ目使いに崩壊していく村を見つめながら、じっと立ちつづけた。しゃがみたかったが、ゴビーの手を離したくなかった。草臥れ果てていたが、聞き分けのない子だと思われたくなかった。彼女のまぶたはやがて重く垂れ下がり、かくんかくんと首が動いた。眠りこんでしまいそうになった時、老人が言った。
「……でかけよう」
「どこに？」
誰かが尋ねた。
「高いところが良かろう。山が落ち着けばラーミアたちが来てくれるかもしれぬ。そうすれば、みな脱出できるのだからな。飛び立ち易い安全な場所というと……そうだな。あれかな」

老人の視線の示したのは、ディアルトの小屋の方角であった。今はここにいない男の苫小屋のあるあたりの山は、よほど堅い地盤であるのか、少しばかり樹木が傾いているのみで、崩れてはいないように見える。深い雪の中に刻まれた道は、まだ生きているらしかった。

しかし、みなは、そこがどこであるかを知っていた。それは、今彼等が最もそばにいて欲しいと望む男と共に魔峰に入り、ひとり自分だけ戻って来た恥知らずの住み家なのだ。

「待ってください。どこかにまだ主人が」

「着替えくらい持ってこないと」

「何か、食べ物を」

「バカめ」

ぶつぶつと抵抗するひとびとを呆れたような顔で見回すと、老人は一喝した。

「死にたい奴は来なくてよろしい!!」

なんの気なしに親指を咥えてしゃぶっていたチヤカ・チヤカは、その胴間声に思わずびくりとして、指を離した。そして、そのとたんに、指を口に入れていると『クチビルノカタチガワルクナッテ、オヨメノモライテガナクナリマスヨ』と、それは口煩く言って尻を叩いた母のことを、その焼け爛れた手を、熱いスープに濡れた豊かな乳房を、そして凄絶な死に顔を、突然に思いだしてしまったのだった。幼女はブルッと震え、みるみる顔を引き攣らせて泣きだそうとした。だが、声はほとんど出なかった。涙も滲んでこなかった。もはや、

どちらも、残っていなかったのである。
ただ表情だけを歪ませて泣く幼女を見ると、老人はしまったと言わんばかりに肩をすくめて、ごにょごにょと言うこった。よいかな？」
「……いや、ま、好きにしろと言うこった。よいかな？」
「お爺」
「しかし、われわれは」
「とにかく、儂は、登る。ここに残っても、しかたがない」
老人は剣鷹のような眼つきでひとびとを見渡すと、ふん、と肩をそびやかし、丘を向いて歩きだした。ひとびとは顔を見合わせた。そして、結局老人に従って、渋々と動きだしたのだった。
「歩ける？」
静かに尋ねるゴビーに、チャカ・チャカははっきりとうなずいた。
「いい子ね。じゃあ、行きましょう」
ひとびとは先を譲り合いながら、のろのろと続いた。瓦礫と雪の坂道を、葬列のようにひとつに並んで。女も男も、みな無言だった。みな、この数刻の間に十も二十も年を取ってしまったかのような顔つきであった。
最後の最後に、ンドゥロの弟オバタスが残った。オバタスは首をうなだれ、唇を結んで、

心に何かを考えこんでいたが、突然ダッと駆け戻って行った。列の後ろの何人かがかすかに振り向いたが、この少年をあえて止めるものはなかった。

　風に飛ばされた雪の下が固く凍った山の道は、ひどく歩きにくく、たびたび誰かが足を滑らせてあとのものに迷惑をかけた。いつしか列の先頭は、老人ではなく、もう少し足腰のしっかりした男が順番で務めるようになっていた。オーブに対して丘そのものを盾に取ったようなこの小山にも、時折礫が飛んできて、真っ白い蒲団のような雪の中にすっぽりと刺さって埋まってはしゅうしゅう激しく蒸気をあげた。

　チャカ・チャカにとってこの行軍はそれほど苦ではなかった。なにしろ普段の遊びとあまり違っていなかったし、冒険好きの従兄に必死でくっついて回った多くの経験から、彼女は、自分に歩ける道とそうでない道をよく知っていた。雪の上で、転ばないように、そんなに疲れないように、そして元気なピパ・ピパに嫌がられて置いてきぼりにされない程度に素早く歩くコツも、ちゃんと知っていた。彼女はいつしか、ゴビーの手を離して、ゴビーよりもずっと速く登っていた。時々振り向いて見ると、ゴビーは実に苦しそうだった。彼女と、やさしいゴビー小母さんとの間には、やがてどんどん距離が開いた。おとなたちに遅れまいと夢中で先を急いでいるうちに、チャカ・チャカは自分はどうやらだいじょうぶだと思った。だから、チャカ・チャカはもう一度振り向いてみた。ゴビーは今はなおいっそう苦労して歩い

ていた。誰よりもたくさんの白い息を吐き、真っ青な顔にひどく汗をかいている。足がよく上がらないので、雪に刻まれた前のひとの足跡にさえ簡単に塡りこんで、よろめいてばかりいるのだ。

「ゴビーは、胸が弱いの」

いつか、そう遠くない昔、母の口から聞いたことばを、不意にチャカ・チャカは思いだした。

「だから、あのひとには悪戯をしちゃだめ。絶対に、転ばせたりしちゃだめよ！」

チャカ・チャカはその小さな手をギュッと握りしめた。盛大に雪を蹴散らしながら坂を下り戻る彼女に、よく知らない小父さんが泣き笑いのような顔をしてつぶやいた。

「……こどもはいいな。……無邪気で。まるで遊んでいるようじゃないか」

ゴビーのすぐ前まで戻ると、チャカ・チャカはぴょんと飛んで、従兄に教わったすごくよくきく急制動をかけた。あっけにとられるゴビーに、彼女は、ニッと得意そうに笑いながら、腕を伸ばした。

「……て……おてて、つなあで。いしょ。……ね？」

「……チャカ・チャカ」

ゴビーは幼女の手を握り返して、唇を震わせた。

「そこ、止まるなよ！」

下のほうの誰かがヒステリックな声をあげ、回りの何人かの無言の圧力を受けて、うっと黙りこんだ。

これらの様子を、老人は、見るともなく見ていた。また辛い登り坂に戻ろうとして、彼は、ふと動作を止め、耳を欹てた。

「……いかん……！　雪崩じゃ！　みんな、急げ!!」

オーブ山系の険しい山々を覆っていた雪と氷は、地中の熱に溶けだし緩くなったところを、地震によって揺すぶられ、勢いよく押しだされた。ちょうど、そり遊びをするこどもたちがまず何度か弾みをつけてから坂に飛びだしたのと、同じような具合であった。

山に生まれ育ったひとびとは、海を知らなかった。見たことがなかった。だがもし知っているものが見たとしたならば、この時彼等の背後に迫りきたものは、山のものではなく海のもの、たとえば巨大な津波であるかのように思えただろう。それはもうおよそ雪には見えなかった。どろどろと渦巻く黒雲のおかげで夜のようになった空の下、さかんに飛沫を上げる真っ白い波頭を立てた山の怒濤は青黒く凄まじく、後から後から押し寄せて、あっという間に山々を越え、二の谷の渓谷を埋めて走った。

この時、丘に登ったおかげで助かった村人は、全部で十二人だったと言われている。十一人めがチヤカ・チヤカ、十一人めがゴビー、そして十二人めが、マタ・マタだったと伝わっ

ている。マタ・マタは初めうんと先頭のほうを黙々と道を刻みながら登っていたのだが、幼女にまで庇われている病弱な女の姿を見て、もしも滑り落ちかけた時には支えてやろうとこころに決め、誰にも言わずにそっと脇に逸れてみなに道を譲り、危険なしんがりを守っていたのである。十四人めはオバタスのはずだった。そして十五人めは、オバタスが、そのか細い背にやっとのことで負うてきた、年老いた祖母であったはずだった。

十二人分の足跡に磨かれてますます滑り易くなっていた坂道を、それでも信じられぬほどの力と速さで、少年は駆け登って来た。もう少しでマタ・マタを追い越しそうな勢いであった。あと、一刻いや、ほんの一呼吸分ほどでも時があれば、彼は間に合っただろう。マタ・マタもそのつもりで立ち止まって待っていた。先にディアルトの小屋まで辿り着いていた先頭近くのものたちは、振り返ってそれを見、みな悲鳴をあげた。雪津波がその白い牙を剝きだして吠え狂いながら、すぐそこまで迫ってきているのが見えたのだ！　上のものたちから大声で指摘されると、マタ・マタは素早く傍らの枯れ木を掴み、もう一方の手を下いっぱいに差し伸べた。いったい何が起こるのかと大きく眼を開いたチャカ・チャカを、ゴビーが抱きしめ、その視線を隠した。どこにそんな力があったのか、少年は走りながら老婆を掲げた。マタ・マタの手をめがけて、婆はその痩せた腕をいっぱいに伸ばし、すがりつこうとした。誰かが、天に祈った。別の誰かが天を呪った。男と老婆の指先は、もうあと一寸あまりで繋がったはずだった。だがその時、その刹那、運命を分ける雪波の鼻先が耳を塞ぐ轟音と共に

一瞬のうちに走り抜けた。少年と祖母は、打ち寄せた白い怒濤の先端に突然横ざまに拐われて、そのまま見えなくなったのだった……。

雪崩が止まると、奇妙な静けさが訪れた。十二人のひとびとは互いに寄りそい支え合うようにして丘に立ち、無言のまま、先ほどまで彼等の村のあったところを見下ろした。夜のような空の下でも、そこにもう何ひとつ残っていないことは、はっきりと見てとれた。そこは平らだった。ただ一面の雪原だった。まるで太古の昔からずっとずっとそうであったかのように、きれいさっぱり何もない雪の原だった……。

2

この第一の惨禍に当たって、たまたまカリクティス家に居合わせるを定められたものたちは、実に幸運であったといえるだろう。煉瓦城はもともと頑丈な作りである。ミトラの神像を掲げた広間は、中でも最も堅固な礎の上に築かれてあった。おまけにこの城の場合、壊れ易い部分はついさきごろダトニオイデスの放ったものたちによって既に子細に破壊し尽くされていたのである。かの天然の災厄の前にまるで大地の長に連なるものたちが、予め大掃除をし危険物を取り除いておいてくれていたような具合となった。

初震が収まった時、あたりには何の変わりもないようだった。外壁の装飾がいくらか剝げ落ち、柱のいくつかにひびが入り、天井の漆喰がぱらぱらと落ちて、床の上の物が散らばったかもしれない。だが、どこまでが今の揺れにて生じたものであるかさだかに区別できるものではなかった。禍々しい黒雲が空いっぱいに広がって、変にあたりが暗くなっているのが妙といえば妙だが、たいしたことはなくて良かった、とそこにいたみなが思った。

「だいじょうぶかい？」

ふたつ名を持つ男が問うと、

「ええ。……ロト、あなたは？」

ルビスが問い返した。

爆音のした刹那から腕の中に抱いて庇った新妻は、凛々しくもきっぱりとうなずいてみせたのだ。その紅蓮の瞳になんの怯えも狼狽もうかがえぬを見て取ると、ディアルトは誇らしさと安堵のあまり思わず微笑んだ。だが、彼はこの場を取り仕切るべき自分を意識せずにいられなかった。ゆえに、すぐに彼女を離して飛び起きる。

「みんなは？」

谷から来たものたちは互いに互いの無事を確認し、報告した。誰ひとり怪我はない。だが、その眉はみな一様に暗かった。

「……村が……」

チズルムが喉に絡むような声でつぶやき、他のものも窓から故郷の方角をうかがい、落ち着かなげに唇を結んでいる。すぐにも戻って、家のものの無事を確かめたい顔つきのものが多かった。

「うん。……たいしたことがなければいいけど……」

ディアルトも悲痛な面持ちで拳を握りしめた。

が、山は遠かった。今慌てて山に急げば、我等も危ない、とディアルトは思った。救援のための物資やひと手を周到に集めてから駆けつけるほうが理に適っている。そのためには、五大家有力者の協力を欠くことはできぬ、と、彼は、この期に及んでもなお冷静な考えを巡らせた。

よって、その注意は、炎の当主に向かったのである。

「……グアモンどの、お怪我は？」

「怪我はあるが」

片脚を投げだした形で床に座ったままに、炎の当主は小さく肩をすくめた。

「今できたというわけではない」

「私も、アミアさまもだいじょうぶです」

部屋の向こう側でしゃがみこんでいたマルランドは、聞かれる前に明るく声をあげて保証した。

「驚いたことに、うちのばかな姪っ子どもまでもこちらに戻って来てたみたいなんですよ。ええ、みんな無事ですとも。それに、ほら、お客さままで」

「シフィルじゃないの」

ルビスは素っ頓狂な声をあげ、婚礼衣裳の裳裾をからげて駆け寄った。

「まあ、アンジェリカスさんも。どうしたの？　何故ここに？」

「華燭の宴の噂を聞いて、はせ参じたのだが」

さりげなく着衣の埃を払いながら、シフィルはゆらりと立ち上がった。

「今の騒ぎで用意した祝辞をすっかり忘れてしまった。辱ないことだ。まずはおめでとう、ルビス。きれいだよ」

「ありがと」

手の甲に、幼馴染みの美青年の、このような時に似合わぬほど礼儀正しい接吻を受けて、ルビスは力なくつぶやいた。

「あんたの気障も筋金入りだこと」

「どうした従兄どの？　貴公も花嫁に……いや、新妻どのに、お祝いを言わんか」

「恥ずかしながら腰が抜けました」

床に両手をついて立ち上がれぬまま、アンジェリカスは憮然と言う。

「ああ、恐ろしかった。なんなんですか、今のは？　わたしは、ミトラ神がおふたりの婚礼

に反対の声をあげたのかと思いましたよ。……ああ……だめだ、まだクラクラする」
「一生寝てればいいわ」
ルビスはふくれたが、顧みるとディアルトは深刻な顔つきで何やら茫然と一点を見つめている。ルビスは胸を押さえた。
「……やだ。あんなこと本気にしないで」
無意識のうちに甘えた声になって、その夫に駆け寄る。
「他人が何て言ったって、ミトラ神ご自身が何て言ったって、わたしは」
「ごめん、黙って」
ディアルトは彼女の台詞を中途で遮った。
「ラーミアがおかしい」
「え？」
部屋じゅうのものがディアルトの進みでた窓のほうに注目した。ますます厚くなる雲のせいで、空はいまやほとんど夜のように暗いが、確かに何やら騒がしい鳥の羽ばたきが聞こえるようだ。
「ラーミアぁ！　無事かぁ？」
ピパ・ピパがたまらず飛びだして窓に駆け寄り、驚愕した顔で振り返った。
「だ、誰かが乗ってる！　ぼくのラーミアに！」

「なに？」
一同の緩く集う崩れかけた城の高い窓辺に、巨鳥の群れは既に整然と統制を取り戻した形になって、悠々と近づいて来た。そしてなるほどその先頭の、羽のはためく翼の間には、この暗い中でもキラキラと白銀に輝く徽を額に持った小さな姿が立ち上がっているではないか。
「サラマクセンシスだ」
水の長なる若者が指摘した。
「……あれは、太陽の神官だ。彼は、翼豹のこどもの姿をしているのだ」
「みなさん、ご無事で。なによりです！」
豹の耳と尾と、小さな翼を持つ少年であるミトラの右拇指は、音として耳に届くというよりはそこにいたものたちのこころに直接響き渡るような声を、朗々と張りあげた。
「でも、酷いようですが、まだ安心はしないでください。噴火はこれで終わりではありません。もっと大きなのが、来るはずです」
「……ああ」
マルランドはうめいた。振り返ると、こころ惑いし当主の妻は、畳んだ膝の間にぺたりと尻を落とし床の瓦礫のいくつかを弾き珠に見做して童女のように遊んでいる。忠実なる老女は、苦しげに微笑んだ。
「だから」


MUTSUMI

と、太陽の神官は言った。
「誰か、ぼくといっしょに来てくれないでしょうか？」
「行くって、どこへさ？」
翼豹の少年に、同じ年ごろゆえの親近感を覚えて、ピパ・ピパが叫び返した。
「まさか、魔峰オーブじゃないだろうね？」
「その、まさかだよ、ピパ・ピパ！」
「……うへっ、なんで？　あいつ、俺のこと知ってら」
「さっきの噴火で吹きだし損なった岩や溶岩が」
神官は続けた。
「オーブの噴火口に、仮の栓をしてしまった。けれど、まだオーブの活動は止んでいません。このまま熱せられると、どんどん内圧が高まります。次の噴火が遅れれば遅れるほど、いざ爆発になった時の規模は限界までどんどん大きくなって、つまり、すごく危険なんです」
「あんまりぴっちりした蓋をすると、お鍋が煮零れるわよね」
ニアサエが囁くと、
「ニキビのかさぶた、いつまでも剝がさないと、膿むもんね」
ツクナレが答えた。
「……汚いわね、あんたの譬えは」

「ほっといてよ」
「怖がらせたくはありませんが」
神官は続けた。
「そうなれば、危機はイデーン全土に及ぶ可能性があります。イデーン内部には、どこにも逃げ場はないと言っても過言ではない。だから、噴火口ではないところに、地熱の逃げ道をつけたいのです。危険です。成功するかどうかもわかりません。しかし、やってみるだけの価値はあります。どなたか、志願してはくださいませんか」
「あのガキ、猫みたいな耳がありやがる癖に」
ンドゥロがぶつぶつ言った。
「御山の腹に穴を開けるって？　言うことが凄ぇや」
「どうやるんだ、そったら罰当たりなこと？」
「さぁ、妖術だろ、精霊の」
「んなことしたら御山が怒るんでないか」
「もうとっくにカンカンだ、関係ねぇやさ」
谷のものたちは口々に言い合った。
「あいつ、山向こうのもんだろ。なんでラーミアに乗れてるんだ？」
「なにしろ神さんのお使いだからなぁ」

「違うよ、乗ってるんじゃない。跨ってるけど、あの子はあの子で飛んでるんだ」
「うへっ。そりゃ偉そうなことというわけだ」
「もちろん」
神官はつづけた。
「うまくいかない場合のことも考えてください。座して死を待つことはありません。だから、できる限り多くのかたがたには、地上に逃げてもらう算段をしてあります」
「地上だあ?」
「地上っつーたか!?」
みなはどよめいた。
「地上って、あの人間のいるとかいうとこだか?」
「パンガシアノドン・ギガスの氷の向こうにあるんでしょう?」
「いや、コウデマ山を越えて、一生分も歩いたあたりだと言いますよ」
「そうです」
と、神官は言った。
「どちらも本当で、どちらも嘘です。地上は我等のイデーンを包む結界の彼方にあります。結界の中心は魔峰オーブですから、オーブから遠く離れれば離れるほど地上に近くなる道理。しかし、実際は、結界には時折歪みが生じます。時と場と聖なる力の三つがうまく組み合わ

せられれば、突破することができるのです。イデーン崩壊の衝撃にはさすがの結界にも破れ目ができるでしょう。そこを目指すのです」
「でも、どうやって」
「ラーミアよ、ラーミアならどこまででも飛べるわ」
「けど数が。どう考えたって足んないだろ」
「静まれ!!」
グアモンの罵声に、みなぴたりと黙りこんだ。
「神官どの。御提案はわかった。が、わたしにはどうも解せぬ。そなたらが山を穿つことによってイデーンが救われるのであれば、なぜに地上など目指す必要があるのだ。また、どうせに無駄であるのならば、なぜ危険な山になど戻ろうとする。その結界の破れ目とやらを探す水先案内にこそ、そなたは立つべきではないか？　いったい、どんな神託が出たというのだ」
「……いえ」
ミトラの右拇指は苦しげに首を振った。
「神託は、実ははっきりしないのです。ここのところはどうしても、何度占っても結果が定まらないのです。ラルバタスの巫女がやっても同じでした。不確定要素がありすぎるのです」
〔竜は言った〕

不意にディアルトは思いだした。

(俺の考えは甘いと。だが、やはり、みんなが協力して……血の隔たりをも越えて尊い力を合わせれば、それが一番強いのではないだろうか。我等がどう出るかによって、運命すらも変えることができるのではないだろうか)

「……しかし、地上に逃げると言われても」

シフィルが口を開いた。

「どのような手段があろう? ずいぶん大勢のひとびとがいるのに、その結界の破れ目とやらまで、みなを連れていくことなどできようか?」

「ええ……すっかり全員というわけにはいきません」

翼豹の少年は小さくため息をついた。

「月の巫女が、今ごろ、森の長老どのと金の女主人どのの手を借りて、急ぎ、船を建造しているはずですから」

「船!?」

「船だって?」

「イデーンじゅうで一番ひとが多いのはランデール、ランデールは海辺の町です。だから、海から結界の境界線を目指します」

「でも、アンギス湾はすごく狭いわ」

ルビスが言った。
「島がいっぱいあって、大きな船は出入りなんかできないわ。運河を動くような小さな舟ならばともかく、大勢のひとを乗せるような船なんて無理だわ」
「そこがぼくらの博奕の抜け目ないところなんです」
神官はあどけなく笑った。
「ぼくたちが失敗すれば、変動のために、パンガシアノドン・ギガスの氷原が溶け、押し寄せて来るでしょう。山々の雪も落ちてくる。レピディオ湖も氾濫するかもしれません。ぼくたちは、イデーンは浸水すると予想しました」
「浸水だって？」
「ええ。高い山々以外は、たぶんみんな海と山の水に沈んでしまうでしょう。そんな時、一番有効なのは船です。船に乗って、大海を渡り下れば、やがては安全に結界を越え、地上にたどりつけるはずなのです」
「……よし。我等の一族も尽力しよう」
シフィルが言うと、神官はありがたいとばかりにうなずいた。
「流氷や洪水を待ったのでは危険すぎる。凍てる大海滅びる前に、その船、我等水の一族がしかと浮かべてみしょうとも！　……よいな、頼むぞ、アンジェリカス」
「若君!?」

アンジェリカスは悲鳴をあげた。
「……ま、まさか……だってあなたさまは」
「しかと頼んだぞ」
どんな少女よりも妖しく長いまつげの陰から蒼碧なる瞳を悪戯っぽくきらめかせて従兄を見遣りながら、シフィルの声には、けして逆らうことを許さぬ鋭い響きがあった。
「わたしは魔峰に用がある」
「俺も」
言いかけて、ディアルトは、その腕に知らぬ間にかかっていた白い手にグイと乱暴なほどの力を籠められ、慌てて傍らの少女の燃える瞳を覗きこんだ。
「行って来る。構わないね？」
（……ああ……構わないわけないじゃないの。嫌よ……！）
ルビスはせつなく夫を見つめ返した。
（嫌だけど……嫌だと言ってもあなたは行く。きっと行ってしまうわ。そういうひとよ）
（言えない。行っちゃ嫌だなんて、我が儘は言えない）
『女はけして男に恥をかかせてはいけないもの』
遠い昔の母の教えが甦る。
そう聞かされた時、ルビスはまだ幼く、反抗心ばかりが旺盛だった。

男のほうが立派だというのなら、何も庇ってやらなくったっていいじゃないの。こっちが気を使ってやったり、へつらってやったりしなくったっていいじゃないの。そんなふうにしてやらなきゃならないような男なんか、男っていう価値がないわ。勝手に恥でもかけばいい……！

そんなふうに考えて、頭にきたものだった。

しかし、今、ルビスは母のことばの意味を、もっと深いところで捉えた。そして、それは、彼女の望みと合致した。

(何があっても、彼に恥をかかせるものか。夫の名誉はあたしの生命だ。もしも誰かが彼を侮辱したら、あたしは生命がけでも彼の名誉を守ろう。あたしの力を全部使っても、それだけは許さない……！)

(ああ、だから、今もとても、止めたりできない)

(だったら……せめて、わたしも、いっしょに……！)

ルビスの唇が動きだす前に、ピパ・ピパが叫んだ。

「ぼくが行く！　谷が心配だ」

「おいらも戻る」

「俺も」

ンドゥロが、チズルムが、進みでた。

「待ってくれ。来ちゃだめだ！」
ディアルトは言った。
「気持ちはわかる。けど……はっきり言って、きみたちの手には余る仕事だし……」
「御山に近づくのはおっかねぇこった」
ンドゥロが言った。
「御山には手だししちゃなんねぇって、俺たちはずーっといわれてたし、そう思ってる。が、な、ディアルトよ。山向こうのひとたちがわざわざ来て何かするっちゅーの、ほうっとけるかい！　他所者に俺たちの御山に触られるくれぇなら、俺たちがやる。俺たちの手でぶっ壊してやる。ありゃ、俺たちの山だもの」
「魔法は使えねぇが、石切りのやり方ならよく知ってるぞ」
と、ミミイカも言った。
「御山を崩そうってんだろ。そりゃ、つまり、大仕掛けの石切りとちゃうんかい」
「雪の中での石切りは難しいぞ」
「俺たちは慣れてる。な」
二の谷の男たちは、みなうなずき、思いをこめた瞳でディアルトを見つめた。
「……確かに、そうだな」
ディアルトはため息をついた。

「だとしても、せっかくここまで来てるラーミアを全部また山に連れて戻ってしまうのはまずい。……よし。わかった。二手に分かれよう。万一、船の建造が間に合わなかった時には、せめて五大家の主だったひとびとをラーミアに乗せて、地上へ連れて行って欲しい」
「そう家に拘ることはない」
グアモンが皮肉っぽくつぶやいた。
「が、まあ、最終的に生き残ったものたちが逃げる道を確保しておくのは、良策といえよう」
「……ディ……ロト。あなた」
ルビスは袖を引いて夫の注意を引くと、決心をこめて、きっぱりと言った。
「わたしは、みんなを連れてランデールに行くわ。森の長どのを手伝う。月の巫女に従う。ラーミアを守って、あなたたちを待ってる。だから……だから、必ず成功して。無事で……生きて……帰って来て」
「……うん」
ディアルトは熱っぽく潤んだような眼をして、ルビスの手を握りしめた。
「そうしてくれると助かるよ。きみなら、だいじょうぶ、やれる」
「帰って来るわね？　地上にでもどこにでも……あたしたち、いっしょに行けるわね？」
「……行ける。行こう。きっと、迎えに行く」
「約束よ」

「ああ。約束だ。きみも……きみも、元気で」

抱き合う恋人たちの傍らで、二の谷のひとびとは小声に相談して残るものと行くものを決め、次々にラーミアに乗りこんだ。残るものたちの代表になったのはンドゥロで、彼は仲間の操る鳥の背に、それぞれマルランドとその姪たち、それにアンジェリカスを分乗させることになった。ここまでに多少の齟齬があった。グァモンが妻と共に城に留まるを選んだことである。

それは間違いもなく死を意味する。シフィルが、太陽の神官が、遠回しに止めだてしたが、炎の当主の考えは変わらなかった。マルランドは、それならば自分も残って奥さまのお世話をするのだとやっきになって主張したが、当主は笑顔で拒絶した。

「たまには、夫婦水いらずにしておくれ」

と。

魔峰に最後の戦いを挑むことにしたのは結局、谷のものでは、チズルムとミミイカ、テュー、それにピパ・ピパの四名であった。

声もなくしがみつくルビスの、冷たい頬に、震えるまぶたに、そしてあえぐ唇に、ディアルトはやさしく、だが短く接吻をした。

「もう、行かなきゃ」

「……ええ……あ、これ」


Mutsumi.

ルビスはふとからだを離すと、その薔薇(ばら)色の髪(かみ)に絡(から)んだ七つのオーブを取って、夫の手に委(ゆだ)ねようとした。

「大事なもの！　忘れないで」

「いや、それはきみが持っていてくれ。俺たちは」

ディアルトは、すぐ傍らに来て元気よくうなずくピパ・ピパの肩に、頼もしそうに手をかけた。

「それがなくてもラーミアを使えるんだから」

「……じゃあ……じゃあ、せめてひとつだけでも持っていって」

（ラムプロローグスの慈悲(じひ)が、必ずもう一度会わせてくれるように……願(がん)をかけるから）

ルビスは慌ただしく革紐(かわひも)を解き、首飾(くびかざ)りをばらばらにした。最初に紐から外すことができたのは、ブラック・オーブだった。

「じゃあ、こいつを」

ディアルトはそれを取った。

「あ、待って……それは」

（それは、不吉(ふきつ)な斬血石(ざんけつせき)。切ったものが血に飢(う)えた化け物となるといわれる、恐ろしい石。
それだけは……それだけはだめよ……！）

急ぎ次の珠(たま)を爪繰(つまぐ)りだそうとするルビスの手を、ディアルトは止めた。

「黒だ。星を輝かせる空のような深い黒、ちょうど大地の一族の色だ。これでいい」
「でも」
「そら。きみの手で入れてくれ。俺の心臓の上に」
胸の隠しをディアルトは開けた。別れのせつなさを払拭するこどもっぽい陽気な仕草だった。ぐずぐずすれば嫌がられるに違いない。
（ラムプロローグス……！）
ルビスは手の中に返されたブラック・オーブに、その身の熱を、思いを、生命のすべてを注ぎこむような念をこめた。
（わたしの愛するひとを、どうか守ってください……！）
小さく接吻して、落としこむと、ディアルトがすぐに釦をかけた。
「きみをここに仕舞って連れていけたらいいのに」
つぶやきながら、やさしく頬に触れる夫の手に、ルビスの瞳はみるみる潤んだ。が、彼はそのまま踵を返した。
「さ……行くぞ……!!」
暗い空の下、どんどん遠くなっていく一群のラーミアを、ルビスは、ンドゥロの背に捕まって飛びながら、ただ一度だけ振り返った。

鳥影は小さく、夫を見定めることはできなかった。

(……わたしの代わりならば、赤い珠を持っていって欲しかった)

(いいえ。黒でいいのよ。黒は彼の色。彼をわたしの色に染めるより、わたしが彼の色に染まるのだ)

もはや華麗な花嫁衣裳を脱ぎ捨て、素朴な谷の黒衣に着替えたその胸許に、今は六つになったオーブが鈍く輝いていた。

3

不気味に暗い空のために地形がひどく読みにくかった。ランデールに向かうものたちの選んだ道筋は、かつてルビスが月の巫女の神殿を目指して進んだ行程と、そのはじめの部分に於いてはほぼ等しかった。だが、荒野を横切り、ネリル河に沿って下って行くに従って、彼等にも遅まきながら震災の規模の恐ろしさが飲みこめてきた。堅く乾いてろくな草も生えていなかった広野のそこここには、おとなでも飛び越えることはできないだろうと思われる割れ目が大地の底深くまでぱっくりと口を開けている。清流長きネリルは石ころだらけの河床を晒して、今にもすっかり渇れ果てなんとしている。思いもかけぬ変容ぶりであった。

この様子では、ランデールはひどく混乱しているかもしれない。

ルビスの胸には耐えがたい動悸が轟いた……。

遡ること半刻。

ランデールは揺れた。オーブの爆発の衝撃波は大地を駆け抜け、地盤の緩やかなこの町に来てその勢力を放出した。古い建物は傾ぎ、木々は折れ、街路は捲れ上がり、運河は波立って小舟を転覆させた。動揺して外に飛びだしたひとびとは、遠い山の方角から広がってきた黒雲に、頭の上をすっぽりと覆われ塞がれたかのようないやな感触を持った。

しかし、しかし。ルビスの予測に反し、ランデールはなかなかに落ち着いていたのである。この街に住まうは、みな精霊たちだ。これほどの巨大なものでなければ、変異怪異は日常茶飯、異なる種族のものたちのなす技などこれすべて魔訶不思議といっていい暮らしを長年続けていた。高き血の五大家当主等の力量についても、ほとんどのものは疑いを持ったことはなかった。この時に当たっても、多少の変事も長がきっと収めてくれるだろう、と、楽観していられるものが多かった。そして運河の町は多少なりとも海の荒れた時に備えた作りになっている。パンガシアノドン・ギガスの脅威は彼等に、急激なる異変の時こそ沈着冷静なふるまいが必要であることを叩きこんでいた。怪我人は出たが、あからさまな破壊や脅威がこの時はまだ体験されていなかった。

そして揺れは収まった。ひとびとは隣り合う同士で今の恐怖を語り合い、その身の安全を

共に喜んだ。急ぎの用のないものたちは家々に籠り、自宅内部で倒れたり落ちたりした家具や什器類の片づけに精をだした。ひと通りが減り、ひとびとの笑い声が普段よりやや控え目になったという以外には、町はたいして変わりはなかったのである。

この時は、まだ……。

「大地のもの、大地のものはおらんかぁ！」

声高い呼ばわりに、あちこちの窓から怪訝そうな顔が覗いた。赤いものが水涸れの運河の底を駆け抜けていく。火蜥蜴の主エンドリケリィが、興奮した顔つきで、疾走してゆくのだった。略奪したばかりの黒い妖馬をうまく扱い兼ねて、今にも振り落とされそうになりながら、彼は叫ぶ。

「みなの衆、大地に連なるものどもを見かけたならば、必ず知らせてくれ。広場に連れて来てくれ！」

ひとびとは顔を見合わせた。大地の一族であるものは、何がなんだかわからぬうちにあわてて隠れ、隣家がそのようなひとびとであると知っているものたちも眉を顰めながら口をつぐんだ。火の若者のいいようは、何やら尋常とは思われなかったからである。

「ちっ。強情なもんだぜ」

エンドリケリィが馬にあぶみをくれようとしたその一瞬、ようやく声がかかった。

「いったいどうした、炎の若者よ」
見れば、古楡の主である白髪の男が、高い窓からそっと顔を覗かせている。
「きみは、なぜ、大地のものたちを集めているのだ？」
「生贄ですのさ、ご老人」
不穏なことばに、聞き耳をたてていたひとびとの間に騒めきが広がった。エンドリケリィは嗜虐の悦びのために熱に浮かされたような顔をにやにやと輝かせて、続けた。
「きゃつらのこたびの悪事の責任を取ってもらわんと欲しますのさ！　みなみなさまはいまだ御存知あられぬか。コリドラス家の呪われし従兄弟、ダトニオイデスとディアルトは、身のほどを弁えぬ謀略によって魔峰オーブを怒らせやがった。さきほどの地震、この暗い空、水を亡くせし運河は、みんなみんなそのため！　なのに長であるきゃつらは、こそこそとどこぞに隠れて出て来もしねぇ。よって、我等炎の一族、かの悪辣漢に連なる地蟲どもを狩り集め、天に代わりて処刑を行わんと欲する」
　ひとびとはみな、真っ青になった。
「ダトニオイデスが……？」
「彼は野心家だから」
「しっ、滅多なことを言うもんじゃあないよ」
「でも、カリクティスは何の権利があって」

「この機に乗じて、私怨を晴らさんと?」
「まさか」
「これこれ、みなの衆」
エンドリケリィは抗って泡を吹く馬の腹を無惨に蹴りつけてますます暴れさせ、ぴょんぴょん跳ねながら、高笑いをした。
「内緒話はご無用に願いまする。我等悪戯に騒乱を招くつもりは微塵もあらず。ただ、我等がイデーンにこのような変異を起こせし極悪人どもにその罪を問うておるだけ」
「違う!」
エンドリケリィの前に、不意に敢然と飛びだしたものがある。
「なんだおまえは? 大地のものじゃないな。確かどっかで見たっけな」
「我が名はパピリオクロミス」
金髪の男は、油断なく自分よりも十は若そうな馬上の若者を睨みながら、左右の腰に帯びた長剣二本を同時に抜き放った。
「アヌビアス家に連なる金の一族、鋼の精霊だ」
「その鋼の主が何用だ」
「ふん。貴様ひとりを責めるではないが、己が一族の不埒を棚に上げての残虐非道、言いたい放題の嘘八百、とてものことに捨て置けぬ。カリクティスこそ悪ではないか。思い上がる

もたいがいにせい。罪なき大地の一族をすぐに解放せよ！」

「なにっ!?」

「我が朋友なる剣鷹の精より聞き知った。貴様等の頭クリプトカリオンは怪しげなる言いがかりをもってコリドラス家を襲撃し、あっけなく返り討ちにあった、とな。貴様等の為さんとするは単なる復讐。それも逆恨みだ。悪あがきは即中止せよ!!」

「ああ……そうか、思いだした。あんた、祭りの夜に、女どもにキャアキャア言われてたオッサンだな。よっぽど腕自慢らしいな」

エンドリケリィは苦笑した。その狂気じみていた顔がすっと静まり、普段のいかにも人のよさそうな陽気な色がうっかり滲む。

「なんでまた、地蟲めなんかに味方をするのだ。逆恨みだろうがなんだろうが、あんたには関係ないだろう」

「言ったな。かくも無法な暴力沙汰、放っておいては名のすたれ。ただでさえこのように人心不安なおり、みなが助け合うべき時ではないか。馬を引け、炎の。そして邪悪なるクリプトカリオンに告げるがいい。手前勝手な理屈で殺生をすれば、必ずや貴様等の上にこそミトラの神罰が下らんと」

「大袈裟な。止したがいいぞ。さっさとその物騒なものをひっこめな。慣れぬものを振り回して、怪我をしても知らねぇよ。年寄りの冷や水だぜぇ」

「……何を！」
パピリオクロミスは血相を変えた。
「小癪なこの青二才が。いかでも通るというならば、えい、この俺を切ってゆけい！」
「殺生はいかんと今自分で言ってたじゃんかよ。金の種族のオッサンとまで喧嘩なんかする気はねぇんだっちゅーに……やれやれ、いいやさ、あっちを回ろう」
「ええい、逃げるか。臆したかこわっぱ！」
妖馬の首を回しかけたエンドリケリィに、パピリオクロミスは怒気荒く言い放った。エンドリケリィは、ゆっくりと、彼を振り向いた……。

収穫祭の夜にはあの聖なる年ゆずりの炎が掲げられた場所に、今新たに、より巨大な火やぐらが完成しつつあった。その傍らには黒い衣服の男女が数十名、きつく繋がれてひしめきあっている。火蜥蜴や火炎孔雀・竜等が囚われたものたちの周囲をぐるりと囲み、少しでも逃げだしそうな気配を見せるものには、容赦なく熱い息やら尾の一撃やらを喰らわしているのだ。既に見つけだされ捕らえられた大地のものたちであった。だが、もちろん、その中に彼等の真実目当てとするものの姿はない。
「ディアルトとかいう奴は、まだ見つからんのか？」
地震によって倒れた木の枝がかっこうの薪であった。そんな一本を手にし、ぽきぽきと短

く折り切っては、組みかけのやぐらの内に放りこみながら、ビタエニアータが問いかけた。
「ああ。どーも、ランデールにはいないみたいだな」
ラプラディは、答えながら、何気なく捕虜たちを眺めやった。孔雀に土つぶてをぶつけたのを見咎められた黒服の娘が、見張り役の赤い若者たちによってこっぴどくいたぶられている。傍らを通りがかったアリナが残酷なまでに陽気な笑い声をあげ、尾をうち振って喜んでいる。
ラプラディはかすかに顔をしかめて、やぐらに向き直った。
「……ほんとに……やる、のかな？」
彼は気弱そうにつぶやいた。
「もし最後まで、そのなんとかってぇ仇敵が出てこなかったら……俺たち、ほんとに、あいつらを殺るのかな。ああやって、ちょっと痛いめに合わせるとか、からかうくらいなら、別にいいけどさ。ほんとに、ここに、……このやぐらに、あいつらを入れて……ぼっ、と……」
「俺たちが決めることじゃない」
ビタエニアータは手の中の最後の枝を投げこみながら短く決めつけて、歩きだそうとし、ふとラプラディを振り返ってニッと笑った。
「心配するな。大将に任せておけばいいんだ」

……その大将こと稲妻の主クリプトカリオンは、壊れ残ったドームの舞台の端のほうに、ひとり腕を組み腰を降ろして、無言のままじっとやぐらを見つめていた。片側から見れば、その冷徹なまでに研ぎ澄まされた精悍な横顔に変わりはなかったが、反対側は、もはや以前の彼ではない。五芒星の徽のある側の片目は、醜く引き攣れて閉じられている。

ダトニオイデスによって負わされた傷は、虹のおばばの妙薬によっても完全に癒えはしなかった。もっとも、大地の剣に貫かれてもなおその寿命がつきなかったことのほうが、僥倖というべきではあるのだった。いやクリプトカリオンの闘争心と生命力は、真の敵をまだ討っておらぬその無念が、彼の魔剣の凄まじい力をも、最後の一線から跳ね返してしまったのかもしれぬ。

暗い空の下、彼の背はいつまでも動かなかった。

炎の当主の娘、カラ・セミアクィルスは、そっと足許の小石を蹴った。

いつも男気と任侠を見せてくれるクリプトカリオンは、彼女にとっては、偽悪ぶっても英雄であった。なんとか親しく話しかけ、その苦難の一片なりとも共に担えることを示したかった。が、稲妻の主は、それを許す雰囲気ではなかった。五芒星の男の物言わぬ背中は、どんな同情も憐憫も、共感さえも、かたくなに拒んでいるように見えた。そのような男であるからこそ、彼女の憧れとなったのだが……。

カラはもう一度、石を蹴った。それは、思わぬ勢いで飛んで行って、カァンと高い音を立

てた。彼女はハッとすくんだ。そこに、声がかかった。
「カラ。家に帰れ」
クリプトカリオンはこちらを向かぬまま、そう言った。
「ランデール別邸でもいい。カリクティスに、帰れ」
「やだ！」
カラは叫んだ。
「やだ！　あたい、あんたたちといっしょにいるんだ！」
「迷惑だ」
五芒星の男の声は、低くしゃがれて、表情を持たなかった。
「それに、おまえの父は大怪我をしたと聞いている。行って、たまには甲斐甲斐しく看病でもして来るがいい。親孝行ができるのも、今僅かなうちかもしれんぞ」
「嫌だ」
カラは幼いこどものように激しく頭をうち振った。
「お願いだよクリプト、あたいも仲間にいれとくれよ！」
「囀るんじゃねえ、小雀が」
クリプトカリオンは皮肉に笑いながら、ゆっくりと肩ごしに振り向いた。潰れたほうの瞳が見えて、カラは思わずその場に凍りついた。

「仲間なんてものはいない。はぐれ蜥蜴が腐肉に群がっておるだけのこと。……いや、こころやさしいおまえにも抵抗なくわかるように言ってやろうか？　グアモンどのが傷ついたのは全くこの俺のせいだ。過信であろうとも、そんなに俺を慕うてくれるのならば、俺のために、俺の代わりに、きちんとそなたの御父上に、お詫びを果たしてくれ。そうしてくれれば、感謝する。この上なくありがたいというておるのだ」

（なんだかんだ言って、厄介払いだ。あたいが邪魔なんだ……！）

（親が偉ぶってるからって、あたいまで、つまんない女だと思ってるんだ）

　カラの眼に苦い涙が滲んだ。あくどい化粧が溶けて流れた。カラが小さく啜り声をあげると、クリプトカリオンはまた、静かに前に向き直った。

「本気だぜ。頼む、カラ・セミアクィルス」

「ク……クリプト……！」

　カラは駆け寄った。稲妻の主の背に、しっかりとしがみついて、もう一度懇願するつもりであった。

　が、叶わなかった。できなかった。彼女の足は、男に手の届く直前でぴたりと止まってしまった。そこには透明な障壁があった。敬愛する男の背は、越えられぬ山脈のように、聳えていたのだ。

　啜り泣きながら走り去るカラと擦れ違いざま、アリナは、あ、と口を開けた。だが、彼女

は、結局何も言わぬままに、年若い娘を行かせてやった。彼女にはわかっていた。娘の気持ちも。男の気持ちも。だからアリナは、ただその拳を固く握りこんで、唇をつぐんだのだった。

狐火の妖精は押し黙ったまま、ドームに登った。不実な恋人のすぐ傍らに腰を降ろすと、彼女は、男のこわばった肩に強く頬を押しつけて、憂うる眼をそっと伏せる……。

イデーン始まって以来の大工事は、着々と進んでいた。

巨大な船の骨格は、ランデールの町はずれ、オトシンクルス家から連なる広大な森とアンギス湾の片翼に挟まれた遠浅の砂地に、ようようその全貌を明らかにしつつあった。立ち働いているものたちの多くは黄や緑の服装をしている。ペルラの命によって駆り集められた金の種族の精霊たちと、長老のおずおずとした懇願を拒みきれずに集まってきた木の一族の精霊たちがそのほとんどであるためだ。金属細工を得意とするものたちはその貴重な蓄えを裂いて鋼板や釘・さまざまな艤装金具等を作りだし、萌え出づる草木の生命を慈しむものたちは、その分身ともいえる森を自ら切り拓いて製材となした。どちらの種族にとっても、この大仕事は、血を絞り肉を抉り骨を断つごときせつなく苦しいものであり、同時にまた、あまり普段馴染みのない形の労働でもあった。

魔峰オーブが吠え、激震のあった時、これらのひとびとは、月の巫女をはじめとする監督

官の素早い指示によって整然と避難しおおせた。作業用に組んであった足場のいくらかが崩れ、巨大な船の骨は斜めに傾いだ。慌てたために怪我をしたものも少しはあった。が、被害というほどの何ものもなく揺れが収まった時、みなが最もがっかりしたのは、これでも仕事から放免にならなかったことであった。地震は、今ので終わりではないらしい。ランデールの、あるいは遠い実家の安否を気遣う声が、苦しげに囁き交わされた。だが、大声で不平不満を唱えるものはなかった。

アヌビアス家も、オトシンクルス家も、少なくとも表面上は、非常に尊敬され尊重されていた。長のことばは絶対だった。かたやはその財力と女主人の傲慢なほどに歴とした立ち居ふるまいのためであり、かたやは、現在のイデーンで誰よりも多くの年輪を重ねた長に対する消えぬ畏敬の念のためと、その意味はあまりにも違ってはいたが……。

かぁん、かぁん。再開された鎚を打つ音は、風に乗って、森の内なる伐採現場にまで響き渡った。

「……続けるらしいな」

長の外孫にして、その運命の中途から急に次の長になることが決定してしまったヘテランテラは、大きなからだを縮こめるようにして待機していた白樫の大木のうろの中から、のそりと立ち上がった。山型にまとめて積んであった丸太は今の震動で崩れてしまっている。その数本をまとめて自ら担ぎあげながら、彼は周りの静かなる森に、声をかけた。

「みんな、続行だ。もしも怪我をしたものがあったならば、申しでて、手当てを受けて欲しい。それ以外のものは、すまないが、もう少し頑張ってくれ」

森のあちこちがそっとざわめいた。それぞれに身を隠していたひとびとが、無言のまま若き後継者の指示に従ったのだ。木の一族のものたちは、たいていはほっそりと華奢でおとなしかった。じっと潜んでいる限りみな樹木や薮や草原によく融けこんでしまってひどく見つけにくかったので、この移動は、あたかも森そのものが彼の号令に従って動きだしたかのように見えた。

「あ～あ、また始まっちゃったよ」

渋柏の枝にだらりとうつ伏せになって、小人のドンコはため息をついた。

「見ろよ、エサキン。あ～んないい木も切っちまうつもりらしいぜ。ああ、勿体ないなぁ……今のくらいの揺れなんか、いくら来たってへっちゃらなのにさ。こんだけしっかりした木ばっか固まって生えてりゃあ、地面の中は根っこでいっぱいだ。滅多なことじゃあ倒れない。なあ、熊栗鼠のおっかあが屁ぇこいたほうが、よっぽど衝撃じゃねぇか」

「に、にいちゃあぁん」

うろの中から片目だけを覗かせて、エサキンはおどおどと尋ねた。

「そ、そ、そんなと、と、とこにいて、お、落ちねぇか？　も、も、もう、ゆ、揺れてない

か？　お、お、おいら、おいら、おいら、なんかまだ、揺れてっ気がすんだけども、お、おいらだけなのか、ゆ、揺れてるのは？」

「バーカ。おまえのは、震えてるっていうんだ。弱虫だなぁ」

　舌打ちをしたドンコは、よっ、と勢いをつけて枝を掴み、片手倒立をしてみせた。

「ほーらよ。だいじょうぶ。こんなことだってできるぜ」

「あ～～～～」

　エサキンは全身の力を抜いて、長々とため息をついた。

「……～～～あ。良かったぁ！　な。良かったな、良かったな、にいちゃん！」

「う、う、うわぁ、揺らすなぁ！」

　太ったエサキンが夢中で駆け寄ったために枝が揺すぶられ、ドンコは片手ひとつでぐるぐる回ってしまった。

「……すげぇ……にいちゃん、新しい技覚えたな」

　エサキンはぽかんと口を開けて感心した。ドンコはなんとか回転を止めると、はぁはぁと息をついた。

「……おまえ、長生きするよ」

「そうかぁ？　えへへへへ」

　ドンコはふらふらしながら安全な場所まで行ってどっかり座った。そのついでに見上げて

みると、空がおかしかった。昼間なのに、いやに暗いのだ。まるで空が蓋されてしまったみたいだった。土掘り豚の複雑な横穴にでも落ちてしまったみたいだった。
眉を顰めて考えこもうとしたそのとたん、ドンコは、空の暗さよりももっと不気味な何かを感じて、ハッと全身を緊張させた。向こうの藪の暗がりの中に、何か、彼がこれまで見たことも聞いたこともない生き物が潜んでいる。ギラギラと光る恐ろしいふたつの眼が、鋭くこちらをうかがっている。今かいたばかりの汗がたちまち音を立ててひっこんだ。
ドンコは小さく小さく、森じゅうで一番小さな花が風にそよぐ音よりもなお消え入りそうな声で囁いた。
「エサキン」
「んー？　なんだー？」
「お日さまみたいに金色で、毛むくじゃらで、角があって、尾っぽがあって、尾っぽの先は二つに分かれてて……すごくでっかい物って、なんだ」
「なぞなぞかあ？」
上の枝から降りて来た棘蓑虫を指で弾いて振り子のように揺すりながら、エサキンはだるそうに答えた。
「おいら、すっごく腹減ってんだよ。頭なんか使わせないでくれよぉ。……んーと……金色で、角で、しっぽで……そりゃ、化け物だな、にいちゃん」

「逃げろ、エサキン!!」

凄まじい勢いで兄に突かれ、エサキンはあっけなく落ちた。

その瞬間、彼はひどく悲しくなった。自分は兄のように器用ではない、太り過ぎてもいる、徒手体操などできるわけがないのに、どうしてこんなにいきなり難しい技を要求されるのか。次々にぶつかる小枝の衝撃を背中に感じながら、その小さな頭はたったひとりの肉親である兄に対する不信でいっぱいになった。渋柏の根元には、ちょうど良い具合に枯れ葉がたっぷりと厚く積もっている。なまじ何の抵抗もしなかったので、エサキンはかすり傷ひとつなく、すっぽりとその堆積に潜りこんだ。

やれやれ助かったと胸を撫で降ろしながら、エサキンはしばらくじっと動かなかった。彼は怒っていた。柄にもなく本気で腹を立てたので、兄のほうから謝ってくるまではここに隠れていてやると決めたのだった。

(もしまたこんなことをするのなら、ドンコなんか知らない。金輪際、兄弟の縁を切ってやるから)

彼は、そう思った。そう思ったので、鼻に皺を寄せ、目をできるかぎり三角にして、兄が謝ってくる時にしておくべき気難しい表情を一心に練習しはじめた……。

そのころドンコは、飛びかかって来た黄金の怪物からひらりと身をかわし、幹の裏側に素早く回りこんでいた。怪物はすぐさま戻って来た。ドンコは渋柏の枝を鞭のように撓わせて、

怪物の眼のあたりを打った。相手は恐ろしい声をあげ、不器用にも転がり回って向こうの秀胡桃に頭から激突し、その角を刺してしまった。怪物の注意が逸れたその間に、この樹の周辺に住むおびただしい数の鳥や獣たちが、みな尻に帆かけて逃げだした。ドンコもニヤリとし、大急ぎで隠れてしまおうとした。だが、彼の小さな上着がささくれた木の皮にひっかかって外れなかったのだ！

ドンコは焦った。ぐいぐい引っぱったが、上着はますます深く填ってしまって、全く取れない。彼は汗を拭おうとして三角帽子をふっ飛ばした。彼は上着の釦を凄まじい勢いで外しはじめた。怪物の角が抜ける。怪物がこちらを見た。その金色の瞳は、今では単なる面白半分の遊びごころではなく、ほんものの殺気に彩られていた。上着が脱げた。ドンコはあたりを見た。彼の身長の五、六倍ほど登った先に、ちょうどいい感じに張った枝がある。その先から思い切りジャンプをすれば、隣の木に飛べるかもしれない。彼は全力で登りだした。大木の皮は老人の肌のようにガサガサにひびわれていて、良い足がかりにはなってくれたが、鋭くとがった端が棘となってドンコの小さな手をひどく傷つけた。それでもドンコは登った。必死で登った。

怪物はずしりずしりと足音を響かせながら近づいて来る。その音に、枯れ葉に埋まっていたエサキンが何ごとだろうと顔を出した。それは、怪物の、重たげに踏みしめる金色の足の、あまりにも近くだった。

「に……にいちゃん……!!」

下を見て、あっ、と言った瞬間、ドンコは手を滑らせた。

金色の剛毛がみっしりと生えた手に力任せに捕まえられた瞬間、ドンコは窒息し失神した。だから彼は、少なくとも、生きながら喰われる恐怖を味わうことだけは免れたのだった……。

怪物の巨大な牙に顎に、兄の頭が、脚が、バリバリと簡単に噛み砕かれてしまうのを見上げながら、エサキンはぼんやりと、これは現実であるはずがない、きっと悪い夢だろうと考えた。地震のさなかに気絶して、まだ自分は眼が覚めていないのだ。なにしろあんまり怖かったから、すっかりひどい夢を見ているのだ。

こんな夢を、彼はこれまでに何度も、嫌になるほど何度も見たことがあった。それにしても、ここまで恐ろしい夢は初めてだった。なにしろ、怪物の吐息のいやな臭いとまじった兄の血潮の鉄っぽい臭いまでが、はっきりと漂って来るのだから。

(夢でも、おいら、喰われるのはやだな)

勇敢な森の小人としては、たとえ夢の中でも、兄の敵を討たなければならないとは思ったが、ともかく逃げるのが先決のような気もした。焦ったエサキンは、コソコソと枯れ葉を鳴らしながら素早く移動した。

その動きに枯れ葉が滑って、金色の怪物の不確定な足場を突如崩した。怪物は何の気なしに足を踏みかえた。それは、ちょうど、エサキンの上に落ちた。

凄まじい重みに無惨に潰され、小さな笛のような悲鳴をたてながら、エサキンはこころの中でホッとしていた。

(良かった)

(喰われなくて)

(ああ、おいら、おいら、この次は、もっとマシな夢を見るよ、にいちゃん……!)

「どうした。何の騒ぎじゃ!?」

鳥や栗鼠や昆虫たちに囲まれながら急ぎ駆けつけた森の長老ミラルダ・シクラソマ・オトシンクルスは、血塗れの口からドンコの小さな靴を取りだし、唾の糸を引くそれをなんとも不思議そうに眺めている黄金の怪物を眼にして、その老いた心臓をギュッと掴まれたように感じ、よろめいた。

「おじいさま!」

近くにちょうど居合わせた美尾猫の精ディディプリス・ディアンドラは、運んでいた材木を放りだして駆け寄り、老人の腕を支えた。

「……ペルラの息子じゃ……」

途切れがちな鼓動を騙しだまし、老人はあえぐように言った。

「彼女に……引き渡せ……しかと、閉じこめておいて……くれ……と」

「おじいさま、しっかり！　しっかりなさって……!!」

「まあ、どうしたっていうの！」

夫トリファスキアータが、丈夫な鎖蔓でぐるぐると縛られたままの黄金の息子を引きずるようにしてやって来ると、ペルラは青ざめて宝石細工の椅子から立ち上がった。

「森に迷いこんで、悪さをしたそうだ。小さなノームの兄弟を戯れにふたりも殺しおったとか」

「カボンバが？」

マントの衿許を掻き合わせながら、ペルラは暗澹と眉を顰めた。

そのマントは、少女の掌にも十匹乗せられるほど小さなからだを持った豆鼠の綿毛を幾億匹分も繋ぎ交わせて作った世にも珍しい毛皮からできていたが、彼女にとっては潮風に晒しても惜しくないごく普段使いの一着に過ぎなかった。一見豪華なその椅子もまた、豊かなるアヌビアス家の名に恥じない程度の、つまらない半端ものであった。

ペルラは、船作り現場の横の小高い丘の一角を屏風で囲んで、その海沿いの屋敷から持ちこんだ物ばかりの異様な空間を作り上げていた。彼女自身の評価からすれば単なる最低限度の線だったが、あたりの殺風景に比べれば、それは嫌らしいほどに豪華絢爛たる別世界だった。蜘蛛が巣を張らずにおられぬように、彼女はそうした物に囲まれていなければ落ち着い

ていることができなかったのである。

船作りなど全く面白くもないが、森の長老どのの頼みとあれば、無碍に断ることもできぬ。月の巫女の肝いりとくれば、ケチをして後々恥をかいても困る。彼女がこの厄介な仕事にいやいやながら賛同を表明したのはさまざまな思惑あってのことだったが、尊い長である自分自身が、こんな露天に長時間拘束され、現場に働くものたちを励まし監督するよう要請されるなど、全く青天の霹靂であった。浜に吹く砂混じりの風は美しく結い上げた髪を汚らわしく崩し、屋外の光線は彼女の雪花花崗の肌を胡麻斑入りの大理石にしてしまいかねない。ごくたまに大勢のものたちに見上げられるテラスに立って、アヌビアス家の永遠の栄誉と繁栄をきらびやかなことばで讃えられるのは大好きだったが、人目のあるところにあまり長いこと出ずっぱりになって、ずっときちんとすましこんでいなければならない羽目になるのは、全く迷惑もいいところだった。気位の高さの割合いには蓮っ葉で伝法なところのある彼女には、こんな場は、時は、全く窮屈でならなかったのである。

それもこれも、森の長老に合わせて、やっと辛抱していることだった。オトシンクルスの老いぼれめが、その年で、その身分で、それだけ敬愛されながら、こんなやくたいもない事業に当たっていかにも嬉しそうに生き生きと瞳を輝かせ、元気にうろつき回ってみせてくれたりするのが悪いのだ。アヌビアス家の面子を立てるためには、自分とて、気前のいいところ、愛情に富んでいるところ、甲斐甲斐しく他人の世話を焼くところを見せなければならな

いではないか。そうして、みんなの役に立てることをこの上なく光栄に思ってでもいるかのようなふりをしつづけなくてはならないではないか。

ペルラは、既に充分に疲れていた。なのに、この上、老人は、彼女の大切な黄金の息子にまでケチをつけてきたのだ。彼女はムッとしたが、その不快を正直に表明することができぬほどその夫を親しいものと思い做してはいなかったので、せいいっぱい困惑の表情を取り繕い、ため息混じりに言ったのであった。

「しょうがない子ねぇ……でも、ほんとうにこの子だけが悪いの？　その、殺されたこどもたちっていうのは気の毒ですけどねぇ。ほら、カボンバはとても向学心が旺盛なんですもの。見たことない生き物を見て、つい夢中になってしまったんじゃないかしら。どんな子たちなのか、よく見ようとして、力が入りすぎてしまったとか……ちょっとあった。嫌ですわ。いつまでそんな恰好をさせているの。早く、その縄を解いてあげて頂戴よ、ちょっと、カボンバが嫌がっているじゃないの━」

「……こやつは……おまえの息子はな」

唸るカボンバを冷たく睨み、トリファスキアータは低く言った。

「その森の小人のひとりを……こともあろうに……喰ったというのだ」

「んまあっ━」

ペルラは気分悪そうに胸を押さえた。

「嫌あだ。なんてことかしら。まるであたくしが、普段ろくなもの食べさせていないように思われるじゃないの……ああ、おまえ、だいじょうぶかい？　お腹壊さなければいいけどねえ」

「言うことはそれだけか」

つぶやくと、トリファスキアータは、なにやら奇妙な薄ら笑いを浮かべた。息子を縛った縄を緩めようともしない。

この時ようやくペルラは、夫の片手が、鎖蔓を持っていないほうの手が、その背の後ろに、巧妙に隠されていることに気づいて、ぎくりとした。まるで、なにか、長い物でも隠し持っているかのようではないか。

そういえば夫の様子は尋常ではない。瞳の光りかたが普通ではない。そして、このところいつも泥酔しているか、うなされながら眠っているかだった夫から、今は全く酒の匂いがしないではないか。

「……あ……なた……？」

彼女はいつになくやさしい声で夫を呼んだ。それが、ペルラ・ナナ・アヌビアスの最後のことばとなった……。

4

そのころ。
煉瓦城から故郷の谷を目指して飛んで来た一行は、頭上を押さえつけ青空を隠した暗雲に似たようなものにその胸中をも塞がれて、黙りこみがちになっていた。
ヴェリダヌスを越えたとたんに、甘い考えはふっ飛んだ。カリクティス家で感じた激しい揺れや耳にした爆音は、それでも、魔峰オーブの怒りのほんの片鱗に過ぎなかったのだと、みな思い知らざるを得なかった。見慣れた稜線がどこにも探せない。曲がりくねった谷であったところは、雪と氷と崩れた土砂に埋まり果てている。魔峰オーブ自体は今も低く唸りながら、恐ろしい熱気と、ここらからだとちょうど火の粉のように見える岩弾を発散している。すべてが暗澹たる空のために、奇妙に絵空事めいて見えた。こどものころ、悪さをすると聞かされた悪魔の住む国のようにも思えた。
凄まじい故郷の変容ぶりに、勇んで戻って来たものたちはみなことばを失い、頬をこわばらせた。奥へ奥へと進むにつれて、熱気は届かなくなった。高山に吹く冷たい風が、死そのもののように空虚で味わいのない風が、彼等の衣服や髪をはためかせた。
ラーミアたちの羽ばたきも、いつしかひどく不規則で落ち着かなくなっていた。巨鳥は、

故郷の魔峰を今はひどく恐れているように見える。注意深くまた辛抱強くこちらの意志を伝えていないと、すぐにもオーブを背にして逃げるような道を選びたがるのだ。背筋と膝をまっすぐに伸ばし、けして前屈みにならぬような姿勢を保って腰の一点で体重を支える最も巧みな乗り手ぶりを示しても、ともすると鳥はその巨体にものをいわせて、強引に進路を変えようとした。だから彼等は、四羽のラーミアをできる限り近づかせ、開いたくさびの形を為すように配して、互いに互いを制御するような形でやっとここまで飛んで来たのだった。それは、鳥使いに慣れたひとびとにとっても全く気の抜けぬ、普段の何倍も疲れる仕事だった。

先頭は、チズルム。

右翼を為すは、ミトラの右拇指である岬の神官と、ミミイカ。

左翼が、ディアルトとピパ・ピパ。

中央を占めるは、シフィルを乗せたテュー、このテューがこの一行にて唯一の女性であった。

(この様子では、二の谷はひどいことになっているかもしれない)

大気の身を切るような冷たさに痛みだした耳に、一種懐かしさを覚えながら、ディアルトは奥歯を噛みしめた。

(大勢が苦しんでいるのではないだろうか……ああ)

山の火灯りは既に遠く、あたりはもはや、月のごく細い夜のごとく、心細い真っ暗闇であ

った。神官の全身が放つ神秘の光波動がなければ、彼等は飛ぶこともできなかっただろう。
ディアルトは思いだした。ヤベ・ヤベと共に、吹雪の中で過ごした時間のことを。白く濁った、吹雪闇のことを。今、彼は、そのヤベ・ヤベの遺児ピパ・ピパと共にあった。少年の腰に手をかけて、その手綱さばきに、生命を預けて飛んでいるのだ。
(ヤベ・ヤベの魂よ……我等が見えるか? 我等の苦境を知っているか。もしもきみに力があるなら、どうか守ってくれ。俺たちを導いてくれ……!)
不意に、チズルムが片手を上げ、低く声をかけて隊の進軍を止めた。到着の、降下の合図であった。鳥たちは、次々に翼を傾けて旋回に入った。大きな輪を描いて回りながら、みな瞳を凝らしてあたりを見回した。
何ひとつ見えない。灯りひとつ、ない。
不安が、重苦しい予感が、ディアルトの肺を圧迫した。
「ほんとにここかな。ピパ・ピパ、どう思う?」
「わかんない……なんか、やけに静かすぎるけど……もうちょっと降りるみたい」
四羽のラーミアは、ゆっくりと高度を落とした。限界まで降下してみると、そこがただ一面の平らな雪原であることがわかった。そこにはなにもなかった。彼等の旋回を妨げるようなものは、何ひとつなかった。だが、変わり果てたといえども、あたりの山の地形の概略には、なんとなく見覚えがあるような気がする。なにより魔峰の見える方角の雰囲気が、彼等

の見慣れた、故郷の村からいつも見上げるものとそっくり同じなのだ。
少なくとも三の谷の近所には、こんなふうに開けた平らな土地など、けしてあったはずがない。そのことを、川辺の民と呼ばれるものたちは……それにディアルトは……よく知っていた。とてもよく知っていた。
「……まさか……」
誰かが泣きだしそうな声でつぶやいた。
もしここが三の谷だとするならば、その被害は、彼等の想像を遥かに越えていた。家族が怪我をしているかもしれないとは思っていた。あるいは、村びとの中には、誰か運悪く死んでしまったものさえもあったかもしれないと。だが、村がまるごと、まるで夢のように消えてしまうなどという恐ろしいことを、本気に心配しておくことができたほど悲観的だったものはなかったのだ。
風車も、家々も、水汲み広場も、何ひとつ残っていなかった。突然の、そして永遠の別れを自覚するには、それは、あまりにも茫漠ととりとめのない光景でありすぎた。
春になってこの一面の雪が溶けた時、はじめて見えてくるであろうさまざまなものを想像して、ディアルトは思わず両手で顔を覆い、からだの力を抜いた。共にこの鳥に乗った少年の髪が、冷たく冷えた髪の少年らしく妙に健康的で日常的なその馨しさが、彼の胸を余計に苦しくさせることになるのに……。

「ねえ……違うよね。方角、間違ったんだよね」
背後の男の気落ちを感じると、ピパ・ピパは感情の欠落したような声で彼に尋ねた。
「三の谷は、もうひとつかふたつ山を越えた向こうだよ。今もちゃんとあるよ。ちゃんとあるよ。ね……そうだよね、ディアルトお……」
ひとと精霊の間に生まれた青年は、ただ無言で少年を抱きしめた。

「待って。もう一度、右に。あれ……足跡じゃないかと思うんですけど」
不意に岬の神官の、低く抑えたような声がした。
「え？」
「ほんとかよ？」
「どこどこ？」
「見えませんか？　ああ、ぼくは、夜目が効くから」
そのよく効く眼をことさらに凝らすようにしてかがみこみながら、眼下の山々を見つめる翼豹の少年に、みな息をのんで注目した。
「うん。やっぱり、そうですね。あの、小高い山の途中から、もっと上に向かっています。……二人じゃない。少なくとも十人くらいが歩いた跡がある」
「……丘？　……俺の家か……？」

ディアルトがつぶやくと、みんな、おお、と声をあげた。
「そうだ。きっとあんたの家だ」
「登ってったんだよぉ！　雪崩がくる前に、高いとこに逃げておこうって思いついて」
「十人？　たった、十人ぽっちか？」
「待て、待て、そう逸るな」
「でも、ああ、うちの女房は……」
「行ってみよう！　早く」

苫小屋の裏手で、マタ・マタは黙々と薪を割っていた。できたものを、スラバエとパフ・パフが、やはり無言のまませっせと運んで行く。雪の上には、何度も往復する彼等の足跡がくっきりとついている。空腹と疲労と不安のために、よろめきがちな足取りで。

小屋では老人が火を起こそうと苦心惨憺しているはずだった。家主がどこかに持っていってしまったのか、ここには火種がなかった。火がなければ、彼等はこの夜を越えることはできないだろう。すでに気温はひどく下がっている。幼いチャカ・チャカは眠りこんでしまいそうだ。ゴビーが時折わざらとしく甲高い笑い声や叫び声をあげているのが聞こえる。表情たっぷりに御伽噺をしてやって、なんとか寝かさぬようにしているのだろう。暖が取れさえすれば、眠らせてやることもできる。凍ってしまっている肉や飲みかけの甘実酒で、みな腹

を満たすこともできるはずだ。
既に必要以上の薪が割れたと思う。だが、マタ・マタは手を止めることはできなかった。スラバエたちも、運びつづけずにはいられないようだった。
このまま火が起こらなければ、なにもかも無駄になる。
だが……。
「あ」
力任せに割った薪の破片がすっ飛び、避けようとして平衡を崩したパフ・パフがすてんと転んだ。
「だいじょうぶか!」
「うん、何でもない。当たらなかったわ。びっくりしただけ」
駆け寄ったマタ・マタに、パフ・パフは可憐な微笑みを見せた。
「マタ・マタこそ、疲れたでしょう。もう、休んだら?」
「いや……俺は」
「ね、待って、あたし」
かぶりを振って薪割り台に戻ろうとしたマタ・マタの手を、パフ・パフが摑んだ。冷たい手だった。氷のような手だった。
「……あったかぁい……」

マタ・マタは力仕事のために汗だくになっているほどだった。うっとりとその手に寄せるパフ・パフの頬もまた、生命などないもののように冷え切っている。ふりほどくことはできなかった。マタ・マタは明後日の方角を見たまま、女の手が自分の手によって温められ、満足して離れてくれるのをじっと待った。

「今夜眠る時――」

パフ・パフが喉にからむ声でつぶやくのが聞こえた。

（今夜火が起きなかったら、明日の朝は眼が覚めないだろう）

マタ・マタは思った。

（俺たちはみんな、今夜限りだ。この娘も、これっきりだ）

「あんた、あたしのこと、抱いてて……？」

驚いて振り向くマタ・マタに、パフ・パフは花のように笑った。

「お願い」

マタ・マタは何か言おうとした。しかし、ことばは出てこなかった。彼が頭を振り、娘のひどく真剣な顔に、困惑した瞳を、懇願するような表情を向けた時である。

「……あら？」

パフ・パフが空を仰ぎ見たのは。

「何か……飛んでる。ほら、鳥よ！」

パフ・パフは跳ね起きて、両手を振り回した。
「おおい、おおおい！　ああっ、ラーミアだわ！　みんな、見て。ラーミアよぉっ!!」
「なに」
「ラーミアだって？」
「ほんとか」
小屋の中にいたひとびとも、次々に出て来た。チヤカ・チヤカが弾みながら飛びだして来る。みんな、崖っぷちの、空の良く見えるほうに走って行った。マタ・マタは鉈を安全な場所に置き直してから、ゆっくりとあとを追った。
「おおーい!!」
「ああ、良かった。助かった!!」
「見ろ、誰か乗ってる……？」
押し合いへし合いするおとなたちの腿の後ろでもがいていたチヤカ・チヤカは、不意にスッと持ち上げられたので、びっくりした。が、マタ・マタに肩車をしてもらったのだとわかると、安心して空を見た。
「……おにいちゃ！　ピパ・ピパにいちゃな!!　わぁあい!!　ぅわぁあい！」
「戻って来おったか」
傍らで、老人の声がした。マタ・マタは黙ってうなずいた。

その腕に……はしゃぐチャカ・チャカが落ちないようにしっかりと支え持った彼の肘のあたりに、ふと、柔らかいものが滑りこんだ。見ると、パフ・パフが紅潮した顔をして、抱きついていた。彼女は興奮した口調で短く囁いた。

「今夜」

マタ・マタは笑った。

「ああ」

5

ランデールには、それと意識しなければわからない程度の微震が、不気味に続いて止まなかった。

いつまで待っても長等から何の通達もないことに不安になったひとびとは、さまざまな噂や憶測を口にした。この変異は、実は五大家並立に飽きたらなくなったダトニオイデスがしかけた大芝居であると、炎一族の振りまいた話を鵜のみにしたものもあり、カリクティス家とコリドラス家の覇権を巡る争いなのだとまことしやかにいうものもあり。血肉に飢えた金色の悪魔が森の奥から出てきたらしいとか、木と金は船をつくっているそうだとか、それは自分たちだけが助かろうとしているからなのだとか、船だというのは嘘で魔峰オーブを破壊

する何か凄まじい武器なのだとか、ネリル河が枯れ果てたのは水の一族が滝を止めてしまったからなんだとか、運河を使えなくしてみなにいうことをきかせる気なのだとか、そんなふうに五大家がばらばらになったからミトラ神がお怒りになっているのだとか、川辺の民が山に何かしかけたのだとか、遠い昔の恨みを抱いたひとびとは山のこっち側の妖精たちをみな殺しにするつもりなのだとか、なんとかかんとか……驚くほど的確に一面の真実を言い当てているものもなくはなかった。だが、みな、いったいどの噂を、誰の話を、何を信じていいのかさっぱり見当もつかぬまま、勝手にどんどん自分の予想や判断をつけ加えて、また広めた。この時とばかりにあからさまな悪口雑言を吐くものもあり、個人的な恨みや被害妄想から、とんでもなく衝撃的な想像をするものも少なくなかった。事実はいつしか数多の嘘と偽りと疑心暗鬼の影に覆い隠され、自分の属さぬ種族の動向については、もはやほとんどの精霊等は、ひどく懐疑的に悲観的になることしかできなかった。

そんな最中に、また、ほんの僅かに大きな揺れがあった。この揺れは、噴火とほぼ同時に起こったはじめのものよりは、ずいぶんと規模が小さかったにもかかわらず、ひとびとを恐怖のどん底に叩き落とした。〈まだ、災厄は終わってはいなかった〉〈始まったばかりなのだ。もっともっと、ひどいことが始まるのだ〉不安と動揺は、最初の地震の時に十倍、いや、百倍したものとなった。脆くなったひとびとのこころは、変異そのものよりもずっと凄まじい威力をもって、ランデールを直撃し、震撼させた。

ひとびとは家を捨て、あてどもなく逃げ惑いはじめた。街路に、広場に、運河に、彷徨う精霊等が満ちあふれた。

ルビス等の一行は、ちょうど、そんな状態の町にさしかかってしまったのだった。悪戯に騒乱を起こさぬようにと、この暗い空に乗じてさりげなくカリクティス別邸を目指そうとしたが、裏目に出た。不安のためにどんな瑣末事をも見逃さなくなっていたひとびとの目は、黒雲渦巻く空を背にこそこそと隠れるように飛来した巨鳥の姿を、見逃してはくれなかった。恐慌を来したひとびとはそこに禍々しい災厄の象徴を見た。何人かが、鳥に、石を投げた。槍を打ち、火のついた矢を放った。彼等は憑かれたように叫んだ、魔の山の化身を倒せ、と……。

「ああ。なんて恐ろしい……」

急ぎ上昇する鳥の背で、マルランドは憮然としてつぶやいた。

「すごいひとごみだこと。ランデールには、こんなにいっぱいひとがいたんだわ。天の神々が大掃除したくおなりな気持ちも、なんだかわかるような気がするわね」

「痛っ！」

ニアサエは礫に当たって悲鳴をあげた。

「こんちくしょう、何か投げかえしてやるものないかしら」

「おねえちゃん、飛び降りたら？」
ツクナレが言った。
「待って。ンドゥロ、もう一度右を下げて」
ルビスは鳥を操ってくれている男の、肩を叩いた。
「……何かしら……ほら、広場に、あんなものが見える」

クリプトカリオンは立ち上がった。その隻眼は、薄闇の空の下に、あの日、彼の花嫁をさらって行った憎き巨鳥の姿をはっきりと捕らえたのだった。
（ついに……ついに来たか……!!）
「点火しろ」
彼は低く言った。
「……は？」
聞き間違いであってくれればいい、と、ラプラディは問い返した。だが、彼等が大将と呼んで慕って来た男は、何の感情もない顔で、冷たく続けた。
「やぐらだ。大地の種族の連中を……奴の身内を、火の中に追いこめ。早く！」
突如にあがった巨大な火の手と、そこから町じゅうを駆け巡った熱風、飛び散る火の粉は、

ひとびとの理性の最後のひとかけらを吹き飛ばした。群衆は動きだした。右往左往走りだした。狭い街路にひとがあふれた。水の引いた運河に、ひとは零れた。ぎっしりと密集し、一個の不定型生物のような塊となって、ひとびとはもがきながら邁進した。土砂崩れのように、雪崩のように、決壊した堤のように、怒濤のように……誰もその行く手を選ぶことはできなかった。ただ、流し流されるままに、道筋の向かうままに、……足を踏まれ、小突かれ、髪をひかれて、ぐいぐいと、ただぐいぐいとつき動かされた。押されれば、押し返すか、他のものを押すかしかない。逆らうことはできなかった。留まることもできなかった。小さくか弱いものものたちは、踏み潰されないようにするだけでせいいっぱいだった。

「……あ!!」

指先の離れた時、ピライーバは急ぎ妹を捕まえようとした。

だが、どどっと崩れ、将棋倒しになって運河に塡まりこむ人波にピラムターバはあっけなくさらわれ、そのまま見えなくなった。ピライーバはその同じ流れに乗ろうとした。だが、落ちるまいとしたひとびとの必死の抵抗は、彼を建物の角から見通しのきかない脇の細道に押しやり、あっという間に橋を渡ってしまう。流れの中に巨きな石のある時、川がまっぷたつに裂かれるように、ひとびとはここに右と左に分かれて、二度と出会うことのない道をそれぞれに進んだのだ。

「おにいさま、おにいさまぁっ」

「どこ？　ピラムターバ、どこ？」

「ここよ……ここよ！」

雪木犀の少女の呼ぶせつなくか細い声がみるみる遠ざかっていくのを、風木犀の少年はどうすることもできなかった。人波は、双子を、生まれてからただの一度もほんとうの意味で離れ離れになったことのなかった手と手を、無惨にもぎ離した。

美しい水がいつも滔々と流れていた運河に、今、ひとの血肉をもった生きた川が流れていた。

「海だ、海に出よう」

儚く流され、半ば意識を失いかけた少女ピラムターバの耳元で、誰かが喚く。見知らぬものたちが、呼応の叫びをあげる。

「そうだ、海だ！」

「船がある」

「乗せてくれる？」

「だめなら、乗っ取るまでよ」

「ああ……おにいさま……おにいさま、どこなの？」

人垣に押し流される白い腕を、しなやかな若木の枝のような妹の腕を、どこかにみつけようとして、伸び上がり、振り返り、振り返りながら、ピライーバもまた流された。群衆とい

う名の怪物に、抵抗する術とてもなく。
「コウデマ山の向こうならば」
「ロリカリアに行けばシフィルさまが」
「いや、アガマだ。サラマクセンシスの岬の神官のところなら、きっとみんな、助けてもらえるぞ……！」
意見は分かれ、まとまらぬ。だが、ひとびとはひとつとなって流れ去ってゆく。
「ピラムターバぁ!!　森で。森で待っているからねぇ！」
せいいっぱい大きく叫ぶ少年のそばを、押し合いへし合いしながら焦れったいほど不器用に動いてゆく群衆の上に、巨鳥の影が落ちた。恐れ戦いたひとびとは暴走した。ひ弱なものたちを、突き退け、押し分け、踏みにじって……。
「だめです、これ以上降りるのは危険すぎます！」
ンドゥウロは叫んだ。
「上昇しますよ、掴まっててください。いいですね？」
「……ク……クリプトカリオン……!!」
ルビスは聞いていなかった。彼女は見たのだ。崩れかけたドームに立って、腕を振り回し、恐ろしい指示を飛ばしている五芒星の主を。天も焦げよと燃え盛る焚き火の紅蓮の炎の中に、

つき落とされ、投げこまれ、身の毛もよだつような悲鳴をあげては沈黙してゆく、罪もない黒服のひとびとの受難を。ひとの肉のあげる、真っ黒い煙を。
(おのれは……何をまた血迷って……!!)
クリプトカリオンはこちらを見上げた。どうだと言わんばかりにニヤリと笑ったその顔がみるみる近づき、大きくなって、また遠ざかった。
豊かな髪が逆立った。爪は掌に喰いこんだ。真紅の瞳が狼火のように燃え上がった。彼女のからだじゅうが、バチバチと放電し、火花を飛ばし、とてつもない高温になりはじめた。
「うあち!」
ンドゥロは悲鳴をあげ、ルビスから遠ざかろうとして思わず鳥の胴体に伏せた。バランスを失ったラーミアが、急降下し、慌てて体勢を立て直した。その背が、ひどく斜めになった。
ルビスは飛んだ。
両手を広げ、炎の尾を引く彗星となって、ルビスは降った……!
ペルラの死骸のまぶたをそっと閉じさせてやると、ミトラの左拇指、紫の蝶の化身持つ月の巫女は短く瞑目した。それから、静かに立ち上がり、集まったひとびとに振り向いて言った。
「……どうか、進めてください。もう、あまり時間がありません」

船はその底板を張りはじめている。もうあとひと息だった。木と金の種族のものたちは疲れ果てた顔にきちんと帽子を被り直し、仲間同士いや、単に隣り合ったもの同士が互いに互いの肩を支えあうようにして、沈黙のうちに散らばり、それぞれの作業に戻った。

死んだ女の傍らに残されたのは、巫女と、森の長老と、その跡継ぎ孫の嫁である大地の種族の娘の三人だけであった。どの顔にも血の気はなく、どの瞳も暗かった。

「……哀れなものよ」

喘々と息を詰まらせながら、老人はつぶやき、死んだ女の手をそっと撫でてやった。美しく整えた黄金の爪を持つその手はひどく冷たく、虚空を摑んでこわばったままだった。

「ランデールには」

淡々と、巫女は宣言した。

「とうとう暴動が起こったようです。わたくしは水晶宮に行って枯れた運河に水を戻して来ます。ランデールとここととの間に、水の障壁を作らなくてはなりません」

「また、ひとが、死ぬかの」

「理を失ったあのものたちが我先に殺到すれば、せっかくの船が壊れます。わたしたちの唯一の希望が」

「そうじゃな」

老人は、白い眉を悲しそうにしながら、凍てつく大海の彼方を見遣った。海は、変わりが

なかった。空は暗かったが、海そのものだけは、まだ変わりがなかった。

「……息子よ」

だらりと降ろした腕の先に、長剣があった。トリファスキアータは柄をしっかりと握りかえようとした。だが、手が滑って、なかなか思うようにいかぬ。血がぬめるのだった。そこには、もうあまりにも多くの血がかかっていた。剣は、妻と、子と、彼自身の血を吸って、ひどく重かった。とてつもなく重かった。足許にしたたり落ちる赤いものを、波が洗った。なんどもなんども、うち寄せては、静かに洗って、運び去った。

ようやく握りが落ち着いた。父は、ゆっくりと、息子に向かって歩きだした。

膝まで海に浸かりながら背中の毛皮をふくらませて威嚇する黄金獣に、トリファスキアータはひどくやさしげに眼を細めた。

「だあっ！　ぐわあっ!!」

カボンバは牙を剝いた。二つ又の尾をくねらせて、間合いを計っているように見えた。だが、父は剣を垂らしたまま、少しも慌てずに近づいていった。

空は暗く、海は静かだった。寄せくる波頭ばかりが白かったが、沖に背を向けているカボンバには、そういったものを見ているゆとりはなかった。

金色の毛皮持つものは、荒い息をつきながら、なんとか逃げようときょろきょろあたりを

見回した。
彼は、今静かに自分に迫ってくる男を、恐ろしいと思ったことはなかった。親しいものであると思ったこともなかった。その男が、やさしく強い母をいきなり刺し貫いた時には、驚きのあまり手を出すこともできなかった。男が声もなく頽れる母を抱き止めた時、綱が緩んだ。カボンバは無我夢中で逃げだした。あたりには知らない精霊たちがいっぱいいて、自分が走ると逃げ惑った。ひとが慌てるのを見るのは好きだった。彼は愉快だった。わざと恐ろしい声で吠えてみせて、みなを散らした。

だがいましめは堅く、自由にならぬ腕はひどく痛痒かった。あまりに痒くて、堪え切れず岩に擦りつけた。そのうちに、不意に、鎖蔓が弱って切れた。彼は驚いて、笑い声をあげた。嬉しかった。あんまり笑ったので、喉が渇いた。濡れるのは好ましくなかったが、彼は海に入って行って、両手で掬って水を飲んだ。渇きは止まらなかった。余計にひどくなった。彼は怒って海を蹴った。彼は転んだ。彼は驚いて立ち上がろうとした。次の波が、彼の足を浚い、またしても転ばせた。痛い水が眼に入った。彼は泣いた。彼は誰かにここに来て欲しかった。母に、あるいは、いつもそばにいてくれる色の黒い娘に、そばに来て、助けて欲しかった。このひりひりする眼をきれいに拭って、彼が今、切実に欲しくてたまらない美味しくて甘い水を取りだしてみせて欲しかった。泣いて、泣いて、大声で泣いて、気がついたら、岸に、この男が立っていたのだった。

　カボンバは家に帰りたかった。馴染みのある場所に、早く戻りたかった。とにかく、この気持ち悪い水から一刻も早くあがりたかった。なのに相手は、岸を塞ぐように立って、どんどん近づいて来る。眼はひりひりして、よく見えない。だが、脅しても、からだを大きくしてみせても、男は怯えてくれない。逃げないようだ。いつだって、彼がほんのちょっと唸るだけですぐにこそこそ物陰に隠れてしまうのに、今日に限って、男はまるで平気な顔をしているのだ。

「わしはこれまで、そなたに何もしてやれなんだ」

　男の口が静かにつぶやいた。話しかけられていることはわかったが、そのことばの意味は、カボンバの白熱したような頭には、全く理解できなかった。

「この手で……葬ってやるのが、たったひとつの、父の役目よ……」

　男の手がゆっくりと動いた。今、その剣の切っ先が、はっきりと自分に向けられるのを、うまく開かない眼に、彼は見た。カボンバは咄嗟に走りだした。こうなったら、男を倒して岸に上がるしかない、こんな男は恐ろしくない。本気でかかれば、すぐに倒せるに違いないのだ。盲滅法、彼は走った。彼は知らなかった。自分の背で、ひときわ巨大な波が音もなくふくれ上がってゆくのを……。

　逃げ惑うひとびとの頭上に、燃えながら落ちてゆくルビスのその落ちる先を見届けようと

無理をしたために、ンドゥロは手綱さばきを誤った。彼のラーミアは建物に激突して、落ちた。

大荒てで逃げだし、恐ろしい鳥のそばから遠ざかろうとするひとびとにも揺るがされることなくしっかりと立っている逞しい脛があった。人影が途絶えると、その足は、半ば気を失っているンドゥロにゆっくりと近づき、彼の首ねっこをむんずと摑んでひき起こした。ラーミアが啼き騒いだ。

「……川辺の。生きておるか？」

低い声に、ンドゥロは眩暈のする視界を必死で立て直した。どうやらこの相手は、まだ狂っていないらしい。彼は安堵を覚えた。

「はい、なんとか」

「そうか。それは良かった」

男の顔や剝きだしの筋肉質な腕は傷だらけだったが、その頰にはどんな傷跡よりもくっきりとしたあどけないような笑窪があった。彼は、黒い巻毛も持っていた。

（どこかディアルトに似てる。身内だろうか？）

せいいっぱい微笑みながら、ンドゥロはそう思った……。

気負いこんで飛びだしたものの、高いところから飛んだ衝撃が左の足首を痛めた。よろめ

くルビスを見て、慌てて避けたひとびとは囁き声を交わした。

「ラーミアの化身か?」

「……あの髪。炎の跡継ぎ娘だ……!!」

「いや、あの変な服を見なよ。違うよ、あれは」

「か……川辺の民!?」

誰かが初めに、まずひとつ、なにげなく、石を投げてみた。ルビスは思わず、それを片手に受けた。灼熱した彼女の手のために、石は、一瞬のうちに融けた。

「うわあああっ!!」

「ば……化け物だ!」

また石が飛んだ。また飛んだ。礫はたちまち雨あられと彼女を打った。痛む足を引きずりながら、ルビスは駆けた。逃げるつもりではなかった。町のひとびとは邪魔臭くはあったが、敵ではない。彼女の脳裏にはただ、クリプトカノオンのいるはずの広場しかなかった。ひとを焼く炎にあかあかと照らしだされて、その五芒星の徽を恐ろしくも妖しくギラギラ燃え立たせた、稲妻の主の姿しかなかった。

だが、角を曲がるごとに、次の群衆がいて、石もて追われし少女を見るとみな悪鬼のような顔つきになって同じことをした。炎が落ちてきた時には真っ青になって逃げだしたひとびとも、その手に石が融けてしまったことを見たものたちも、彼女が結局はただ走り回るばか

りで自分らに害をしないと知ると、急に居丈高になって行く手を阻んだ。
「そうら、こっちだ！」
「行ったぞ！　追いかけろ！」
「逃がすな！」
「気をつけて」
「やっちまえ……!!」
群衆の壁に走る先々を閉ざされ、来た道を戻り、また脇にそれ……ルビスは迷ったことに気がついた。広場はどちらなのか、もはやわからない。ひとの輪は次第次第に狭まってくる。
ルビスが近づくと大急ぎで引きはするものの、数を頼みに、じりじりと押し寄せてくる。
ルビスは戸惑った。恐怖が、ゆっくりとその胸を圧しはじめた。
（どうして……どうしてわたしを追いかけるの。石で打つの……？）
（なぜ、みんな、そんなになってしまったの……？）
走るのを止めることはできなかった。止まると、たちまち、石をぶつけられる。ひとびとは敷石を剥がして投げた。建物にまで入りこんで、高い窓からも物を落とした。食べかけの皿が、腐った水が、重たい花瓶が降ってきた。ひとびとは笑った。狂ったような声で笑った。
重なる災難に虐げられ踏みつけられて追い詰められたひとびとは、自分たちよりも弱いもの、その手の中で怯えてくれるものを欲していた。青ざめて逃げ惑う美しい少女に、暗い歓びを

覚えずにはいられなかった。

なんでもいい、胸を塞ぐ自分の不安をほんの僅かの間なりとも忘れさせてくれるものに、夢中になっていたかったのだ。

「狩りだせ、狩りだせ！」

「気をつけろ、そいつ熱いぞ」

「水ぶっかけちまいなさいよっ！」

（ああ、お婆さんまで。やさしそうな森の一族のひとまで。

赤い服のものまでいる……！　おまえたちは、次の長だったこのわたしを見分けることもできないの!?）

行き止まりであることがわかっていたのに、とうとう彼女は手近な建物のひとつに逃げこんで、扉をしめた。閂を降ろした。ひとびとは叫び、押し寄せてくる。何か重たいものを打付けて、扉を破ろうとしている。ルビスは階段を登った。足首がずきりと痛んで引き攣った。彼女はうめきながら転げ落ち、胸を打った。六つのオーブの首飾りが散って、弾んだ。慌てて拾い集めるルビスの瞳に、怒りと無念の涙がギラギラと潤んであふれた。扉は凄まじい力で叩かれている。閂が今にも千切れそうだ。

（……ああ、来ないで！　みんな来ないで……）

（わたしはもう自分を抑えられない）

（わたしは、あなたたちを傷つけてしまう……！）

その時、階段脇の厨房の床が、ぱたりと開いた。落とし戸だったのだ。誰かが上半身を覗かせている。ルビスはギョッと凍りついた。

「こっちだ！」

青年は囁くように言った。緑の服を着た、おとなしそうな青年だった。

「早く！」

疑っている暇はなかった。彼女は転げるようにして、青年が腕をいっぱいに開いてくれている落とし戸の中に飛びこんだ。即座に、彼は戸を締めた。真っ暗闇になった。とたんに、玄関の扉が破られる音がし、ひとびとの喚声が、足音が、ルビスの頭を上を、嵐のように駆け抜けた。大勢がなだれこんで床を踏みならしている。階段を上がり、二階をうかがい、大声で叫びあっている。ルビスは震えた。手の中で、六つのオーブがかちゃかちゃと鳴る。その音が、どきどきと打つ自分の心臓の音が、外に聞こえてしまうのではないかと、思った。だが、震えは止まらなかった。止められなかった。息をするのも忘れて、全身を耳にして、ルビスは待った。ただ待った。

やがて、ひとびとは諦めて出て行った。音がしなくなってからも、長い長いこと、ルビスはそのまま動かなかった。次第に震えは落ち着いていたが、今度は、この、助けてくれた青年のことが気になった。

（……誰？）
（なぜ？）
そっと息を吸いこむと、何か、懐かしいような、よい匂いがした。平和でやさしい、穏やかな、春の森のような匂いがした。
「……ああ……」
思わずルビスがつぶやくと、その肩をそっと支えていた青年の手がかすかに動いた。
「動けますか？」
小さな声で、彼は言った。ひどく丁寧な声だった。
「ええ、たぶん」
「じゃ、ここをこのまままっすぐに行ってください。狭いけど、這えば通れます。水が溜まっているところがありますから気をつけて。たいして長い距離じゃありません。すぐ、運河に出ます」
「ここ、何？　床が濡れてるわ」
「一種の生け簀なんですよ。保存庫っていうか。ここらの家で、昔こういう作りが流行ったんです。もうみんな、忘れているみたいだけど」
「……あなたは誰？」
青年は答えなかった。暗くてわからなかったが、ルビスは、彼が寂しそうに笑ったような

気がした。這いつくばろうとして、ルビスは手の中のものを思いだした。
「大切なものを持っているの。落としたくない」
「じゃあ……」
びりっ、と音がした。青年がその服を破り取ったのに違いなかった。

運河の側には群衆はいなかった。もう諦めて散ってしまったのかもしれない、とルビスは思った。外に出ると、青年は自分の上着を脱いでルビスに着せかけた。
「変装のつもりだけど……その髪じゃ、やっぱり目立つな。さ、早く、行ってください。できるだけここから遠ざかって」
「……待って！」
緑色の上着は、あの匂いがした。森がルビスを包みこんでいる。いつか、どこか昔、立ったことのある場所に連れてゆくかのように。彼女に、何か大切なことを思いだしそうになった。瞳を彷徨わせて相手の顔をじっと見つめ、何かを見つけようとするルビスに、緑の青年は苦しげに眉を顰めた。
「さ、早く」
彼の手が、ルビスの肩を押した、そのとたんであった。
「いたぞぉ!!」

誰かが怒鳴った。ハッと顔をあげたふたりの周囲に、ばらばらとひとが駆けつけて来た。運河のこっちにも向こうにも、建物のあそこにもここにも、にたにたと狂った喜びに瞳を輝かせながら見下ろしている顔があった。狂気の狩人たちは、まだどこにも行ってなどいなかったのだ……!

「ちくしょう、てこずらせやがって」

「仲間がいたんだ。いっしょにやっちまえ!」

「おうさ!」

待っていたぞとばかりに躍りでて来た者たちの手には、既にいっぱいに引き絞った弓矢があった。青年はあっと叫び、飛びだした。

「待ってくれ! みんな、このひとは……ああっ!!」

青年の胸が射抜かれた瞬間から、時はその歩みをもつれさせた。奇妙に静かに、ゆっくりと、ちょうど斧を打ちこまれた大木がその身を横たえようとする時のように、青年のからだが傾き、濡れた地面に触れ、泥の飛沫をあげて弾み、また落ちて動かなくなるのを、その刹那のそのひとつひとつを、ルビスははっきりと見分けた。その光景のひとつひとつが、最後に彼女を見てかすかに笑ったかのような青年の翠の瞳が、彼女のこころをこれまでしっかりと抑えつけていたものを、ぷつりぷつりと切って外した。

少女は顔をあげた。

少女は、笑ったように見えた。

次の瞬間、彼女の瞳の中で、すべては真っ白い眩光の中に溶けた。それから血の赤に染まった。赤く塗られた世界に音はなかった。星の生まれる時のような凄まじい爆発が、音を奪っていた。

何か熱い赤い風のようなものが駆け抜けて、射手を、観衆を、そのあたりにいた何もかもを、素早く薙ぎ倒し吹き払ってゆくのが見えた。それが自分の力であることを、からだから発した極度に高い熱と光であることを、ルビスは、すこし遅れて、まるで他人ごとのように感じて、小さくため息をついた。

（でも、あなたがたが悪いのよ）

炎の乙女はクスクスと笑った。

（あんまりひどいからなのよ）

視野の中の赤が薄れると、ムッとする蒸し風呂のような空気の中、ルビスはひとりぼっちだった。

しゅうしゅうと熱い蒸気をあげる運河の河床に、緑の服の青年が眠るように横たわっていた。泥に埋まり、泥を跳ねて汚れたその顔が、半分だけ見えていた。しゃがみこんで、翠の瞳をそっと閉ざし、その髪をやさしく撫でてやりながら、ルビスは小さくつぶやいた。

「ごめんなさい。やっと、思いだしたわ、あなたのこと……お祭りの夜に、枝をくれたわね」

生命をかけて愛すと誓った彼は、その誓いを、忠実に守ったのだった。誰にも、同族の者たちにさえも、見分けてもらえなかったルビスを、彼だけは、ちゃんとわかってくれたのだ。祭りの夜のルビスは変装をしていたのに。今日のルビスは哀れな狩りの獲物のように逃げ惑うていたばかりなのに。

「なのに、わたし、あなたの名前も知らない」

ルビスは立った。

腕を上げてグノリアムの香りの上着を脱ぎ、ふと襟許の飾り紐に気づいて、それを抜いた。六つのオーブを繋いで首にかけると、ルビスはいらなくなった上着を、青年の死骸の上に無雑作に放って、歩きだそうとした。

「……誰？」

振り向いたルビスの視線の先、水を失った運河の底で大破した舟の陰で、がたがたと全身を震わせている娘があった。

「カラ！」

「……あ、悪魔！　厄病神っ!!」

カラ・セミアクィルスは叫んだ。

「なんてこと……なんて恐ろしいことを。あんたは……あんたは化け物だ。……みんな、みんな、あんたのために。あんたなんか、し、死んじまえばいいんだぁっ!!」

ルビスは無言のまま、ずいずいとカラに近づいた。カラは喉の奥で悲鳴をあげ、逃げようとした。が、その膝は、脚は、いうことをきかなかった。湯気をたてる泥の中に、他愛なくカラは転んだ。

従妹の腕を掴んで乱暴に起き上がらせると、ルビスは無表情のまま手を上げて、彼女の頬を打った。

「……なにすんだよっ!!」

「クリプトカリオンはどこ」

ルビスは低く言った。

「案内しなさい」

「い、嫌だよっ！　誰が」

ルビスはもう一度、今度は逆手をも使って、左右の頬を打った。

「血の近いあんたにはさっきのは効かなかったかもしれないけど。括り殺すことはできるわ」

喉許を締め上げられて、カラはあえいだ。ルビスは静かに、その紅蓮の唇だけを笑わせた。

「嘘じゃないわ。今のあたしなら、間違いなく、うまくできるわ」

6

不本意だったものもあるやもしれぬ。が、再会を喜びあっている暇はなかった。苫小屋に残るひとびとに火種を分け、からだの温まるニコロ茶を啜って少しの休息を取ると、まず神官が立ち上がった。行くを選んだ鳥とひととは、老人や幼女等に見送られながら、慌ただしく魔峰オーブに向かって飛び立ったのであった。

高山の結界に入ると、夜にかかってなおさら暗く垂れこめた空が、窯の中のように熱くなった。細かい塵埃が黒い雪のように降り注ぎ、舞っている。山の頂上附近に、ねっとりと重たげにあふれだした溶岩ばかりが、明々と輝いているのであった。

進んで行くに連れ、彼等はみな一様に寡黙になった。峰は高く、巨大に聳え、ここいらは既に魔界かと思われる気配であった。が、その不安を慰め励ましてくれるものがあった。気位高い不死鳥たちが今は避けられぬ運命を悟ったか、どこからともなく飛び来たっては一羽また一羽と隊列に加わったのだ……！　この援軍はありがたかった。彼等は感激し、互いに眼と眼を交わし合い、こころの内に歓迎の声をあげた。鳥たちはその役目を悟っているかのように、彼等に並んで、毅然と飛んだ。

雪尾根の彼方から来た、ひときわ長い尾羽根を持ち、互いに互いを庇いあうようにぴたり

と二羽並んで飛ぶ若いラーミアたちを、ディアルトは見知っているような気がした。あの日、今は亡き友と彼とを乗せて竜のところまで連れて行ってくれたものたちであるように思ったのだ。が、二羽の鳥たちは薄闇の彼方にあった。わざと彼から離れているかのように思えぬこともなかったが、確かめる術はなく、その猶予もまたなかった。

たちまち二十羽あまりにふくれ上がったラーミア群には、乗り手のあるもののほうが少ない。居合わせたは僅かに九人。神官、ディアルト、シフィル、チズルム、ミミイカ、それに小屋から新たに加わったマタ・マタ、エルセア、ケロデスの三人の男たちと、誰もが止めたのに結局はついて来てしまった少年ピパ・ピパがそのすべてであった。神官はディアルトの、シフィルがチズルムの後ろに共に乗っていた。

オーブの麓に近づくと熱気は一層強くなった。季節をひとつふたつ飛び越えて来たかのように、ここに雪はなく、からだはじっとりと重たく汗ばんだ。大地が、天が、四方八方が、低くくぐもった唸りをあげている。山肌のあちらこちらでは、ふつふつと沸き返る熱泥や岩の隙間が、嫌な臭いの蒸気を発散している。跳躍の前に全身を矯めた獣のように、息を潜めて、破壊の時満ちるを舌なめずりに窺っている山の姿を、彼等は感じた。熱かったが、悪寒を覚えていた。空気は悪く、視界は暗く、この巨大な存在の前に彼等はあまりにも矮小であった。

九人とラーミアたちは、山の眠りを覚ますのを恐れるように密やかに、まず一度遠巻きに

山頂附近を巡った。そして、翼豹の姿をしたものの指示に従って、一箇所に集まった。
「ここです」
ミトラの右拇指は、右手を伸ばし威厳をこめて断定した。
「こちら側の山壁の中途を穿つのです。そうすれば、溶岩はヴェリダヌスとは反対の方向に流れだします。流れながらゆっくりと冷めてくれれば、熱の力を宙に散らすことができます。海に向かわせてはなりません」
みなうなずいた。ラーミアたちも考え深げな瞳を、瞬かせた。
「けどよ」
経験豊かな石切り工であるエルセアが低く言った。
「こう熱くちゃ、降りられないぞ。まこと御山もとんだお転婆、触っただけで大火傷だ」
「ラーミアたちも、参っている」
額の汗を拭いながらミミイカも言った。
「もともと、山はうんと寒いもんだ。長いことこんな変な空気の中にいたら、みな死んでしまいますよ」
「……シフィル」
ディアルトは、水の長を見つめた。
「俺たちの出番だ」



「おう」

美貌の当主は、心得顔にうなずいた。

「待ちかねたぞ、大地の。我等五大家に連なるもの、伊達やおろそかにいと古き血を引いたのではあらぬと、谷のかたがたに今こそお見せいたさねばな」

「うまくやってくれよ」

「やらいでか」

「じゃあ……いくぞ……!」

ディアルトは顎を引き両手をだらりと下げ、半眼になって、その内なる黒竜を呼び覚ましてみた。竜はひどく浮かれている。大地の底に蓄えられ脈動する厖大な力が、今、彼の血にも同じように作用し、その精霊としての生命力をひどく高めているのだ。

（……岩よ、割れよ……）

ディアルトは念じた。その継ぎし血の正統を証明するかのような力を、今こそ真に目覚めさせんと欲した。

（地よ、裂けよ……山よ、吠えよ！

俺の手の中で粉々になってしまえ……オーブ!!）

「雨よぉっ……!!」

両手を広げ、雲を呼び風を集めるシフィルの姿が、『青の水鏡』に大写しになった。
「ああ！」
「どうしてあんなところに」
「いったい何をしようというの」
ボレリィ・アガシジィ・バケッティの三人は、互いに互いをひしと抱きしめた。そっくりに青ざめた顔を、しかし、三人とも、水鏡の中に映る遠い魔峰の光景から、片時も背けることはできない。
滝のように降り注ぐ雨が、あまりの熱に山肌にまで届かぬ。宙にあるうちに蒸散し、あたりをたちまち一面熱湯を零したような湯気で満たすを見て、長の三人の伯母たちは、みな焦れて、その胸を摑み髪を掻き毟った。が、シフィルは怯まない。気合いをこめて突きだす両手の先から降り注ぐきらら かな雨糸が、あとからあとから途切れもなく降りかかり、遂には灼熱する岩に露を宿し、窪みに溜まり、せせらぎとなって流れはじめる。
「まあ、まあ、あの子は……!!」
「素晴らしいわ。やったわ、やったわ！」
「見て、鳥が！」
巨鳥ラーミアに跨った男たちが、次々に舞い降りては、岩を摑ませ、飛び立ち、上空から打付けて崖を崩してゆくのを、彼女等は見た。

群れなす鳥の自由なものも、七色の翼や尾を翻しては山を切り裂き、掘り進む。降り積もった真っ黒い火山灰が、大地の若者の怒号に従って爆発するように砕け散る。そのようにして生じた泥を、砂利を、小さな岩を、土砂降りの雨がどろどろに溶かしながら押し流す。流れは次第次第に大きく太く勢いよくなって、岩を穿ち、尾根を削り、全く新しい谷を産もうとしているのだ。

　水のものと大地のものが、尊きものと卑しきものが、ヴェリダヌスの向こう側とこちら側のものが、妖精の魔法を使うものと鳥を操るものたちが……けして交わることのなかったものたちが、今、それぞれの全身全霊をこめ、それぞれの技の限りを尽くし、一致協力して、ひとつとなって、このイデーンで最も高き山を征服しようとしているのだ……!!

「ああ、あの若鳥、なんて勇敢なんでしょう。もうふらふらなのに……あんなに必死に」

「こどもがいるわ。ほら、今宙返りした鳥の上よ！　旨いわ。まるで、自分の手足のように鳥を操って」

「あ、動く！　あんな大岩が」

「きゃあっ」

「そこだっ。行けっ、頑張れっ！」

「……お姉さまがたったら……そんなに興奮なさって」

　姉たちと同じ言い知れぬ感動に胸を熱くしながらも、バケッティは眉を顰めずにいられな

かった。彼女はふと気づいてしまったのだ。この場面の中に息子アンジェリカスの姿がないことに。安心していいのか、いけないのか。彼女にはわからなかった。いつでもシフィルと共にいるはずだのに、アンジェリカスはいったいどこに行ったのか？

「巫女どのーっ。ラルバタスの巫女どのーっ!!」

パンカックスの滝を塞いだ大岩の上に途方に暮れたように立っていた月の巫女は、ラーミアの上から呼ぶ男の声に、紫の衣を翻して振り仰ぎ、ああ、と吐息を洩らした。

「アンジェリカスどの」

「お探ししました。建造中の船で聞いて、ようやくこちらに……うわぁ！」

谷から来た鳥使いが降下させてくれるその途上で、身軽に飛び降りてみせたアンジェリカスだったが、濡れた岩に着地しそこねて盛大に水を跳ね散らした。思わず花のつぼみの咲きはじめるようにかすかに微笑んだ巫女に、恥ずかしそうに顔をしかめながら、彼はしかし、急ぎ這い登って来た。

「笑ってる場合じゃありませんよ。ランデールは大変な騒ぎです。そんなとこに、あのお転婆は落ちるし……船もごっちゃごちゃだし。ほんとはあっちに残ろうかとも思ったんですよ。ひとが押し寄せてきてて、あの森のおとなしいひとたちなんかすっかり追い散らされちゃって。長老さまなんか具合悪くなっちゃって、気の毒だったらないんです。あのデブのマルラ

ンド婆ぁなんかカンカンで……いや、でも、その、とにかく、太陽の神官どのに、きっぱり言われておりましたものでございますから……」

度を失うあまりあまりにひどい口調で喋ってしまったことに気づいて、アンジェリカスはもぐもぐと口ごもった。

「よう来てくれました」

巫女は静かながらもしっかりとした声で言った。

「ご覧なさい、レピディオの水かさがどんどん増えているのです。このままではあふれます」

「おやまあ。この岩のせいではないのですか？　こいつが退けば、川ももとどおりになって運河に流れこんで、うまくいくとか？」

「いいえ。それだけではありません。岩は、予想外でした。それでなくとも、地下に潜んだ水が、オーブの熱と揺れによってひどく押されているのです。思ったより、ずっと速く。地底の川とレピディオがこのまま一気に氾濫すれば、ランデールは沈みます」

あっけにとられるアンジェリカスの手を、不意に強く握りしめると、巫女は早口に言った。

「アンギス湾に水を満たしましょう。そうすれば船は動きだせるでしょう。しかし、あまりに激しい流れであれば、波にさらわれてしまう。やがては、大海の彼方から氷山も押し寄せて来ます。もう時間がありません。あなたは、この岩を流してしまってください。私はそれを水門で、きっと食い止めますから。では……頼みますよ！」

「あっ、ちょ、ちょっと待っ」
紫色の煙のようなものになって、巫女は消えた。
「……こいつを流せ……って？」
アンジェリカスは頭を掻き毟った。何か大切なことを忘れているような、ちりちりと不安に胸が焦げるような感触があったが、慌ただしさは彼から思考能力を奪った。なんといっても巫女は『時間がない』と言ったのだ。
「ええい、どうせわたしは分家もの。長等の言いつけには従うのがさだめ。言われた通りにしてやろう！」
頭上で旋回し待ってくれているラーミアのことなど、アンジェリカスはもうすっかり忘れてしまっていた。
「……水よ……聖なる湖よ……！」
大岩の上で印を結びながら、彼はその全身を貴湖レピディオと一体化させ、湖の大いなる力が流れこんでくるに任せた。
「……ここな邪悪なる大岩、退かしてしまえ……さあ……さあ……さあ……!!」
轟音を立てて湖に渦が巻き、岩を押した。岩は揺れた。岩は激しく震えだした。アンジェリカスは安堵して、その尊い従弟にも似た美貌にこの上もない至福の笑みを浮かべた。分家生まれの自分にもちゃんと、役目を果たすことができたのだ。……が、次の瞬間、彼の青い

目は限界まで開かれた。

（こ、こ、こいつが流れたら、俺はどうなるのだ!?）

「きゃぁああああっ!!」

「な、なんなのぉっ――」

唐突に押し寄せてきた濁流はちいさなロリカリア湖を氾濫させた。水は瞬時のうちに水晶宮を飲みこみ、その暗い顎の中に、イデーンで最も美しい建物を、その玻璃の骨格を、無雑作に噛み砕き、押し潰し、流し去った。『青の水鏡』に移る魔峰とひとの闘いにすっかり見とれていた三人の女たち、長の伯母である気高い婦人等には、何が起こったのかを理解する間もなかったのだった。

もし、彼女等を襲ったのがただレピディオからあふれた水であったならば、かりそめにも水を治めるポリプテルス家の女たち、溺れることなどけしてなかったはずであった。が、この時の水は、石や泥を大量に含むひどく濁ったものだった。アンジェリカスによって大岩の栓が外されたとたんに急激に水位が下がったレピディオに、オーブ山系からヴェリダヌスにかけて潜んでいた途方もない量の伏流水と、その水に溶かしだされた土砂とが雪崩を打って押し寄せた。真空化したレピディオに吸引され、山の高みから落ちてくる加速力が加わって、濁流は何者をも逃さぬ速さと活力を得た。ロリカリアに逸れたのは、そのほんの一部分だっ

た。レピディオからロリカリアまでの間に再び狭隘なる地下通路を潜り、僅かながらも弱められたものに過ぎなかったのだ。が、それは、それでも、充分な威力を持っていた。一つの湖を隔てていた地盤も、やがてあえなく決壊し果てた。

弾丸のような礫が、砕けた魔法の玻璃の破片が、速度のために岩よりも堅くなった水の壁が、無抵抗な女たちを、打ち、突き刺し、押し潰した。それはいつまでも弱まることはなかった。

（……あ……アンジェリカ……ス……どうか、無事で……）

薄れゆく意識の中、最後の吐息の泡と共に、バケッティは懸命に祈った。だが、彼女等の最も親しんだ神殿、濁流に揉まれるラルバタスの巫女は、今そこにはいなかった。そして、ラルバタスそのものもまた、彼女らを飲みこんだのと同じ水に、今や沈もうとしているのだった……。

こなたランデール郊外、アンギス湾沿いの方舟建造現場には、運河の町から逃げて来たひとの濁流が、狂気の雑踏が、無名の群衆の怒号と悲鳴が、波のように押し寄せては砕けていた。

「乗せてくれ……入れてくれ頼む！」

「ちくしょう、汚ねぇじゃねぇか」

「ミクロレピス！　友達じゃないか。なんで俺を入れてくれないんだ」
「お願い……お願い、せめてこの子は。この子だけは乗せてやって」
「婆あ、遠慮しろ。おまえにゃどうせ、じきお迎えがくるんだからよ」
　船は最後の仕上げにかかっているところだ。一つの大家の地力を駆使して急ぎ整えているといっても、今このように大勢の暴徒に無遠慮に蹂躙されてはすべてが無駄となってしまう。長老の命によって素早く船の楯となったは、疲れ果てた森と金の一族たちであった。建造作業から回されて来た彼等は最後の力を振り絞って、船のぐるりを囲み、けして越せぬ生け垣を作った。棘だらけの鉄壁を築いた。生き延びたいと願うものたちの絶叫に耳を塞ぎ、互いに争って血を流す隣人であったものたちの無惨にして醜悪な姿に涙を飲みながら、こころを鬼にして群衆を拒んだ。あるものは砂岩に爪を食いこませ、あるものは波に胸まで浸かりながら、あとからあとから押し寄せてくる逃亡者たちの怒濤に立ち向かった。大地に根を下ろした頑丈な樹木が、刃物の棘を持った堅い金属の板が、しかし、数の力に揺らいでいる。つき崩されるは、時間の問題と見えた。
「……なんという浅ましさだろう……」
　慌ただしい作業の続く甲板に立って、押し寄せる人波を見遣りながら森の長老は蒼白な顔を厳しく引きしめてつぶやいた。
「男が女を押し退け、いいおとながこどもを踏みつけにしておるではないか……これが天の

恩寵高きイデーンか。恵まれし精霊等のほんとうの姿かのう……」
　老人を支えて立った雪猫の精は黙して語らなかった。ただ、彼の背に回した腕に、ギュッと力をこめた。
「長老さま」
　ふと、どこやらから駆けて来た少年が、息を切らしたまま報告をした。
「底板が張り上がりました」
「こちらは帆桁の準備が整いました。今、艤装にかかります」
「そうか」
　老人の白い眉が、乾いた口許が、かすかに微笑んだ。
「ありがとう。今少し、頼むぞ」
「はい！」
「はい……がんばります……！」
　たちまちまた戻ってゆく少年等の背を見つめながら、老人は重く吐息を洩らした。
　完成次第、出発しなければならない。それには、乗せてゆくものと、残すものを決めなくてはならないのだ。彼は争いを見たくなかった。酷い選択などましてしたくなかった。が、今はそれこそが、長と呼ばれるものに課せられた使命なのだ……。

　そのころ。レピディオよりあふれだした濁流はネリル大河のうねった筋を一直線に変えながら、白波を蹴たてて驀進していた。その波頭の上には、時滝をせき止めていたあの大岩が乗って、ごろごろと回転しながら運ばれていくのだった。

　ランデールの端、運河の水量を調節するための小さな水門の上に、巫女は、静かに立っていた。紫色の衣を靡かせながら、たったひとりで立っていた。彼女の耳に、やがて、遠い唸りが届いた。怒濤の吠える低い、絶えまない、恐ろしい、声が届いた。

(……天にあられる我等が父よ……)

　巫女は祈った。

(わたくしはあなたの左拇指。その真実の姿を……お力を……今こそこの身に……!!)

　水が見えた。水は天までも届くかと思うほどにふくれ上がっていた。巫女など、あっと言う間に飲まれてしまうに違いなかった。が、巫女は動かなかった。水は迫った。波濤から飛び散る飛沫が彼女の衣を一瞬に濡らし、その清らかに細いからだの線を浮き上がらせた。

　巫女は両手を天に伸ばし、全霊をこめて叫んだ。

「……ミ・ト・ラ……!!」

　鉄砲水がランデールを襲った。押し寄せた津波のような濁流は、迷走する運河を、街路を、そして橋を浸して走り抜けた。それは町に留まっていたひとびとを、そしてアンギス湾に達

していたひとびとをも容赦なく薙ぎ倒し、飲みこみ、溺れさせて運び去った。
船にいたもの、幸運にも既に辿りついていたもの、あるいは森側の高台にあったものたちは、見た。長老の許可と、幼いものたちを優先してくれるようにとの懇願の声を聞いて、たちまち我先に救いの船の客たらんと殺到していた狂気の群衆を、真っ黒い流水の壁があたかも塵埃のように一掃するを。そこばかり鮮やかに白い波頭が惑う彼等をひと飲みにし、あっと言う間に、そのまま海の彼方に流し去るを。怒濤の巨大な顎の間に、崩れた建築物の破片が、折れた樹木が、動物が、そして誰かの手や足が、次々に見え隠れしては消えた。
必死の力で舷側にしがみついたもの、あるいは他人の頭を踏みつけにしても船の外壁を駆け昇って来るものたちもあった。甲板や船底にいたひとびとは、どんな悪辣なる手段で辿りつくものたちをも、分け隔てなく、ひとりでも多く助け上げようとし、はしごを下ろし、窓から手を差し伸べ、綱を垂らしてやったが、寄せる大波にできたての船はひどく揺れ、底に側にぶち当たるさまざまな物に傷つけられ、悲鳴のような音をたててきしんだ。まだ帆を張っていなかった巨大な桁が甲板を薙ぎ払った。昇って来ようとしたものたちの巻き添えになって落ちるものも続出した。
その身を防護塀となして踏ん張っていたものたちもまた頭から土砂流を浴びた。あるいは傷つき、あるいは倒れた。が、船を守るために、彼等は互いに互いを支え合い、手を繋ぎ、魔法力によって高められた強い鐶となっていた。水を飲んだものも、息が続かなかったもの

も、何かに打付かって昏倒してしまったものも、みなその手をけして離しはしなかった。水が静まり、引いて行った時、ずたずたになった彼等の鎖は、それでもまだひとつに繋がったままに、その姿を現したのであった。命長らえた者は半数に満たなかったが、彼等はみなその任務を全うしたのであった。

そして船は。

彼等の望みは。

僅かに傾ぎながら、今、ひっそりとパンガシアノドン・ギガスに浮かんでいた！

ぼろぼろになりながらも生き延びた幸運に安堵の胸を撫で降ろしたひとびとは、まだ知らなかった。彼等を襲った山津波は、それでもごく一部であったことを。かつてランデール水門のあった場所に、大岩ががっちりと塡まって、大量の水と土砂をせき止め、全滅から救ってくれたことを。偉大なるネリルが岩に阻まれてその流れの大半を直角に曲げたことを。それらがみな、ひとりの巫女の奇跡のような力のおかげであったことを……。

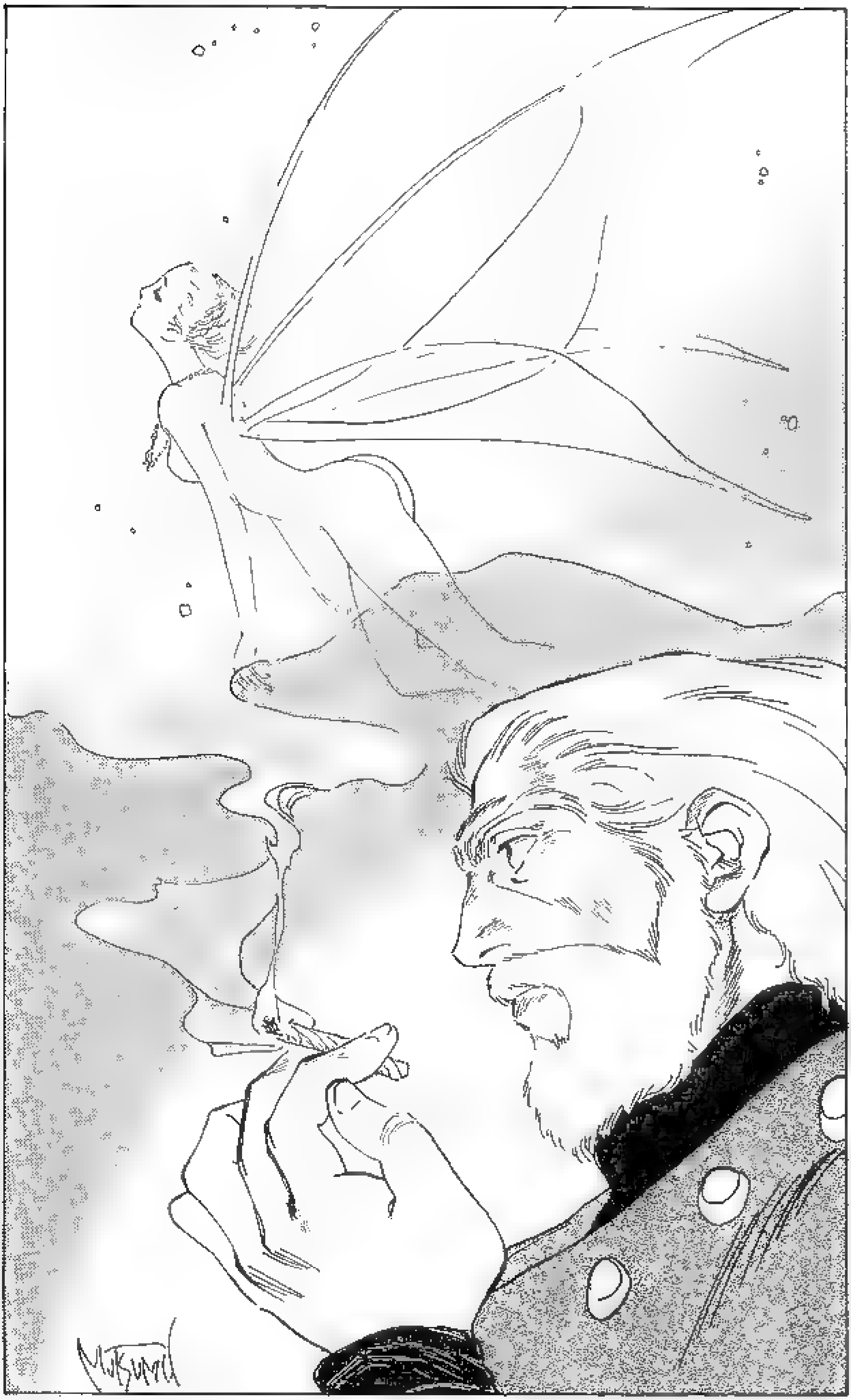
その時。

魔峰オーブに、第二の噴火が起こった。

グアモン・セミアクイルスは窓辺に向いて座っていた。その膝には、妻が小さな頭をもた

せかけて、何か小声で歌っていた。
カリクティス家の当主は、黒い闇の彼方、魔峰の方角に、仕掛け花火のように吹き上がる巨大な炎を見た。彼は唇を歪めた。それが彼の微笑みだった。
パピル煙草の最後の一本に、彼はいつものように指先で火をつけようとした。その時、窓から、遠い魔の山から放たれた小さな礫が飛びこんできた。岩は彼の肘掛けの脇に落ちた。熾火のように、まだ燃えていた。グァモンは腕を伸ばし、その岩を拾った。
「……ち……！」
思わず舌打ちする彼に、妻が驚いたように歌を止めた。だが、煙草にはうまく火はついた。岩をそのへんに放り出すと、グァモンは妻の髪をそっと梳いてやった。安心した妻は童女のようににっこりして、また彼の膝に頭を載せ、続きを歌いだした。
グァモンはなんとも旨そうに眼を細めて煙草を吸いこみ、長々と吐きだした。左右不揃いに開いたその瞳が、飛んでくる炎の雨を見たが、彼は椅子から動かなかった。煉瓦城の屋根に、庭に、熱い雨の当たる音が轟いた。
「……あ」
妻が急にぱちぱちと瞬き、遠くを指さした。
「ね、鳥。鳥よ!!」
「むう」

一羽のラーミアが、城を越えて山の方向に飛んでゆく。
(……誰だ……?)
当主は眉を顰めた。
(……まあ、いい。誰でも)
その間に、アミアカルバは窓辺に駆け寄っている。妻は、憧れをこめた瞳で、熱心に鳥の姿を追いかけた。やがて、鳥は見えなくなった。振り返った妻は、しょんぼりと唇をとがらせている。何か言いたそうにうわ目使いに夫を見て、もじもじした。
「……行っておいで」
グアモンは低く言った。
「ほんと? いいの?」
夫は煙草を咥えたまま、小さく肩をすくめた。
はにかんだ微笑みを弾けさせると、アミアカルバは急に意を決したように両手をかけて、その汚れてぼろぼろになったドレスを一気に脱ぎ捨てた。胸を抱えこんで少し震えると、彼女の華奢な肩胛骨の間から、くしゃくしゃと丸めたような物が湧きだした。それはみるみるうちにぴんと張って、四枚の、透き通った翅翼となった。妻は、美しく儚げな夢のような生き物の姿になって、振り返った。
「さようなら、あなた」



彼女は言った。炎一族で最も慎ましい婦人である、いつものアミアカルバの声に戻っていた。その瞳は、その翅同様、薄赤く透明だった。

グアモンは肘掛けにもたれたまま、小さく片手を上げて、言った。

「さらば、アミア」

アミアカルバは窓に登ると、飛んだ。

炎の雨が、窓いっぱいに降り注いでいる。

「……さらば」

グアモンはつぶやいた。

「さらば、イデーン」

何百年もこの地にあった煉瓦が、ばらばらと崩れかかってきた。この城の最後の主人は、もう吸えないほど短くなった煙草を、そっと、投げた……。

7

「……やった……!!」

脇腹に開いた傷口のようなところから、明々と燃える溶岩と、おびただしい火の玉と熱気とを吹き出す魔の山に、三十羽のラーミアと九人の男たちは歓声をあげた。

「うわあ、でっけえ花火みてぇだあ」
「すげぇなあ……うまいこと逃げだせて良かったぜ」
「これ、ほんとに俺たちがやったんか？　嘘みたいだ」
誰もが疲労困憊し、多かれ少なかれ火傷を負っている。みな十歳も年を取ったようだった。が、その瞳は誇らしく輝いている。男たちの顔は炎の照りかえしにまるで谷猩々のように隈取られて、どれも満足そうだった。猫族の耳を持つ少年と、ディアルト以外は。
「……いけない……まだ熱が籠っている」
太陽の神官はつぶやいた。
「思ったほど大きな穴が開けられなかった……おかげでぼくらは死なないですんだけど……これで、どれだけの時間が稼げるだろう」
「……ああ。どうも妙だ」
溶岩の朱赤い色を半眼の瞳に宿しながら、ディアルトが夢見るようにつぶやいた。
「炎の精力が、かえって高まったような感じがする。大地の底で、熱い泥が向きを変えてる……俺の黒竜が灼熱して真っ赤になってしまうくらいの熱さだ。……うっ……この熱は、海に……そう、パンガシアノドン・ギガスに向かってる。氷山の底近くまで、熱脈が続いている……？」
「戻りましょう！」

神官は言った。
「ここでできることは、もうありません。急いで、船に向かいましょう」
「そうだ。……行ってくれ」
ディアルトは頭を振り、カッと眼を開いて現実に立ち戻った。
「みんな、早く逃げるんだ。お爺や女たち、小屋に残ったひとたちを連れに行ってくれ」
「そういうそなたはどうする気なのだ？」
「俺は……」
鋭く問いかけてきた相手がシフィルだということにふと気づくと、ディアルトは急に肩の力を抜き、その瞳に真摯で静かな決意をこめて、低く言った。
「俺は大地の長の血を引くもの。溶岩も熱礫もなんでもない。今少し、留まってみる。なんとかこいつが抑えられないか、最後までやってみたいのだ」

……広場に、熱く乾いた風が吹いた。
濁流に洗われたランデールの街には、もはや動くものはほとんど残っていない。
紅蓮に燃える髪の少女と、隻眼の青年は、遠く向かい合って立っていた。過ぎた時の中のある時点では、婚礼の契りを結ぶことになっていたふたりだった。
やがて娘が統率するべく定められた民であり、同時に長い間男のほうの血盟の仲間であっ

たものたちは、どちらに肩入れするをも憚った。この場から逃げだすも望まなかった。彼等はみな遠くひかえ息をひそめて、ふたりの様子をじっと伺っているのだった。

青年の手の中には、一本の長剣があった。ひとつは、炎十字の剣と呼ばれるカリクティス家の家宝であり、今ひとつは、柄も刃も闇のように黒い、大地の剣と呼ばれるものであった。

「……どちらを取るね、ルビス」

低い声で、男は尋ねた。

「ま、俺を倒せば両方おまえのものだが。……どちらを使うね？」

ピパ・ピパは迷っていた。悩んでいた。

（ディアルトはああ言ったけど……たったひとりで残るなんて無謀だ。とうちゃんはいつも言ってた。山には、ひとりで行くもんじゃないって。どんなに自信があったって、絶対にひとりで行くもんじゃないって……！）

振り返り、振り返り飛んで来た彼は、みなから少し遅れていた。

「おい！」

編隊の先頭をつとめていたマタ・マタが怒ったような声で呼んだ。

そのとたん、ピパ・ピパのこころは決まった。

「俺、戻る！　ごめん!!」

「ば……バカな！　おい、こらっ!!」
「待てよっ!!」
ぐずぐずと列を乱すラーミアたちを置き去りにして、ピパ・ピパの一羽はみごとな宙返りを決め、陽気に手を振りながらもう遠ざかってゆく。
「……あの糞ガキ……男になったたな」
「親父の若いころに、ちょっと似てるよな」
谷の男たちは口々に言いながらも、未練を断ち切り、しっかりと態勢を立て直した。彼等には、まだ役目があった。谷に残ったひとびとを船まで連れてゆく重大な役目が。
「あの男、ずいぶん慕われておるのだな」
拗ねたようにシフィルがつぶやくと、チズルムが笑った。
「いんや。他所者だ他所者だって、さんざんひでぇ目にあって来たんですぜ」
「しかし……」
振り向いたシフィルは、眉を顰めた。
ふと、飛んで行く鳥が見えたような気がしたのだ。ピパ・ピパの行った方角ではなく、ヴエリダヌスを越えた向こう側から。
（誰か、他にも魔峰に？　……なぜ？）
だが空はあまりにも暗く、炎をあげる山の前にすべてはシルエットになって、はっきり見

えなかった。
「気のせいか……？」
シフィルは、前に向き直った。
剣の稽古をするのは好きだった。女にはもちろん、たいていの男には負けぬつもりだった。力はなくとも、気魄があったから。
が、クリプトカリオンは、その技量に於いても度胸に於ても、彼女自身にいささかも遜色がない。いや、遥かに勝っているやも知れぬのだ。
（でも……負けるわけにはいかないのよ……！）
ルビスは唇を噛んだ。

山頂の火口は、今はその役目を脇腹の第二噴火口に明け渡したことを示すかのように、くっきりと深く凹んで、時折小さな炎や火山礫を飛ばすばかりに静まりかえっている。
ディアルトは巨鳥を降り、その縁に立っていた。少し首を伸ばして覗きこむと、遥か下方に、真っ赤に焼けた泥流が見えた。
炎は衰えていない。むしろ、より活発になっているかのように見える。まるで、生きているもののように、どこからか不思議な力を得ているかのように、とくん、とくんと脈打って、

今にも爆発しそうに見えた。

だが、彼は不思議と恐怖を感じなかった。

炎は、懐かしかった。炎は、愛しかった。彼に、彼の愛する娘を思わせた。オーブの内臓を見ているのに、まるでルビスの生命を、燃えるこころを、眼にしているような気がして、彼は思わず微笑んだ。

少しばかりまぶたを伏せると、これまでのいつよりも激しく戦き騒いでいる、内なる黒竜を感じる。それはあまりにも生き生きしているので、わざわざ意識して気を集中しなくとも、その喜びはしゃぐような動きがはっきりとわかった。竜もまた、炎に呼応するかのように、その生命の最後の時をひときわ輝かせているのかもしれない、と、彼は思った。

(俺は、大地の竜だ。ルビスは、炎だ)

(俺たちが、オーブなのだ)

その感触は、悪くなかった。

クリプトカリオンの手の中で、炎十字の剣が、ぼうっと光りはじめた。光は、彼の気を得て、だんだんに強く、明るくなって行く。眩しさに、もう見つめていることができないくらいだ。

ゆっくりと彼の描く弧が、そのまま光の軌跡となる。

（……大地よ。オーブよ。……故郷であり、俺たち自身である魔の山よ）
ディアルトは一心不乱に祈った。その黒竜を溶岩の海に潜らせ、大地の底に遊ばせながら。
（荒ぶるな。激するな。今しばし、罪なきひとびとが安全に船出を済ませるまで）

一閃！
満身の力と気合いをこめて打ちかかったルビスの黒剣を、クリプトカリオンはあっけなく受け流した。ふり払われた勢いでルビスは飛んだ。どうにか空中で姿勢を整えたが、地面についた足首がぐきりと捩れ、横ざまに滑った。
砂塵が舞い上がった。
「……女にしておくのは惜しい腕だ」
炎の剣の切っ先をぴたりと彼女の眉間に据えながら、クリプトカリオンは間合いを詰めて来た。
（殺られる！）
ルビスは思った。
（ああ……殺される……ロト……ロトごめんなさい!!）
だが、クリプトカリオンは遥か向こうで立ち止まった。

「立て」
彼は言った。
「転んでる女を切るなぞ、刃(やいば)の汚(けが)れよ」
素早く横転して起き上がると、ルビスはもう一度、構え直した。両手でなければとても持っていられないほど重たい、大地の剣を……。
黒竜がぴくりと動き、怪訝(けげん)そうに首を傾(かし)げた。動きにくい。地熱(じねつ)が下がりはじめているのだ！
ホッとして、ディアルトは僅(わず)かに眼を開いた。
そして、そのまま刮目(かつもく)した。
「……へへーん。どうした。お昼寝(ひるね)の時間かい、兄弟」
火口の外輪の、ちょうど対角線に当たるところに、黒い巻毛の男がいる。その腕のなかに、もがくピパ・ピパがいた。ぐるぐる巻きに縛(しば)られた、ンドゥロの姿もあった。
「わざわざ巨鳥(おおとり)使いを捜(さが)しだして、ようやくここまで来たんだ。ちょっとばかり、この俺の相手もしてくれないかな……？」
と、ダトニオイデスが言った。

ルビスは既に血塗れだった。深手はない。負わされたのは、皮一枚を断つほどの浅い傷ばかりだ。が、血は、柄を握る手を滑らせ、眼に流れこんで集中心を欠く。気合いだけで闘ってゆくには限度があった。それはルビスにもよくわかっていた。

しかも、クリプトカリオンはまだ本気にもなっていないのだ。ただ、ガムシャラに突っこんでゆくルビスを、からかうように、ひらひらとかわしてみせるばかりなのだ。

（殺す気はないのかもしれない）

（わたしが、這いつくばって許しを乞うのを待っているのだ）

（いや……もしかすると）

（彼はまだ、わたしを愛しているのでは……？）

「なぜだ、ダトニオイデス！」

突きだされた短剣の下をかい潜りながら、ディアルトはうめいた。

「なぜ、今、俺たちが闘わなければならないんだ!?」

「うるせぇ！　この裏切りものが……」

「裏切り？」

「そうだ。もう終わりだ。もうどうでもいい。だが、おまえだけは許せねぇ。おまえが、とっととコリドラス家にさえ戻ってくれていたならば、こんなバカなことにはならなかった！

くたばる前に、どうしてもおまえを殺す。殺らなければ、とてものことに成仏できねぇ」
「家に戻ればだって……？　何をいまさら」
あっけにとられるディアルトを突き放すと、ダトニオイデスは笑窪を刻みこんで、ニヤリと唇を歪める得意の顔をした。
「……おまえ、女が、できたんだってな。おくてっぽいから心配してたが。カリクティスの娘は、そんなにいいか。あそこもカッカと燃えてたかい？」
「……なにを言う……!!」
山が揺れた。
ディアルトはハッとした。ここで闘えば、コリドラス家の双頭である彼等の発する凄まじい殺気に、大地が反応してしまう。ひとたび落ち着きはじめていた溶岩が、今や、ぶつぶつとまた沸きたちはじめているのだ……！
血の味のする唇を無意識に舐めながら、ルビスは素早く考えを巡らした。
（相打ちになるような踏みこみ方をすれば。あるいは。あるいは、クリプトは、ほんの一瞬でも、躊躇してしまうかも……）
（……だとすれば……）
クリプトカリオンは笑っている。ひとつっきりになった瞳で、笑っている。

（甘いな！　我ながら）
ルビスは頭を振った。
（いいわ。共倒れになってもいい。……この一撃に賭けてやる！）
「待て……待てダトニオ！　わからんか、今俺たちが動揺すれば、山がまた爆発する!!」
「そいつぁ派手こくって結構じゃねぇか」
「いっちょ、世界を巻き添えに兄弟心中と行こうじゃねぇ」
ダトニオイデスは肩をすくめた。
「やっちゃえ、ディアルト！」
ピパ・ピパが、足を蹴りあげ、頭を振るって叫んだ。
「そんな奴、打ちのめしちゃえ！　……うわぁっ」
「ばか、危ない！」
滑り落ちそうになったピパ・ピパを見て、ディアルトが思わず気を逸らした。その一瞬の隙を、ダトニオイデスは見逃さなかった。躊躇いもなく、突進した。
「でやぁああああっ!!」
「……うっ!!」
「でぃ……ディアルトぉおっ!!」

少年の悲鳴が、火口に木霊した。

（おっと。どうした。眼の色が変わったな、ルビス）

クリプトカリオンは、炎十字の剣の切っ先をじりじりと僅かに横に逸らした。

（ならば、そら。隙をやろう。突いて来い。本気で相手をしてやるから……！）

「……はあっ!!」

必殺の気合いを借り物の黒剣にこめて業火のように走って来る少女を、彼は待った。

五芒星の徽が、カッと燃えた。

その時。

「止めてぇっ！」

狭まった視野の中に不自然な動きがあった。思わず彷徨わせた目の端で、狐火の精が泣きじゃくりながら、彼等の間に飛びだしてくるのを、彼は見た。

「無理だよ。あんたは、あんたは、そのひとを愛してるんだから……そんな勝負、哀しすぎる。止めておくれよぉっ!!」

「……来るな、アリナあっ……!!」

むしゃぶりつく女のからだを脇に払ったその刹那、大地の剣が、彼の胸板を貫いた。


Mutsumi

刺された瞬間ディアルトは、黒竜が凄まじい勢いで暴れ回るのを感じた。オーブの底の熱泥が星の誕生する時のようにカッと燃え上がり、遠い海に向けて流れ出すのを知った。

(ああ……しまった!!)

それは刺し傷よりもなお、彼の胸を痛めた。転がり回って次の攻撃をかわしながら、ディアルトは地底の竜を走らせた。駆け抜ける炎を、その腕に抱きとめようとした。がもはや、遅かった……。

(この……このわからず屋め!)

カッと見開いた眼に、だが、彼は信じられないものを見た。

ダトニオイデスがのた打っている。その全身を、なにやら赤いものが覆っているのだ。

「ど……どうしたんだ、ダトニオ!?」

返り血かと思った。自分はそんなに血を流したのだろうかと、胸に手をやってみて、ディアルトはハッとした。

ブラック・オーブがない。胸の隠しに納めておいた、天の黒金剛石がない。

「……あれを切ったのか!!」

だから、だから、その一撃は、心臓にまで届かなかったのだ……!

「クリプト……クリプトったら……やだ。やだよ。しっかりしてぇえっ!」

反狂乱になって五芒星の男にしがみつくアリナを、炎一族の男たちが無言で引き離し、連れ去った。
「……バカな……女だ」
クリプトカリオンは、薄く笑った。
「あれで、俺を、味方した、つもりなんだ……まだ、おおっぴらにおまえを贔する奴に邪魔されるほうが、マシだった……焦ったぜ……」
「貰っていくわ」
大地の剣の柄に手をかけて、ルビスは言った。
「これがあれば、あのひとは魔峰オーブを切ることができるかもしれないから」
「ああ……」
ひとつ残った目をさかんに瞬きながら、クリプトは言った。
「こいつに刺されるのも、これで二度目だ……つくづく縁が……ありやがる」
「抜くわよ」
「……三度目を、くれぬか？」
ルビスは剣を抜いた。そして、もう一度無雑作に振り下ろした。
最後に、彼の唇は、かすかに動いた。『本望だ』と、言ったかのように。
だがルビスは無我夢中で駆けだしていたので、それを見はしなかった。首にかけた六つの

オーブに、彼女は祈った。
(ラーミアを……ラーミアを寄越して。早く……!!)

「お、おいら、お爺から聞いたことがあるよ」
駆け寄って、ピパ・ピパが言った。
「黒金剛石を切った奴には、恐ろしい呪いがあるって。そいつを浴びた奴は、血に飢えた化け物になって、世界の終わりまでも悪さの限りを尽くすって……」
「なんだって?」
振り返った彼等は見た。
ダトニオイデスであったものが、のそりと立ち、そのまま、ずんずんとふくれ上がっていくのを。赤黒い血のような粘ついたものを全身からしたたらせながら、怪物は両手を上げ、こちらに伸ばした。その指先が融けだして、まるで差し招くようにしたたった。
「う……うわぁああ! 来るよ、来るよ!!」
どろどろに融け、沸騰するかのようにぷつぷつと泡だっているその顔に、ぽっかりと小さな風穴が開いた。それは、まるで、笑窪のように見えた。
「……逃げろ、ピパ・ピパ! ンドゥロ!!」
ディアルトは少年を男のほうに押しやり、口笛を吹いてラーミアを呼んだ。

「あんたは!?」
ンドゥロの問いに、
「ほうっては行けないよ」
ディアルトは肩をすくめた。
「そんな怪物はきちんと退治しなきゃ。おまけになににしろ、こいつは従兄なんだからね」
「だって、どうするのさ、そんな、あんたも怪我だってしてるのにっ!!」
ピパ・ピパが喚いた。
「火口に落とす」
ディアルトは振り向かなかった。
「こいつが入ったら、ひどく爆発するかもしれない、だから早く、できるだけ遠ざかるんだ。そして、みんなといっしょに、すぐ船に向かえ」
「だって、じゃ、あんたはどうなるんだよ」
「急げ。熱風が氷山に向かっている。今にもパンガシアノドン・ギガスが溶ける……出航に間に合わなくなるぞ!!」
「だって、だって、よぉ!!」
ンドゥロが乗って飛んで来たラーミアの足に摑まえられて火口から離れながら、ピパ・ピパはもがき、叫んだ。

「あんた、ルビスに、約束したじゃんかよぉ！　いっしょに、いっしょに行くってさぁ！」

ディアルトは唇を噛んだ。瞳が揺れた。その瞳の中に、ダトニオイデスだったものの痛ましい顔がふくれ上がった。

「……借りは、返さなければ」

彼は低く言った。

「俺たちのしでかしたことの始末を、つけなければ。わかってくれるよね、ルビス？……」

「……ロトぉぉぉ!!」

大地の剣を振り上げながら、ラーミアにうち跨ったルビスは魔峰を目指した。

「……氷が、動きだしたの—」

森の長老は、遠い水平線を見つめた。そこは、蠢いていた。音もなく、遥かに遠く、氷山がほころびてゆくのであった。

「流れて来るんでしょうか？　怖いわ—」

老人の肩を支えてやっているディディプリス・ディアンドラが心配そうに言った。

船は、不安定に揺れている。水位が上がったおかげで、ランデール運河の出口まで来ることができ、そこで舫って待っていたのだ。しかし、街はもはや死んだように静まりかえって

いる。船を目指して来るものの姿はなかった。
老人はうなずき暫く黙って何やら考えていたが、やがて、彼女の肩から手を離した。
「出発しよう」
長老が片手をあげると、出航合図の声があがり、木霊のように船じゅうを伝わっていった。舫い綱が解かれ、漕ぎ手が働きはじめる。船はゆっくりと動きはじめた。舳先の切る海面はどんよりと暗く、白く引く尾は別れを惜しむように陸にまで綿々と儚く続いた。甲板にいたひとびとは、みな言いようもない思いを持って、故郷の街を眺めた。これが、最後であると、誰もが知っていた。
「……儂はまた生き残ってしまったの」
自嘲するように老人がつぶやいた。
「もう、よいと言うに……ミトラさまはそうは思ってくださらぬかの」
美尾猫の精は黙って老人の背に触れ、そっとそれを庇った。ふたりは、船室に引きこもるために歩きだした。
と。
「……あ……見て！」
「おい。なんだあれは？」
「鳥だ……ラーミアだ!!」

船室に入ろうとしていた長老ミラルダは、背後にあがったひとびとの叫び声に蒼白な顔をゆっくりと振り向かせた。

「おーい、待ってくれ！　乗せてくれえい！」

巨鳥に乗って追いすがって来た者たちの異様な装束・風体に、精霊等の中には露骨に顔をしかめるものもあった。

「『追放されたもの』たちじゃあないか？」

「やーね。ずうずうしい。なんであいつらまで乗せてやらなきゃならないのよ」

騒ぐひとびとに、長老はうなだれた。

（この期に及んでもなお、争う気か）

その時。ひときわ凛とした声が、空から響いた。

「頼む。場所を開けてくれ！　このものたちを、受け入れてくれ」

「うわっ。シフィルさまだ！」

「きゃあっ、なにしてるの、早く、早くったら、退いてあげてよっ」

水の若長に対する思いは、まだ変わっていなかった。まして、ここに今集うものの半数以上は自分らも、他人を押し退けて乗りこんで来たものたちである。彼らは、おずおずと移動して、巨鳥たちの着地できるだけの場所を作った。

最後に甲板に降り立ったのは、老人だった。彼はランデール市民の好奇と不安の視線を平然と睨み返すと、ここまでその身を運んで来てくれたラーミアの埃だらけの首ねっこを愛しげに叩いた。
「いや、すまんかった……疲れたろうにの。ありがとう、ありがとう」
鳥は甘えるように老人の手に頬を擦り寄せたが、ふと、何かの音でも聞きつけたかのように顔をあげ、短く、くうっ、と鳴いた。
「どうした……？」
疲れた翼を休めぐったりとしていたどの鳥も、今はみな緊張した様子で魔峰の方角を見つめている。老人は怪訝そうに鼻に皺を寄せたが、躊躇う鳥に、言ってやった。
「……そうか。行くがよい」
鳥は賢さのにじむその眼を辛そうに瞬かせたが、老人がなおもうなずくと、決心したように嘴を擡げ、甲高く叫んだ。と、一、二十羽あまりのラーミアたちが、いっせいに翼を広げ、ふわりと舞い上がったのである。遠巻きにこれを見守っていたひとびとは、みなほうっとため息をついた。
「彼等も乗せていってやれば良いのに。何故、いまさらどこに戻るのです？」
シフィルが進みでて問うと、賢者と呼ばれる老人は剽軽に肩をすくめた。
「知らん」

「しかし……なにやらお話し合いになっておられたではありませんか」
「あれらの考えることなど、わかるもんかい。だが、ラーミアたちはなにしろラムプロローグスに恩があるからな。おそらく、七つのオーブが動いたのじゃやな」
「オーブとは……つまり首飾りが……ルビスが、ということですか？」
「ルビスさまは！　ルビスさまはごいっしょではないんですか？」
人垣を掻き分けてちょこまかとまろび出して来たは、マルランドである。
「あっ……ルビスさまはどこに……シフィルさまは御存知ないのですか」
「しかしルビスはあなたがたといっしょだったのでは」
「いいえ、ランデールに降りられたのです。クリプトカリオンさまを見つけて……」
「ルビスなら、魔峰に向かったわよ」
振り返った者たちは、いじけたように隅に座りこんでいたカラを見つけて驚いた。
「大地の剣を、旦那に届けるんだって言ってたわ」
「……おお！」
マルランドは貧血を起こしてよろめき、傍らのツクナレとニアサエを巻きこんで倒れた。
「おうい誰か。女のひと。このひとを診てやってくれ」
低い男の声がした。谷から来た逞しい体軀の男の腕に助け起こされ、蒼白な顔で苦しげに息をついているのは、豊満な美女である。

「なんじゃ、マタ・マタ」
森の長老と握手を交わしていた谷の賢者は、からかうように言った。
「着くや否や病人の面倒見か。おまえもほんとうにマメじゃのう」
「生まれかけてる」
と、マタ・マタは言った。
「赤ん坊だ」
「えっ、なんですって！」
たちまち息を吹き返したマルランドが突進した。マタ・マタを押し退けるようにして、女の傍らに座りこみ、その腹に手をあててうなずいた。
「なるほどお産だわ。それももうすぐ。……ちょっとニアサエ、ぼーっとしないで、お湯を持って来て！　ツクナレ、あんたはきれいな布よ。さっさと探して来てちょうだい」
「だってマル伯母ちゃん、そんなものどこに」
「いいから行って！　ほら、カラさまもいっしょに！　……ああ、ちょっと男のひとは見ないでくださいよ。ちょっと、谷のお爺さん、あんたも男でしょ、あっち行って！」
甲板のひとびとはみな困惑し、緊張して立ち尽くした。人垣の真ん中で、マルランドの膝に頭をもたせかけた女は、ようやくうっすらと眼を開いた。
「……たし……あうっ……」

「しっかり！　……まったくとんでもない時だけど、おめでたなんだから。痛いのはしょうがないのよ。気を確かに持って！　ちゃんと産んでちょうだいよ！」
女はうっすらと微笑んだが、いかにも儚かった。
何かを思いだしたかのように顔を背けるマタ・マタの腕を、パフ・パフがそっと支えた。

このころ、ンドゥロとピパ・ピパは、ランデールの町の上を飛んでいたのだが、彼等を乗せた鳥が急にぴくりと頭を動かした。
「どうした？」
口に出したとたん、チズルムは傍らの空を駆け抜けるラーミアの群れに気づいた。
巨鳥は、途、ヴェリダヌスを目指しているらしい。彼等を運んでくれている一羽も、なんとも落ち着かなくなった。仲間といっしょに、行きたいのに違いない。
谷の男と少年は、顔を見合わせた。
「オーブに向かってるね」
「ああ……どうしたのかな」
しかし、ふたりとも、もはや戻ってもしかたのないことを知っていた。
遠く、海上に朧な白線が見える。出航してゆく舟の引く白波であろう。一刻も早く追いつかなくてはならない。今を逃せば、このまま置いてゆかれてしまう。

「悪いが――」
チズルムは鳥の肩のあたりを叩いて囁いた。
「頼むよ。もうあとちょっとなんだ。俺らを降ろしてからでも、追いつくだろ？」
鳥は、くう、と短く啼くと、すぱりと思いきった様子で、その頭を前方に戻し、ひときわ強く羽ばたきはじめた。

（……このひとは保たない。きっと、死んでしまう）
マルランドの丸い頬がキュッと緊張した。彼女は女の手を取って、揺すりながら、訊ねた。
「あなた、どこのひと？　この子の父親はいっしょじゃないの？　あなたの名前は？」
乾いてひびわれた唇を女はやっと開き、かすかなかすかな、ほとんど聞き取れぬほどの声で囁いた。
「……の――……ざん……ばらむ……ん……っ!!」
女の手がマルランドの胸倉を力任せに摑んだかと思うと、不意に力尽きた。そして、瞬後。元気のいい赤ん坊の泣き声が、船いっぱいに響き渡ったのだった。
「あんた！　あんた、しっかりっ!!　……ちょっと、あ、あんた、ほら赤ちゃんお願い……しっかりしてっ!!」
意識のない女を揺するマルランドから、いきなり赤子を手渡されたのは、たまたまふらふ

ふと通りすがった、どこか眼の焦点の合っていない、暗い表情の娘だった。
「……赤……ちゃん……？」
自分の腕の中で、火のついたように泣きじゃくる皺だらけのものに眼を落とし、娘は、ドキリとした。が、やがて、ぎこちなく微笑む。不器用に、だが、いっしょうけんめいに、赤子を揺すってあやしはじめる。
「よしよし……そう。生まれたの……こんな時に。こんな時にねぇ……」
帆に使う予定の布を分けてもらって戻って来たカラ・セミアクィルスは、生まれたての赤子を抱いた狐火の精の姿を見て、ハッと立ちすくんだ。
「……アリナ！」
「見て、カラ。元気な子よ。ほら、男の子。なかなか利かん坊さんだ」
アリナは顔をしかめると、赤ん坊を揺すり立て、つぶやくように続けた。
「……死のうと思った。気が変になっちまうかとも思ったよ。だけど、どういうわけか、ダメだった。助かっちまった。あたいもほんとにバカだ。どうしようもない奴だ。……たとえばこの子のおっかさんの代わりに、あたいが死ねれば良かったんだけどねぇ」
「そんなこと言わないでよ。あんただって、どうしようもなかったんじゃないか」
「ねえ、カラ。この子、育てようか」
静かに零れた涙を拭わぬまま、アリナは言った。

「あたいたちみたいなバカな女にひっかからないように、よっく教育してやろうよ、どお？」
「……アリナったら……」
滲む瞳をそっと逸らしたカラは、ふと、沈みかけた陸地を見つめ、そのまま凍りついた。
「……山が……!!」

甲板に出ていたひとびとは、みな見た。
このような遠くまでも明々と照らすほどの炎をあげ、崩れてゆく魔峰の姿を。
その項上から、最後の一瞬、暗黒の天空を剣のような一条の光が……巨大な不死鳥の姿をしたものが、駆け抜けていったのを。
光のラーミアの軌跡から雲が割れ、青空が覗いた。たちまち太陽光が降り注ぎ、その神々しい力で雲を追い散らした。長い闇に慣れたひとびとは、眩しくてはっきり眼を開いていられなかった。が、翳した指の隙間から、みな懸命に見届けた。
海に飲まれて、打ちつける氷に覆われ消えてゆく、彼等の故郷を。
そして、一羽のラーミアが、谷の男と少年を乗せた、最後の鳥がゆっくりと羽ばたきながら甲板に降り立った。

終章

……神話は語る。

この船によって逃れ来たりしものたちこそが、今日この世にあるわれわれの遠い祖先であると。地上に降りた彼等は人間たちと交わり、世界に広がった。今でも時折、五大家の尊い血の魔力を強く受け継いだような子が生まれるのは、これゆえである。

われわれの知る精霊神ルビスとは、この時、その夫と共にその仇敵を追い落としながら自らも火口に飛びこみ、その生命を贖って、世界の崩壊を阻もうとした少女の、遥かに後の姿である。

オーブ火口は地上に通じていた。地上には、天の黒金剛石ブラック・オーブを切って邪悪になったものと、その怪物を追いかけ、悪より解放してやるべき使命を帯びた勇者も、また、共に下ったことになる。この長いものがたりからわかるように、両者は、肉親であり、いずれも黒竜の一族に属している。

ミトラ神は、ルビスをこの時より地上の母神となし、彼等の定めに巻きこまれ犠牲となっ

たものたちを弔うよう、イデーンの忘れ形見である我等を手厚く庇護するよう仰せつけになり、光のラーミア・六つのオーブと共に、地上に遣わされた。

善と悪との骨肉の争いが終結する時、ルビスに初めて、安息が訪れる。その時こそ彼女は、またひとりの純真な少女に還って、愛するものの腕に抱かれ、奪われた安息の眠りにつくことができると伝えられている。

黒竜の一族の闘いはいまだ終結してはいない。天の黒金剛石を砕きてブラック・オーブの禍を受けしものは、分裂して、世々に蔓延った。イデーンであったことはすべて忘れたまま、その呪われた生命を長らえている。精霊とひととの混血の青年は地上にあっては齢短く定められ、幾度も生まれ変わって、その使命を果たさんとしている。世に勇者と呼ばれるものたちは、みな彼の末裔であり、また彼自身である。彼等は朧気にしか知り得ないが、みな、こころの奥にロトであることを秘めているのである。

が、それはまた、別の物語である。

——完——

〈この小説は、一九九〇年二月に発行された『ドラゴンクエスト精霊ルビス伝説[下]』を文庫化したものです〉

—文庫化特別企画—

久美沙織

いのまたむつみ

対談



カット／むつみ&くみ

キャラの名前の秘密は……

久美沙織（以下久——）——読み直せば読み直すほど登場人物多いよね、この話。いのまたむつみ（以下い——）——（笑）多いよね。最初さぁ、あの家系図を見ながらこの人はどれだっけかなぁとか。

久——すいません、ご苦労をおかけしてしまって。わたしも、こんなに多くなるとは思ってなかったんだけど、書き出したらこんなになってしまって。いのまたさんは、美形の若いヤツが描きやすいとか、実はじじいが描きやすいとかあります？

い——じじいは描きやすいですね。若くて美形だとわりとみんな似ている感じがするでしょ、だから描いてみるとそんなに何種類も描けないいんですよ。個性豊かなじいさまとかばあさまのほうがいろいろと。

久——うーん、なるほど。わたし別に画家さんのことを思って描写したつもりはないんだけど、若いのは若いなりにバリエーションつけたと思わない？

い——ははは、そうだね。

久——髪の色をかえたり、星のあざがあるとか……。わたしはダトニオイデスがすごい好きで贔屓（ひいき）だったんだけどねぇ、最後は、どうして好きなヤツほど悲惨な目にあってしまうんだ

ろうか。

い――そっかー。

久――あのへんのキャラと比べるとディアルトって弱いんだよね。

い――そうなんだよね。わたしはねぇ、クリプトが好きなんだ（笑）。ふられちゃったけど。

久――あいつはやっぱりふられなくちゃ（笑）。いのまたさんにいったっけ？　出てくる人たちの名前はおさかなの名前なんだって。

い――えっ、知らない、トカゲの名前かなぁと思ってたの。

久――違うの、あのね熱帯魚の名前とかがほとんどなの。ルビスっていう名前は決まってるでしょ。ルビスはルビーから赤っていうように決めて、そこから五大家の人たちを決めていったの。だから、当主の人たちって宝石の名前のもじりなのね。エメラルドからミラルダというようにして……。

い――なるほど、そうだったんだ。

久――でもそうやって決めていったらあとが困っちゃったわけ。それでそばにあったうちの旦那（だんな）さんの熱帯魚雑誌とか開いてたら、ダトニオイデスっていう魚がいて、なんかかっこいいなぁと思って、じゃあこれにしようって（笑）。ダトニオイデスは割とずんぐりしてて縞（しま）が入ってて喧嘩っぱやい魚なのね。クリプトカリオンって魚の病原菌の名前なんだよ。

い――えー、病原菌なの（笑）。

久──でもそのうち使えそうな魚の名前がどんどんなくなってきて、カメとかカエルとかいろいろ使ってるの。マタマタはカメで、ピパピパはカエルなんだ。
い──あー、なんかカエルっぽいよね。
久──これって、知らないとまずわからないけど、おさかなを好きな人だと、名前を読むと魚の顔が思い浮かんでしまうという（笑）。あとはチャカチャカはなんだっけな？　ヤベ・ヤベはただの冗談なんだけど（笑…上製本版のあとがき参照）。
い──誰か気づかなかった？
久──うん。誰もいなかったみたい。マタマタやピパピパは「わくわく動物ランド」とかに出てきそうだけどなあ……でも、そこまで考えないか。
い──そうだね、結びつかないかもね。
久　──あっ、そんでドンコっていうのはすごく大きなナマズでねぇ、エサキンっていうのは、ほかでもないエサにする金魚のことをあの業界ではエサキンっていうの。だから生まれたときからかわいそうな運命にあったのかも？
い──あれ、ナマズも飼ってるの？
久　──うーんとね、うちにいるのはね、プレコトムスがいたんじゃないかな？　プレコトムスっていうのは属の名前だからプレコトムスなんたらっていうのが、いっぱいいるんだけど、

戦闘機みたいな格好してて、コケをよく食べるいいヤツなんだよ。水槽の内側をきれいにしてくれるの。
（注…ちなみに久美・軽井沢宅には熱帯魚はもとより、犬、猫、うずら、きじ、トカゲにいたるまで、小さな動物園よりもたくさんの生き物が棲息している。旦那さんは今度鷹を飼うつもりらしい）
い――そんな便利なヤツがいるんだ。
久――あと、アイツがいる。この話ではほとんど重要な役割をはたさせてもらえなかったクリプトカリオンの兄ちゃんのスクレロパゲスっていうのがうちにいる。いのまたさん、ネコしか飼ってないの。
い――うん。
久　ネコはもう、大人？　でも、原稿の上歩くでしょ。
い――歩くよ（笑）。

両家のネコたち

久　どうすんの、おしおきするの？
い　おしおきしてもよくわからないみたい。歩いてるとき「コラ」とか言うとダーッと逃



げるんだけど、逃げるときにグッと踏むから被害が悪化するんで、「だめ、だめだよ」とかいってそっと退けないとだめなんだよね。一番困ったなあと思うのはね、薄い色のときはまだなんとかなるんだけど、黒い色とかを踏んだ脚でどうやらあちこちを動き回ったらしい跡とかあるときが、悲惨だな。

久――「絞めたろかー」って思わない？

い――ははは、そうだね（笑）。だから、絵の具塗るでしょ、それで乾くまで時間がかかるからその辺に置いといたりすると、あとで見ると踏まれてて背景とかならまだいいんだけど、顔の上とかだと修正が利かないからプルプルプルってなる。

久――描いてるときとかは寄ってこないの？　ネコとか動いてるものが好きじゃない。

い――あっ、くるよ。寄ってくるからうるさそうに退けると、いすの隙間に縮まって我慢している。

久　我慢してるんだ、えらいなあ。うちの小さいほう

のネコなんかバカでね、電話してると絶対寄ってくるのね。電話機の上を歩かれたりして切れちゃったりする。

い――うちは、よくFAXの上を歩かれて知らない機能がセットされちゃったり、どうも知らないところへ電話をかけちゃったりしてるみたい。

久――えっ、知らないところへ電話して、相手が「もしもし」といって「にゃおっ」とかいってるのかな(笑)。

い――FAXってどこにかけたか管理レポートとか出てくるでしょ、するとどう考えても知らない番号があったりして、そういうのに限って妙に分数が長かったり、なんだったんだろうこれはと思ったり。

久――ちゃんと通じちゃったりするわけだ。

い――そういうときもあるんじゃないかな? だから今はFAXの上に、ネコにボタンを踏まれないように堅いものを置いてるの。

久　うちはね、イヌとネコがいるからね、どっちかだけなら対処のしようがあるけど、イヌは垂直方向は弱いし、ネコはそんなに力がないからね。机の上に置いておいた大事なものをネコが落としてイヌが嚙(かじ)って壊すとか。合体してやられるとねぇ。ネコってこっちの気分をすごく読むよね。こっちがすごいカリカリしてるときって近づいてこないでしょ?

い――そういうときは「お前はこういうときのための愛玩(あいがん)動物なんだ」といってね、無理や

り遊んでしまう（笑）。

久――前にね、すごくネコがキッーってなっちゃったときがあって、考えてみると自分の仕事の修羅場だったんだけど。修羅場の時ってなんかまめにお風呂入らなかったり、パジャマのままでいたりするから、なんか匂いでわかるのかなと思って、一生懸命お風呂はいって、「ほうら、いいだろおいで」ってやっても全然だめなの。そんで原稿終わって、まだ汚い状態で「あー、終わった」ってやっているとネコが「にゃん」って擦り寄ってくるの。テレパシーだなって思った、あれは。

い――そういうのって、あるよね。

やっぱり猫がすき

久――どんなわるさされてもさ、「にゃん」って擦り寄ってこられると、「あー、お前は可愛い可愛い」ってなっちゃうよね。

い――にくたらしいってばないけど、そうなんだよね。そんでうちはいじめの構図っていうのがあって、うちのネコは二匹、大きいのと中くらいのといるんだけど、大きいほうがふによんとしてデブなんだけど人間のいいなりになっちゃうのね。本当はムカムカするらしいんだけど。手とか捕まえて散々ぐちゃぐちゃいじったあげく、こっちが仕事しなきゃとか思っ

てポイってして、するとネコのほうはストレスがたまったらしくって、もう一匹のところへいってそいつをいじめるわけね（笑）。そうするとそのネコは自分のストレスのはけぐちがなくなるから、どっかちがうとこでおしっこしちゃったりして、結局わたしにまわってくるんだよね。

久——ちゃんと三竦(さんすく)みになってるんだ。

い——なんかそういう構造になっている（笑）。

久——やっぱりイヌやネコは大変だ。熱帯魚とかはね、ヒーターが壊れちゃったらすぐ死んじゃったりするけど、基本的にね、ただほったらかしとけばいいしね。

い——エサって時々あげればいいの？

久——うん、時々あげればいいヤツと、コケ食べるヤツとかはほとんどほっておいても大







丈夫。そのスクレロパゲスなんかね美食家でね、好きなのはねエビとねアサリとね、なんかそういうものを食べる。だから見ててなんか美味しそうだよ。最初の頃コウロギとか食べてた頃には、そんなもの気持ち悪いから美味しそうに思わなかったけど、エビだのホタテだのアサリだのしかもむき身のやつを食べてるから、まるまると太ってきたなとか思って、ちょうど一人分にいい大きさになってきたの（笑）。

い　―食べれるの？

久　―食べれるらしいよ。現地じゃ食べてるらしいから。こんなに大きくなるんだって（両手を広げたくらい）。それが六匹もいるんだ。

い　―（外をみて）うわぁ、ずいぶん雪が降ってきたね。

久―積もるのかなぁ。

い　―ネコにおしっこされてしまったフトンを乾かさなきゃいけないのに……。

（92年1月　大雪の新宿にて）

久美沙織

岩手県生まれ。長野県在住。犬2猫2栗鼠2その他の母。小説家。『プラトニック・ラブ・チャイルド』『きみの瞳にギャラクシー』『ガラスのスニーカー』『抱いてアンフィニ』『薔薇の冠　銀の庭』『丘の家のミッキー1〜10』『SPEAK　EASYの魚たち』『あけめやみ　とじめやみ』『MOTHER』『風をつかまえて』『碧い宝石箱』『ドラゴンクエストⅣ』など著書多数。

ドラゴンクエスト
精霊ルビス伝説 下
魔の山オーブ

1992年3月19日　初版発行

著　者　久美沙織
協　力　横倉　廣

●　●　●

発行人　福嶋康博
発行所　株式会社エニックス
東京都新宿区西新宿7−5−25
西新宿木村屋ビル3F
営　業　☎03(3369)8982
書籍編集　☎03(3369)7200
印刷所　加藤製版印刷株式会社



Dragon Quest NOVELS

ドラゴンクエスト —

精霊ルビス伝説 下

魔の山オーブ

久美沙織

エニックス文庫

ノベル

ドラゴンクエスト
精霊ルビス伝説 下
久美沙織
エニックス文庫

EB40

P450

9784900527867

1910176004506

ISBN4-900527-86-6

C0176 P450E

定価450円(本体価格437円・税13円)

エニックス文庫 EB40

魔峰オーブの爆発、それは様々な方向へと暗闘の渦を広げていった。果たして、イデーンの崩壊は誰にも止めることはできないのであろうか？ラーミア、オーブ、ロト伝説における大きな謎に迫る！　語り継がれてきた伝説の書、最終章。

イラスト／いのまたむつみ